

近代日本における植民地旅行記の基礎的研究

——鮮満旅行記にみるツーリズム空間——

米 家 泰 作

1. はじめに

近代の日本人による植民地への組織的な旅行、あるいはコロニアル・ツーリズムの展開において、朝鮮半島と中国東北部は、台湾とともに代表的な旅行目的地であった。日本の植民地となった朝鮮や関東州、および植民地に準じる「満洲国」は、近代の日本人が体験しうる海外旅行のなかで最も身近な地域であり、「視察」や「研修」、あるいは「修学旅行」の名目で多くの人々が訪れていた。「鮮満」（あるいは「満鮮」）と略称された朝鮮半島と中国東北部においては、航路・鉄路や宿泊施設の整備が進展することで、旅行者にとって周遊しやすいツーリズム空間が形成され、「鮮満ツーリズム」というべき事態が展開していた。小稿は、こうした鮮満ツーリズムのなかで日本人が残した旅行記に着目し、そのまとまった目録を示すとともに、旅行記の資料的意義を検討した上で、旅行の目的や形態、訪問地など、ツーリズム空間の広がりに関して基礎的な分析を行うものである。今後、筆者としては、旅行記に表れた近代日本の心象地理の歴史地理にアプローチする予定であり¹、小稿はそのための準備作業としての意味を持っている。

日本の近代的なツーリズムの展開において、海外旅行が占める割合は高いものではなかったが、決して珍しかったわけではない。1924年創刊の旅行雑誌『旅』は、刊行時から鮮満や台湾への旅行を特集していた²。高 媛が端的に指摘するように、日露戦争時に膨らんだ満洲の利権や資源への関心は、同戦後に満洲を戦地から観光地へと変えていった³。白幡洋三郎の表現を借りれば、若いインテリ（学生）が東アジアへの「大陸旅行」を通じて「一種の人格形成を図ることがあたりまえようになっていた」のである⁴。また有山輝雄は、朝日新聞社が企画した1906年の「満韓巡遊」に着目し、これが修学旅行や教員の旅行を含めた鮮満への旅行ブームの発端となったこと、また

旅行者の旅行体験が実際には現地の人々から隔離されたものであり、もっぱら帝国日本の意識を高める役割を果たしたと議論している⁵。朝鮮の観光化を概観した李 良姫や、朝鮮と満洲のガイドブックの表象を分析したK・マクドナルドも、日本の帝国主義や大陸拡大主義を正当化する解釈が支配的であったと指摘する⁶。近代日本における鮮満への旅は、植民地とそれに準じる地域への組織的な旅行、すなわちコロニアル・ツーリズムを形成するものであり、帝国主義を前提とした自国と他所の理解を（再）生産するものであったといえる。

以上の諸研究は、近代日本における鮮満ツーリズムの基本的な性格を概観する役割を果たしているが、より具体的な研究によってそれを支える作業は、必ずしも十分に蓄積されているわけではない。文学史の分野では、鮮満を訪問した田山花袋や夏目漱石、高浜虚子、与謝野鉄幹といった作家や評論家の旅行記に光が当てられ、帝国主義や植民地主義との関わりが重要な焦点となっている⁷。しかしそれらの研究では、個々の文士の文学的評価が議論の中心となる傾向が強く、それぞれの鮮満の旅を当時のコロニアル・ツーリズムの動向のなかに位置づける視点に乏しい。ほかにも作家や評論家以外の知識人の旅を採りあげた研究もみられるが、やはり個々の人物の思想が議論の焦点となる傾向が強い⁸。

一方、教育史の分野では、高等教育における修学旅行や、教員の研修のための鮮満の旅の実態が、検討されるようになった。長 志珠絵は教育界における「鮮満視察」の趨勢を概観した上で、1939年の奈良女子高等師範学校の事例を詳しく検討し、その「帝国の視線」を分析している⁹。より早い時期の事例としては、日露戦争直後に文部省が募集した満韓修学旅行を採りあげた高 媛の研究や¹⁰、山口高等商業学校の修学旅行に着目した阿部安成の研究が注目される¹¹。また宋 安寧の一連の研究は、教員の鮮満視察旅行に着目し、特に地方の教育会が果たした主導的な役割を浮き彫りにしている¹²。ほかに興味深い試みとして、地理学の内田忠賢が東京女子高等師範学校の1939年の大陸旅行を採りあげ、存命の参加学生への聞き取りを行っている¹³。以上の諸研究は、教育界における鮮満の旅が、文部省や陸軍、南満洲鉄道の後押しによって、日露戦争の直後から始まったことを示しているものの、個別事例の検討と教育上の意義が議論の中心となる傾向が強く、他の形態の鮮満ツーリズムとの比較や、

時期による変化については、必ずしも論点になっていない。

以上のように、これまでの分析の多くは、専ら文学史や教育史の観点から為されており、それぞれ重要な知見が示されているものの、文学や教育以外の鮮満ツーリズムへの関心は弱く、コロニアル・ツーリズム全体のなかで個々の旅行例や教育の果たした役割を位置づける視点は十分ではない。とりわけ分析の盲点となるのが、個々の旅行例における訪問地の選択と旅程の構成を、どのように評価するかという問題である。この問題は、個々の旅行例の事例研究から解けるものではなく、ツーリズム空間の広がりや展開を参照枠として把握することが前提として必要となる。その意味で、地理学の荒山正彦が展開している複合的なアプローチは、ツーリズム空間の把握を志向している点で示唆に富む¹⁴。荒山の一連の研究は、まず東京鉄道局が主催した1931年の団体旅行「鮮満の旅」の分析から始まり、1930年代の旅順観光におけるナショナリズムの検討、1929年～1931年の日本(日支)周遊船の分析、ガイドブックやリーフレットが示す都市観光や旅程の検討へと展開している。一方、旅行する側ではなく、旅行先そのものに焦点を絞った検討はこれまで少なく、フィールドワークを交えて釜山近郊の東萊温泉の近代を浮き彫りにした竹国友康の仕事は、数少ない例外といえる¹⁵。

このような研究状況を鑑みれば、近代日本における鮮満へのコロニアル・ツーリズムを検討するためには、個々の旅の事例分析を積み重ねるだけでなく、より全体的なツーリズムの動向とツーリズム空間の広がりを把握することが求められる。というのも、作家の旅であれ、修学旅行であれ、教員の研修旅行であれ、鮮満ツーリズムの展開のなかに位置づけてこそ、时期的な変化や個々の旅の特徴が浮かび上がってくるからである。その点で、各時期のガイドブックが示す旅程や代表的な観光地は、荒山が示唆したようにそれぞれの時期の鮮満ツーリズムの傾向を反映していると考えられるが、実際の旅行者がどのような旅程を選択したのかは、必ずしもガイドブックから立証されるわけではない。そこで小稿では、出版された鮮満への旅行記を「鮮満旅行記」と呼び、これをできるだけ網羅的にリストアップした上で、鮮満ツーリズムの主体や旅行形態、旅程と訪問地に関して、全体的な傾向を明らかにする。その作業を通じて、旅行主体や時期によるツーリズム空間の差異や特徴を示すとともに、今後の研究課題を整理したい。

2. 対象とする鮮満旅行記とその出版動向

(1) 対象とする旅行記の選定

小稿では分析対象とする鮮満旅行記を、次のような手順でリストアップした。まず近代の朝鮮半島や中国東北部に関しては、すでに先学によって整備されている様々な文献目録を参照した。朝鮮半島に関しては、櫻井義之の『朝鮮研究文献誌』が「地誌・紀行」の項に旅行記を収録している¹⁶。また末松保和『朝鮮研究文献目録』も同様に「地誌・紀行」の項を設けている¹⁷。両者と内容はほぼ重なっているが、洪慶姫『日本에서發行된韓國地理關係 文献目録』の「紀行・観光」の項も参照した¹⁸。中国東北部に関しては、東洋文庫の『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』が、各旅行記の訪問地にも言及しており、小稿の関心に先んじる文献案内として有益であった¹⁹。さらに幾つかの文献目録を参照した上で²⁰、国立国会図書館の蔵書検索より鮮満旅行記と思われる文献を加え²¹、約 300 点の候補を得た²²。

それらの候補を通読した上で、小稿では次の 4 つの条件を全て満たすもの 175 点をリストアップし、分析の対象とした。

- ・＜対象地域＞ 日本から朝鮮半島と中国東北部のいずれかまたは両者を周遊した旅行記を採る。特定の地方や都市のみの訪問記は採らない²³。また、鮮満あるいは中国に在住する日本人が鮮満内を訪問した旅行記は採らない²⁴。
- ・＜対象期間＞ 日露戦争が終わり、関釜航路や京釜鉄道が通じた 1905 年から、アジア太平洋戦争が終結した 1945 年までに行われた旅行を記したもので、かつこの期間内に刊行された旅行記を対象とする。日露戦争以前にも鮮満旅行記が無いわけではないが、交通網の発達がコロニアル・ツーリズムの展開に大きく影響したと考えた。また、この期間の旅行体験を期間後になってから刊行した例もあるが、体制の変化が執筆の姿勢や内容に影響した可能性は無視できないため、ここでは対象としない。
- ・＜旅行記の形態と構成＞ 原則として単行本を対象とし、雑誌に掲載された旅行記は採らない。ただし、雑誌の別冊として独立して刊行されたものは採る。なお単行

本が旅行記だけでなく、自伝や随筆、評論、報告などを合わせて構成される場合であっても対象とした。

- <明示的な旅程> 旅程すなわち日程と行程が明示された旅行記を採る。具体的には、日記の体裁で書かれているか、旅程が冒頭や末尾にまとめられている旅行記が対象となる。通信文の体裁で書かれているものや、印象的な訪問地のみを選択的に書き綴っている旅行記は、旅程が断片的にしかたどれず、訪問地を分析するのに適していない。そのような旅行記は随筆や随想に近く、旅行体験と著者自身の心象地理形成の連関が曖昧になるため、著名なものであっても除外した²⁵。

以上の条件にかなう 175 点は、小稿末尾の付表に示した通りである。この付表では、書誌的な情報のほか、旅行日数（朝鮮半島・中国東北部それぞれの滞在日数）、旅程、備考（著者の属性や旅行者の数）を整理した。また 1 点の旅行記に複数の旅行が記載されている場合は、それぞれ付表に含めた。そのため旅行の件数は 179 件に上る。以下では、付表に収録した文献については、[# 文献 ID：頁] の形式で引用する。

（2）鮮満旅行記の出版動向

これら 175 点の資料的な性格を検討するため、出版年代と著者の属性を図 1 に示した。多くの旅行記は旅行後 1 年以内に出版されていることから、この図 1 が示す出版点数の増減は、鮮満旅行の増減をある程度は反映していると同時に、読み物としての

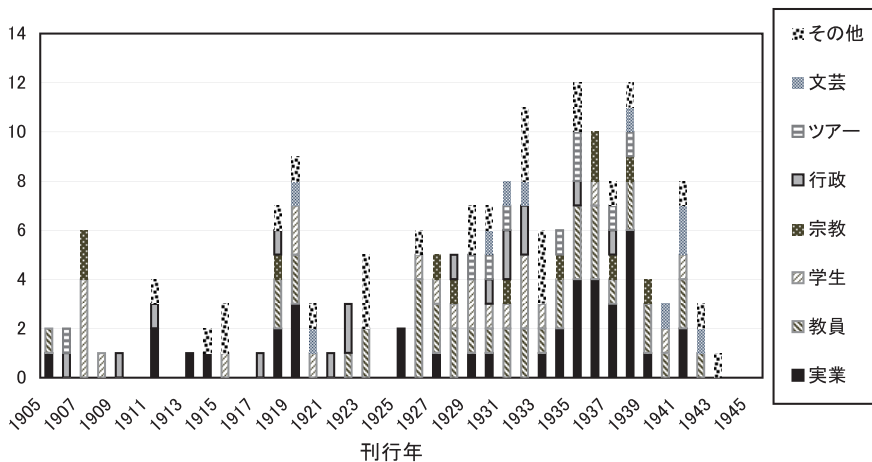


図 1 鮮満旅行記の出版点数

鮮満旅行記の供給と需要を反映しているとみることができる。

まず全体としてみれば、鮮満旅行記の出版は1925年から1940年頃に大きく集中しており、それ以前の時期については散発的に小さなピークがあるに過ぎない。張作霖爆殺事件（1928年）から「満洲国」建国（1932年）を挟み、満洲への日本の関心と関与が大きく高まった1925年から1940年までの15年間は、鮮満ツーリズムの最盛期であったといえる。

この最盛期以前においては、1907年および1918年～1919年に短期間のピークがあるものの、出版点数が持続的に増加しているとはいえない。序章で触れたように、先行研究は日露戦争後に鮮満旅行が盛んになったことを指摘してきた。それは1907年のピークに表れているように決して誤りではないが、ツーリズムとして大きく展開するまでは、さらに約20年が経過するのを待たねばならなかったといえる。その意味では、第1次世界大戦が終結する頃の1918年～1919年のピークは、鮮満旅行が大衆化する兆しであったとも考えられる。同時期の東京帝大の学生の旅行記[#31]には、「植民地研究の念は、学生間に於ても益々盛んになり、就中之が実地見学の為め鮮満地方へ旅行する者逐年増加するの傾向ある」とする新渡戸稲造の序文を見ることができる。しかし、朝鮮における三・一運動（1919年）や満洲における寛城子事件（1919年）など、鮮満の抗日的な政治情勢が不安材料となり、ツーリズムが勃興する流れが断ち切られたとみることもできるだろう。

これに対して、1925年から1940年にかけては、鮮満旅行記が多く世に出版された時期であり、旅行記の執筆者は、すでに他の著者が様々な鮮満旅行記を出版している状況のなかで、自らも執筆に取り組んだことになる。執筆の理由としては、旅行自体が教育・行政・経済・宗教に関わる何らかの組織や団体の意向で為されている場合に、その報告の意味合いで書かれていることを明示あるいは示唆するものが少なくない。そのほか、なぜ敢えて旅行記を執筆するのか、理由づけを行っている例も散見される。例えば、敦賀の医師、島 房男は「既刊の著述も二三に止まらざるが故に坐らにしてそれ等の土地の智識を獲得するに少しも不便を感じぬのである。何を苦んでほんの満鮮の一小区域を僅々二十日にも足らぬ日子を以てした慌ただしい旅行でありながら不徹底此上もない紀行を書きつづりて世に示す必要があらう」と自問する[#72]。

1]。また加賀久谷陶磁器同業組合長であった松本佐太郎は、「鮮満北支に関しては従来あらゆる種類の著書が多いのに、頼まれもせぬ物好きな随筆など、今更ら事々しう書かずもがなとも思うたが、私には私だけの見地があり、また別個の感想も取得もある筈」と序文に記した [#153: 3]。このことは、たとえ他の旅行者とたいして変わらないものであっても、自分の体験を書きとどめておきたいと願う素人の手になる旅行記が多かったことを物語っている。自家出版が散見されることも、周囲に自身の旅行体験を伝えたいとする自発的な意志の表れとして理解することができよう。逆に詩人の春山行夫は、旅行記や案内記を探したが、案外良いものが少ないとして、彼の目にかなったものを幾つか推薦している [#163: 3]。

しかし1940年代に入ると、第2次世界大戦への日本の参戦（1941年）があり、観光の意味合いをもつ旅行は衰退し、鮮満ツーリズムも一気に縮小したとみられる。経済誌『ダイヤモンド』を創刊したジャーナリストの石山賢吉は、1942年の段階で満鮮紀行を書く価値が乏しいことを自覚し、「今頃になつて、朝鮮、満洲へ初めて出掛けるなんて、間抜けて居る。全体、お前は、何処の国人だと問はれても一言もない」[#172: 3-4]と自嘲している。付表に収録した鮮満旅行記も1943年の1点が最後であり、1944年、1945年になると旅行記自体が出版できるような状況ではなくなったといえる。

（3）旅行の主体

175点の鮮満旅行記には、先行研究で重視されてきた作家の旅行記や参加者募集型の団体旅行によるもの、あるいは高等教育の修学旅行や教員の旅行によるものなど、旅行の主体によって幾つかの類型に分けることができる。そこで図1では、実業家の旅（実業）、教員の旅（教員）、修学旅行など学生が主体の旅（学生）、慰霊や布教など宗教家の旅（宗教）、役人や政治家の旅（行政）、参加者募集型の団体旅行（ツアー）、作家や芸術家の旅（文芸）、それ以外および著者の属性が不明な場合（その他）の8類型に分類して示した。以下、それぞれの動向を見ておこう。

先行研究では、有山が特筆したように、1906年に朝日新聞社が主催した団体旅行が、鮮満旅行ブームの嚆矢だとされる²⁶。その旅行記は同年に発刊されているが[#4]、

旅行記の出版点数をみる限り、団体旅行（ツアー）自体が直ちにブームになったようには受け取れない。ツアーに分類される旅行記が次に確認されるのは1929年に下関鮮満案内所が企画したものであり〔#73〕、その後は鮮満ツーリズムの最盛期にあたるためか、荒山が着目した東京鉄道局のもの〔#88〕や²⁷、日本旅行協会（JTB）主催のもの〔#83, #115, #117〕など、幾つかの例が確認できる。その意味で、朝日新聞社の団体旅行は、同種の団体旅行を直ちに生み出すきっかけになったわけではなく、むしろ教育や経済など組織を母体とした他の種類の旅行を誘引するきっかけになったと考えることができる。

1907年から旅行記の事例が確認される学生の旅（学生）はその代表であり、単独や少人数の旅も含まれるが、多くは高等教育機関の修学旅行の形態を取っている。先行研究が指摘するように、1906年に文部省と陸軍が奨励することで、鮮満への修学旅行が盛んとなったことを受けて²⁸、1907年と翌年には、高等師範学校〔#8, #9〕のほか、学習院〔#10〕や中学校〔#11〕、寄宿舎の例〔#7〕が確認される²⁹。ただしその後は他の類型と同様にいったん沈静し、1918～1919年の小さなピークと1925年～40年の最盛期において、再び散見されるようになる。こういった動向は、鮮満旅行記全体の動向と合致しているといえるが、修学旅行の場合、必ずしも旅行記が公刊されるわけではなく、教育上、旅行体験を文章化する機会があったとしても、その多くは学校内で止められていた可能性や、単行本とするのではなく教育界の雑誌を利用して公表された可能性も高い³⁰。長によれば1930年に鮮満を視察した学校団体は213あったとされるが³¹、付表のうち同年の修学旅行記とみられるものは1例〔#87〕に過ぎない。従って、図1が示す点数が実際の修学旅行をどれほど反映しているのかは、なお留保が必要であろう。ただし、1930年代後半から学生による旅行記がやや乏しくなっているのは、そのような旅行を実施しづらい情勢を反映している可能性もある。1941年に実施された馨親会による学生の団体旅行では〔#171〕、満洲現地の軍部より学生の団体旅行を禁ずる厳達文が文部省に届いていたために、形式上、個人旅行の形をとって実施されたという。

一方、学生を引率するのではなく、教員のみが「研修」あるいは「視察」する旅行（教員）は、修学旅行と同様に日露戦後から奨励されている³²。しかし図1によれば、教

員の個人的な旅行 [#2] を除き、公刊された旅行記として現れるのは 1918 年以降であり [#25, #30]、府県の教育会や教育関係者が団体を組んで「視察」する例が多い。鮮満ツーリズムの最盛期に入ると、1926 年から 1942 年にかけて毎年何らかの「視察」報告が出されており、教員自身が植民地への認識を深め、それを公表することが盛んであったことが窺える。とりわけ、福德生命保険会社の旅費支給による文部省推薦教員の視察は、1927 年から 1937 年にかけて毎年実施され、その報告書が刊行されており [#62, #68, #74, #89, #101, #105, #123, #133, #143]³³、相当数が教育機関に配布されたものと推測される。こういった「視察」を通じて得られた植民地と帝国の理解は、初等・中等教育の現場に還元することが期待されていたといえる。教員のなかには、企画された団体旅行に応募ないし参加するのではなく、個人的に出張を計画した例もあり、東京府青梅の磯西忠吉は旅行を行った後に、学校の生徒に配布するために旅行記を刊行した [#165]。

団体（ツアー）や学生、教員のほかに先行研究で着目されてきたのは、作家や評論家など文士の旅である。図 1 には広く詩人や評論家、芸術家によるものを文芸としてまとめて示しているが、全体的に点数は少なく、1919 年の大町桂月『満鮮遊記』[#33] や 1920 年の沼波瓊音『鮮満風物記』[#42] 以降、散見される程度である。実際には、日露戦後から文士の旅はみられ、紀行文も刊行されているのであるが、記録性よりも文学性に重点が置かれる傾向が強く、小稿が基準とする明確な旅程が読み取れないために、付表に入れることができなかったものが少なくない³⁴。そのため、作家や評論家の旅行については、小稿では必要に応じて言及するに止め、全体的な分析を控えておきたい。

以上の類型のほかに図 1 から浮かび上がってくる重要な旅行の主体は、実業家である。早くは 1905 年に兵庫県農会長の伊藤長次郎が朝鮮半島の拓殖事業を視察しており [#1]、主に農業・工業・貿易に関わる業界団体や地方の商業会議所などの経済団体が、代表者を派遣し、あるいは団体旅行を組んで「視察」を行う例が多い。実業家の鮮満旅行は他の類型とは時期的にも異なった特徴があり、日韓併合（1910 年）と「満洲国」建国（1932 年）の直後に、比較的集中して出版が重なっていることが判る。このことは、植民地におけるビジネスチャンスの検討を意識した旅行が多く企画され

たことを物語っている。日本海側の経済団体の旅行が散見されることも特筆されることであり、新潟 [#16]、鳥取 [#53]、敦賀 [#72] からの例のほか、地元経済界の関心に沿った富山の新聞記者の旅 [#106, #114] は、日本海を横断する交易の可能性が旅の主題となっている。また、1935年の満洲電気大会 [#121, #122, #131] や1927年・1936年の帝国鉄道協会の総会 [#60, #137] のように、業界団体の年次集会を鮮満で開催し、それに合わせて周遊団体旅行を組むケースもみられる。こういった実業家の旅は、「視察」を名目として行われ、炭鉱や農場、ダムといった産業施設への訪問が含まれてはいるが、同時に戦跡その他の史跡、温泉や歓楽街への訪問も組み込まれていることが多く、実際には親睦と観光も重要な目的であったと考えられる。それゆえ、こういった実業家の旅は、植民地の経済視察と観光を抱き合わせる形で集团的・組織的に行われており、鮮満のコロニアル・ツーリズムを構成する重要な類型であったと位置づけなくてはならない。従来の諸研究においては、李 良姫が積極的に言及しているほかは³⁵、実業家の旅はほとんど注目されていないが、日本各地の名士や経済人、あるいは富裕層による植民地体験を議論するために、今後、検討が必要な類型だといえる。

さて、ここまで言及できなかった慰霊や布教など宗教家の旅（宗教）、役人や政治家の旅（行政）、それ以外および著者の属性が不明な場合（その他）についても触れておこう。「宗教」の旅は点数が少ないが、日露戦争の慰霊を目的とするものが1907年からみられ [#5, #6]、ほかに仏教、神道、天理教の布教に関わる事例が散見される。「行政」の旅は、国会議員や地方自治体の首長・議員の「視察」旅行が目立つが、府県が組織した軍人慰問を主とする旅 [#125] も含まれる。「その他」としたものには、研究者やジャーナリストによるものが散見される。ジャーナリストによるものは、石橋湛山 [#164] や石山賢吉 [#172] のような全国誌の大物も含まれているが、むしろ地方の新聞記者が各地域の経済や行政の関心を反映した旅を行ったケースが多い。また研究者の旅として、地理学 [#57] や農学（養蚕）[#116, #175]、建築学 [#70, #92]、宗教史 [#135] からのものがみられるが、全体として点数は少ない。ただし建築学からの例は、仏教寺院を巡るものであり、通常の「視察」や観光の対象とならない地域を訪問している点で興味深い。

以上、小稿が設定した旅行主体の8類型について、それぞれの特徴を整理してきたが、最後に旅行者のジェンダーについて付言しておく。付表に収録した鮮満旅行記はほとんど全て男性が執筆したものであり、女性によるものは女子高等師範学校の修学旅行〔#162〕や女性教員が選抜された視察旅行〔#143〕を除けば、わずか4点に過ぎない〔#120, #134, #145, #170〕。その意味で鮮満へのコロニアル・ツーリズムは男性の旅という性格を強くもっており、随伴する旅行者に女性が含まれていたとしても夫婦というケースが多い。このようなジェンダーの偏りが旅行者の関心に偏りをもたらしていた可能性は、これまで十分に検討されていない課題である。それは例えば、平壤における妓生や哈爾濱の歓楽街におけるロシア人女性への関心として表れているだけでなく、重厚長大な社会資本や軍事活動に関心を奪われる一方で、日常生活文化や家庭のあり方に目が届きにくいという形で表れている可能性もあるだろう。それゆえ、右に挙げた8類型だけでなく、様々な旅行者の属性の違いによって、鮮満旅行の体験がどのように構成され、そこからどのような植民地と帝国の心象地理が形成されるのか、コロニアル・ツーリズムの全体像を見据えた上で各旅行記を分析する枠組が求められる。次章ではその準備作業のために、旅程と訪問地に着目し、ツーリズム空間の広がり进行分析することとしたい。

3. ツーリズム空間の広がり

(1) 旅行日数と各地域の比重

前章まで対象とする旅行記を「鮮満旅行記」と称してきたが、旅行記によって朝鮮半島と中国東北部の比重は異なっており、また北京や上海など中国の他の地域への旅

表1 鮮満旅行記の平均旅行日数

年次	旅行の件数	全日数	朝鮮半島	中国東北部
1905～1914年	23	44.7	14.5	12.2
1915～1924年	35	47.4	11.1	13.6
1925～1934年	67	29.1	6.5	12.3
1935～1944年	54	28.6	6.2	16.6

年次は旅行記の発刊年ではなく、旅行が実施された年による。1つの旅行記に複数の旅が記載されている場合は別の旅行として扱った。日数を計上するに際し、ある1日が朝鮮半島と中国東北部にまたがる場合、それぞれ重複して1日分として数えた。

程が付随するケースも少なくない。そこで、個別の訪問地に着目する前に、まず旅行日数を指標としてツーリズム空間の地域的な比重とその時期ごとの傾向を概観しておく。なお、対象とした各旅行記の旅行日数は付表に示した通りであり、記載された全日数と朝鮮半島・中国東北部での滞在日数をそれぞれ計上している。なおここでいう旅行日数とは、各旅行記に記載された範囲の日程であり、例えば往路の記述が下関から始まり、記述が大連や釜山からの乗船時で終わっているなど、必ずしも旅行全体が完結していない場合も含まれている。

表 1 は便宜的に対象期間を 4 つに分け、記載された 179 件の旅行に関して、旅程の全日数と、朝鮮半島と中国東北部での滞在日数の平均値をそれぞれ示したものである。これによれば、旅行の全日数が、1924 年までは平均して 1 か月半あったものが、1925 年以降は 1 か月程度に短縮する傾向があったことが判る。1924 年以前には、田中清純の 187 日 [#5] や大町桂月の 117 日 [#33]、高森良人の 104 日 [#40]、徳富蘇峰の 86 日 [#28] といった長期旅行の例も目立つが、1925 年以後については中島真雄の 62 日 [#149] が最長である。逆に、帝国鉄道協会の 11 日 [#60] や村 秀三の 12 日 [#106] といった短期の例もみられるようになる。このような旅行期間の変化は、1925 年～1940 年にかけて鮮満ツーリズムが最盛期を迎え、より多くの旅行者にとって旅行のための時間が取りやすいよう、日数がコンパクトになっているためだと考えられる。1 か月という期間は、経営の仕事から長期間離れることが難しい実業家にとっても、夏休みを利用することのできる学生や教員にとっても、適当な期間であらう³⁶。

また表 1 中の朝鮮半島・中国東北部の日数と比較すれば、1924 年以前においては、朝鮮半島と中国東北部に費やした日数（例えば 1905 年～1914 年の数値を単純に合算すれば、 $14.5+12.2=26.7$ ）に対して、旅行全体の日数は 44.7 日と、2 週間以上の余裕があることが判る。日本内地からの鮮満に上陸するまでの往復の時間を仮に 1 週間とみても、さらに 1 週間以上が残ることになる。この時間は主に、北京や上海など中国の他地域を周回することに用いられており、付表に示した各旅行記の旅程から窺えるように、奉天から北京への鉄路や、大連から天津あるいは青島への航路によって、そのような周回は容易であった。しかしこのような状況は 1925 年以後ははっきりと変化

し、旅行全体の日数が縮小するのに伴い、中国の他の地域を大きく旅程に組み込むことが避けられるようになったといえる。とりわけ満洲事変（1931年）以降、日中の対立が激化すると、中国の他地域を併せて周遊することは現実的ではなくなったといえる。一方、中国東北部に費やす日数が余り変わらないか、むしろ増加傾向にあるなかで、朝鮮半島にかかる日数が1週間以内に減少していることにも注意しておきたい。このことは、朝鮮半島の位置づけが、主たる旅行目的というよりも、中国東北部への経路上、立ち寄るに都合の良い地域へと変化していったことを表している。

以上のように、鮮満の旅は、1925年～1940年を最盛期とする鮮満ツーリズムの展開によって、鮮満全体と中国の他地域への周遊を伴う長期旅行から、中国東北部を主目的地とする旅行へと、性格を変化させていったといえる。このことは、日中の対立という背景の下で、教員や修学旅行、あるいは実業家らが実施しやすいコンパクトな旅程を選ぶようになったことの反映だと解釈できる。

（2）訪問地の分布とその時期的な変動

続いて、訪問地の分布とその比重を見ていこう。個々の旅行記にみられる訪問地は付表に示した通りであり、朝鮮半島では116か所、中国東北部では109か所の訪問地を数えることができる。このうち朝鮮半島の3か所のみ位置が判断できなかったものがあるが³⁷、それらを除いた計222か所を図2に示した。

まず全体としてはっきり表れているのは、鉄道で結ばれた都市が主要な訪問地になっていたことである。対象とする179件の旅行のうち、訪問した旅行の件数が格段に多かったものを列举すれば、まず航路での出入り口となる釜山（161件）と大連（159件）があり、京城（現ソウル、159件）、平壤（108件）、安東（89件）、奉天（現瀋陽、161件）、そして旅順（147件）、撫順（120件）、長春・新京（121件）、哈爾濱（107件）が挙げられる。これら10都市が、群を抜いて代表的な訪問地であった。これらの都市のほとんどは、日露戦争を機に開通ないしロシアから委譲され、日本が大韓帝国統監府や朝鮮総督府、そして南満洲鉄道（以下、満鉄と略称する）を通じて支配権を握った路線、すなわち京釜線（釜山－京城）、京義線（京城－平壤－安東）、安奉線（安東－奉天）、連京線（満鉄本線、大連－奉天－長春・新京）の中核をなす都市であった。

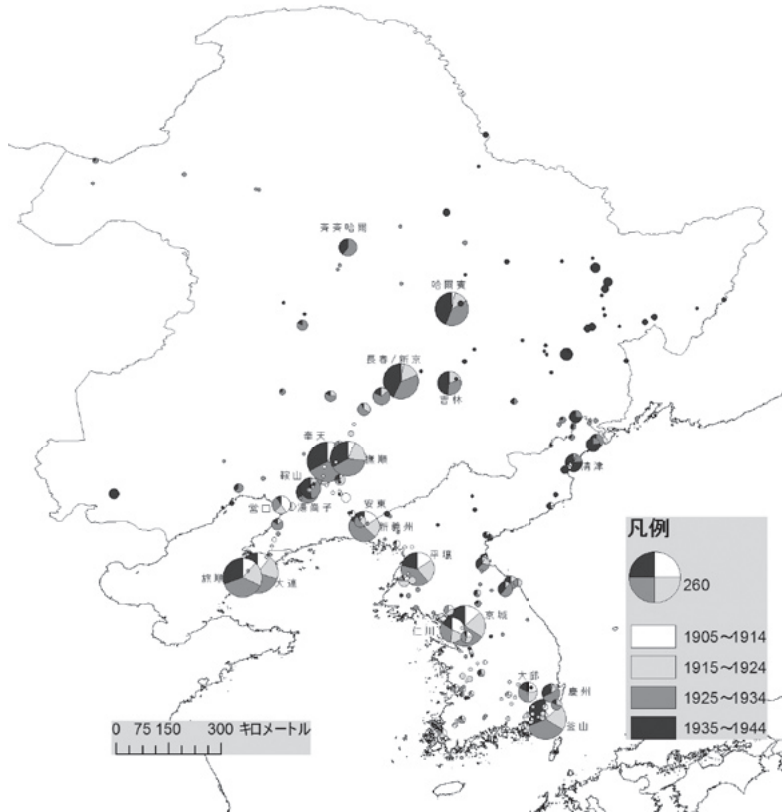


図2 鮮満旅行記にみる訪問地の分布
訪問件数が30以上の訪問地には地名を付した。

その意味で鮮満ツーリズムは、基本的には、鉄道網に対する日本のコロニアルな支配権のなかで展開したことが確認できる。この支配権のなかにおいては、日本人旅行者は現地の言語を解さずとも、おおむね不便なく旅行が可能であり、日本語環境を維持したまま現地と接することができた。そもそも旅行を計画する段階で、満鉄が日本内地に設置していた鮮満案内所の世話になっている事例も散見され、自主的に旅程を組むというよりも、案内所が提示する旅程案に任せていると思われる例も少なくない。ちなみに、旅程を効率的にするために夜行列車が多用されたため、移動による疲労の蓄積について言及する旅行記は多い。なお1932年以降、空路を利用する例が少数ながらみられるようになるが〔例えば#96, #99〕, それによって新たな訪問地が浮上するという傾向は認められず、航空機は鉄路の移動時間を短縮するために用いられたといえる。

一方、上記の10都市のうち哈爾濱のみは、1935年に「満洲国」に路線が売却されるまでは、ロシアが経営する東清鉄道（北満鉄路）で長春と結ばれており、長春経由で訪問する日本人旅行者も多かった。日本人旅行者にとって哈爾濱は、ロシアの影響力を感じさせる土地であり、歓楽街でロシア人女性ダンサーを見物することが定番となっていた。春山行夫によれば、「哈爾濱まで行つて、かうした場所にゆかないで帰る人間はまづないといふのが、苦笑すべき事実であり」としつつも、「いはば外国人が日本のフヂヤマとゲイシャ・ガールを見ないでは帰れないやうな風に、一般化、観光物化されてゐる」[#163: 213]という。しかしこの哈爾濱を除けば、満洲北部では日本人にとって大きな訪問地はなく、吉林（54件）や齊齊哈爾（30件）が目立つ程度であった。

合わせて時期ごとの傾向をみるために、図2では表1で用いた10年ごとの時期区分（以下、図5まで旅行の実施年による）によって、件数の内訳を表示している。それによれば、1924年以前の訪問地は、満洲のなかでも奉天以南に偏る傾向があり、特に長春や哈爾濱では1924年以前の比率が相対的に低いことが読み取れる。しかし「満洲国」が建国（1932年）され、長春が首都・新京となり、また東清鉄道をロシアが手放したことも関わって、特に1935年以後になると満洲北部への訪問者が数を伸ばした状況が窺える。前節でみたこの時期の中国東北部への比重の高まりは、満洲の中心部や北部への関心の表れと連動していたといえる。

以上の全体的な傾向を踏まえて、朝鮮半島および満洲北部について、より詳しく訪問地を見てみよう。朝鮮半島の中南部を拡大した図3と朝鮮北東部から満洲東部を拡大した図4によれば、釜山、京城、平壤という三大訪問地のほかに、件数は少ないものの地方の都市や名所、仏教寺院が広く訪問されていたことが窺える。比較的件数が多いものとしては、仁川（58件）、大邱（39件）、新義州（37件）、慶州（31件）、清津（30件）、内金剛（21件）を挙げることができる。これらは、件数が少ない仏教寺院をひとまず除外すれば、1924年以前の割合が相対的に高い訪問地（例えば仁川・大邱・新義州など）と1925年以後のそれが高い訪問地（例えば慶州、清津、内金剛など）とに分けることができ、それぞれの時期の特徴を代表している。すなわち、前者については、京城の外港として物産の輸出入を担う仁川や、鴨緑江を挟んで満洲側

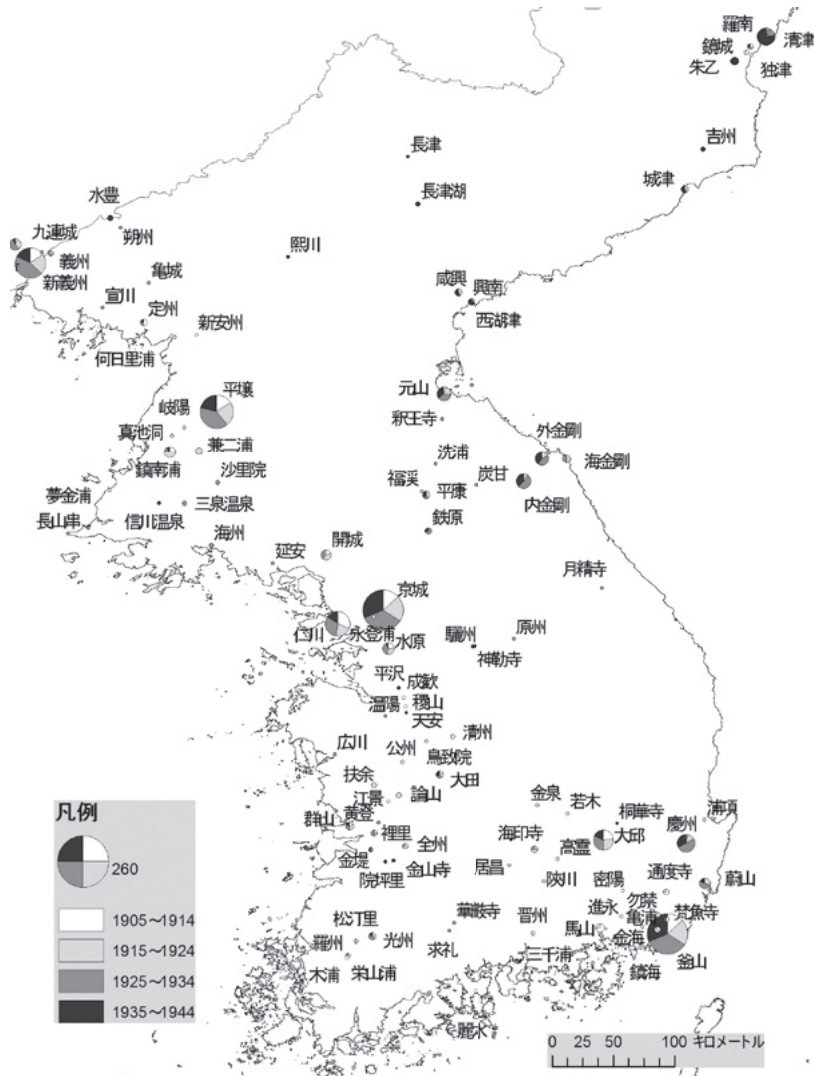


図3 鮮満旅行記にみる訪問地の分布（朝鮮半島）

の安東と連携し、上流の林産資源の集散地となる新義州のほか、各地域の中心となる地方都市（大邱，水原，開城など）や沿岸の港町（馬山，木浦，群山，鎮南浦，定州など）や西南部の農業地帯の地方都市（全州，光州など）が散見されることから、主に殖民や実業家の関心と関わる訪問地であるといえる³⁸。こういった地方都市への訪問者は、現地の交通事情や経済事情に通じた案内者に説明を受けている例も散見され、植民地への投資や事業展開の可能性を探ることや、そのための基礎知識を得ることが旅行の焦点であったと考えられる。しかしそのような関心は、1925 年以後は低調に

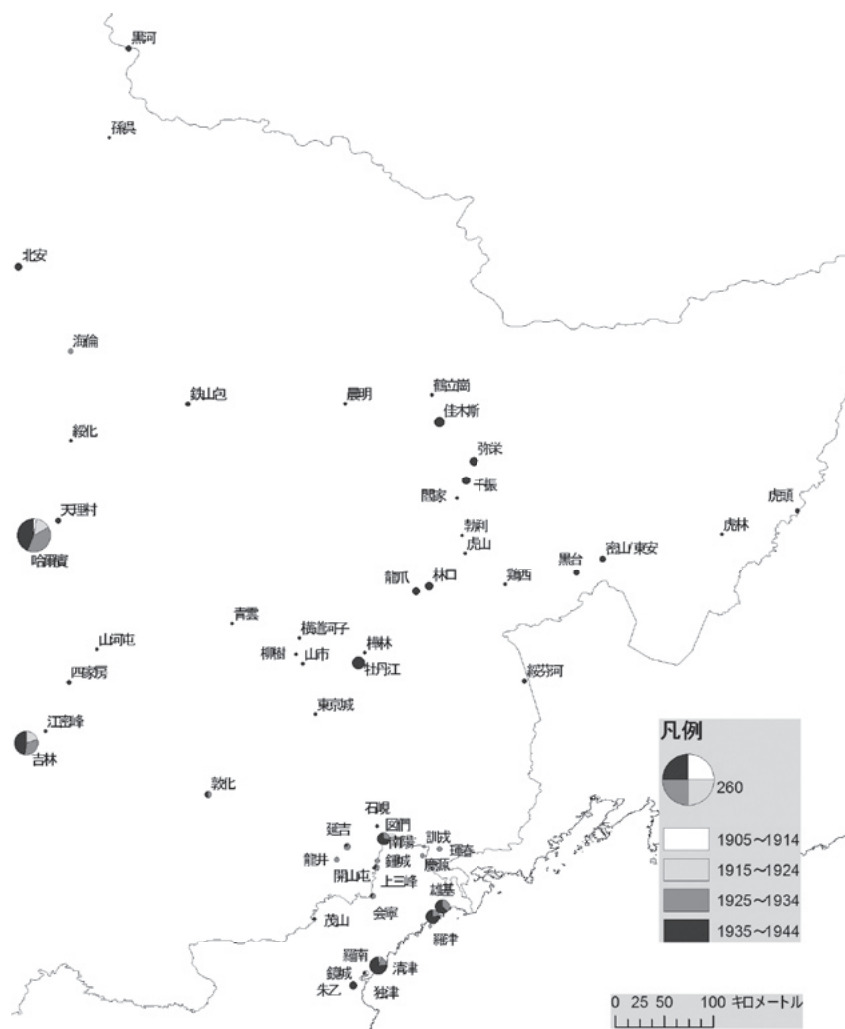


図4 鮮満旅行記にみる訪問地の分布（満州北東部）

なっていた。

一方、1925年以後の割合が高い訪問地は、慶州や金剛山（内金剛、外金剛、海金剛）のように、史蹟あるいは自然の景勝という観光的な意味合いが強い訪問地と、東北部の港湾都市（清津、羅津、雄基、図4参照）とに大別される。前者は観光地としての整備が進むことで、次第に訪問者を集めるようになった場所である。対して後者は、1933年に満洲北部への京図線（図們－吉林－新京）が全通し、朝鮮東北部が満洲への入口となることで、交通事情や経済事情に関心を寄せる実業家を集めただけでなく、釜山／大連－奉天－新京（長春）－吉林－羅津／清津という周回ルートが成立したこ

とで、教員や学生などの旅行者も経由していくことになった。

このことは図4に表れているように満洲北東部への訪問件数とも連動している。図4によれば、哈爾濱や吉林の時期的な比率が1925年以後に大きく偏っているばかりでなく、1935年以後の訪問地が点在していることが判る。その背景には当然ながら「満洲国」建国（1932年）という事態があるが、奉天から北上する場合に行き止まりの位置にあって、旅程を組む上で効率が悪かった哈爾濱や吉林が、周回しやすくなったことは大きい。そして、図佳線（図們－牡丹江－林口－佳木斯）や虎林線（林口－虎林－虎頭）沿線の日本人移民集落や軍駐屯地に「慰問」を行う旅行が、1935年以降、散見されるようになる。ただしこの地域では、鐵路が抗日「匪賊」に襲撃されるという危険が皆無ではなく、武装列車を見た不安を吐露する旅行記も散見される。

対照的に、新京（長春）や哈爾濱よりも西北の地域（図5）は、1925年以後、件数は少ないながらも訪問者が散見される地域であり、しかも1925年～1934年の間の訪問が相対的に目立つという特徴をもつ。日本が支配する満鉄の交通網からは外れた地域であり、また実業家の関心も及びにくく、組織的なツーリズムが明確には展開しなかった地域だといえる。そのようななか、大興安嶺の西側にあたる満洲里や海拉爾を東京外国語学校〔#64, #67〕が訪れているのは、学生自身が中国語やモンゴル語を学んでいるということが関わっている。また杉山左七は、「世俗に行はるゝ淫蕩的国辱的な視察とは、全くその趣を異に」と自負し〔#119: 2〕、観光や歓楽の要素が強い「視察」には批判的な意識から、齊齊哈爾から北安を経由して海倫で宿泊し、哈爾濱に戻るというルートを選択した。しかし日本語環境はおろか宿泊施設にも不便する地域であることを体感し、「匪賊」に恐怖心を抱いている。「旅行者にとって幾多の危険」がありながらも、「危地を逃れて無事予定の行動を終ることを得た」〔#119: 223-224〕という感想は、ツーリズム空間の周縁において、安全と快適さを失った旅行者の体験をよく表している。

以上より、鮮満で形成されたツーリズム空間は、第一には日本の支配権が及ぶ鐵路に規定された側面が強く、メジャーな訪問地は鉄道沿の10都市に絞られていたといえる。ただし1933年以降、京図線の全通によって、朝鮮北東部から満洲東部にツーリズム空間が拡張していくことが確認される。この状況からは、あくまで日本語環境

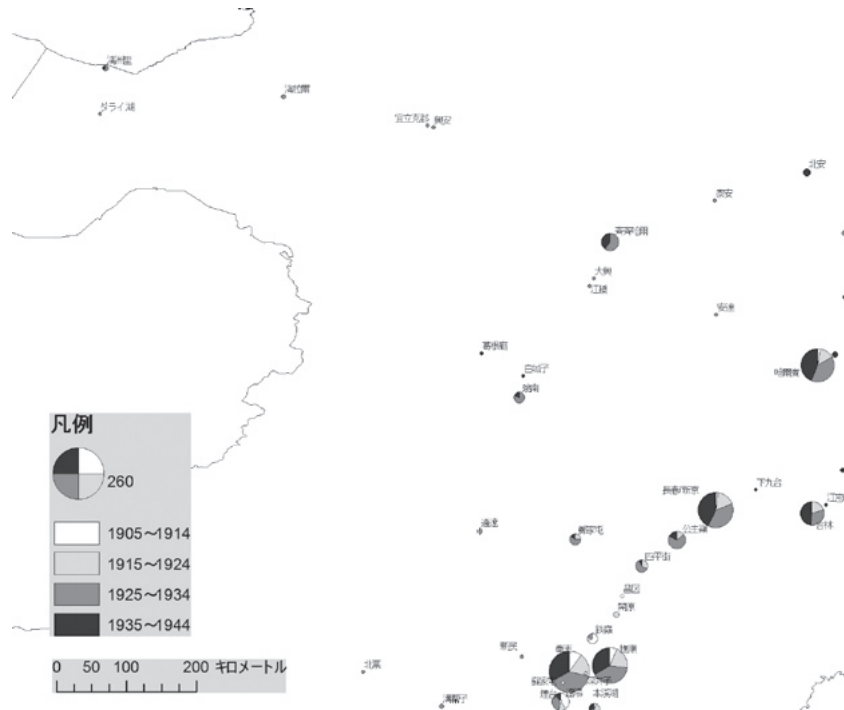


図5 鮮満旅行記にみる訪問地の分布（満洲北西部）

を維持しながら現地に接することを望む日本人旅行者のあり方が浮かび上がってくる。一方で、そのような全体的傾向から外れた訪問地も少なかったわけではなく、訪問件数は少ないものの様々な場所に訪れる日本人がいた。特に1924年までは経済的な関心から朝鮮半島の南部・西部地方を訪問する動きがあり、また満洲西北部への関心が特に1925年から1934年にかけて目立つことも指摘できる。こうしたマイナーな訪問先は、旅行者の属性や旅行目的の違いを反映している側面がある。そこで次節では、旅行の主体の観点から訪問地の分布を見ることにしたい。

（3）旅行主体からみた訪問地の特徴

図6は前章3節で区分した旅行者の8類型のうち、旅行記の点数が多かった実業家の旅（実業）、教員の旅（教員）、修学旅行など学生が主体の旅（学生）に、参加者募集型の団体旅行（ツアー）を加えた4類型に関して、訪問先の件数と割合を示したものである。このうち最も特徴が少ないのがツアーであり、先に述べたメジャーな10都市に訪問地がおおむね限定されていたといえる。不特定多数の参加者に関心に応え

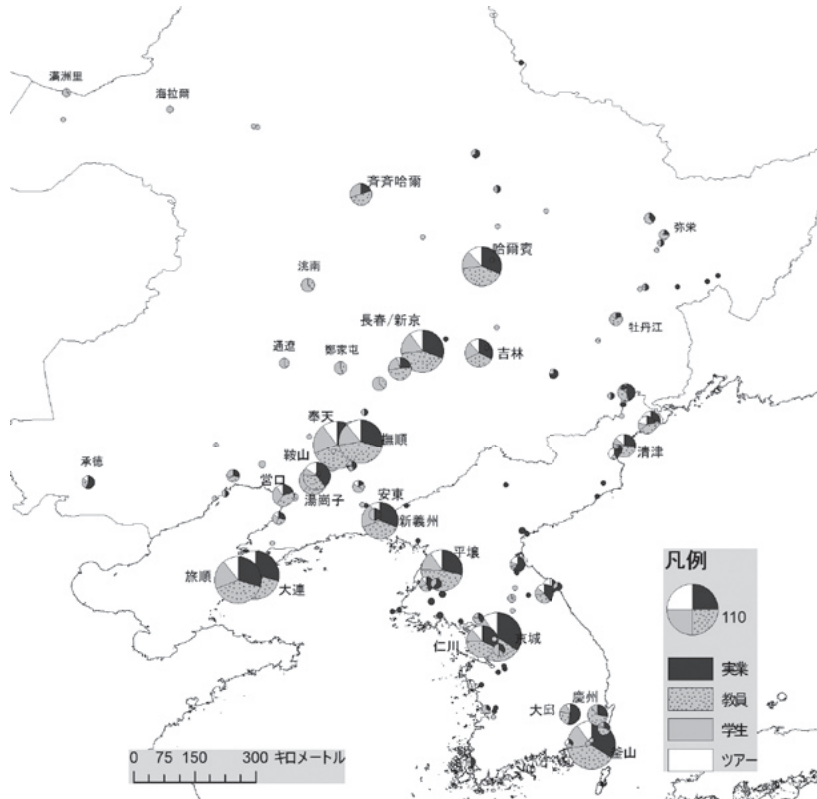


図6 旅行の主体からみた訪問地の分布

るために、誰もが必ず訪問する場所をピックアップする形で旅程が組まれたことが窺え、いわば特徴がないことがツアーの特徴であったといえる。それに対して、実業家、教員、学生の類型にはそれぞれ具体的な傾向を読み取ることができる。

実業家の場合、前節ですでに触れたように、朝鮮半島において小さな訪問地が散在していることが特徴であり、経済的な関心、すなわち植民地と関わる事業展開への関心を反映したものと捉えられる。また朝鮮北東部から満洲東部にかけても訪問地がみられ、京図線の開通や日本人移民村への関心の表れだとみてよいだろう。その一方で、満洲の西部に対する関心の希薄さは対照的である。多くの実業家にとって、満鉄と日本人を軸とする満洲経済に自らの事業がどう関わるかが重要であり、そこから外れた地域に対しては関心が著しく下がらざるをえなかったのではなかろうか。ただし、満洲西南部から北京に抜ける錦古線（錦県－承德－古北口）が1930年代に延伸するに伴い、熱河地域の中心地・承德への訪問者がみられることにも注意しておきたい。

この地域は「満洲国」建国時に軍事的に制圧された地域であり、小稿が対象とした旅行記のなかでは、1935年以降に限って訪問者がみられる。山間部ではあるが、北京と満洲をつなぐルートであることが、実業家の関心を誘った可能性が考えられる。

次に、教員と学生の訪問先には、共通する特徴とやや異なる特徴とがある。まず共通点は、実業家が全く関心を向けない満洲の中西部を訪問した例が散見されることである。具体的には奉天から斉齊哈爾を結ぶ諸路線の沿線で、通遼や鄭家屯、洮南といった地方都市が訪問されていた。この地域への関心は、経済的な関心というよりは、日本の支配権がまだ弱い地域への関心だと考えることができる。言い換えれば、植民地的な支配の対象となるべき地域への関心であり、満洲を日本の考える形で「近代化」させ、日本の影響力を浸透させていくために、その候補となるフロンティアを「視察」しているのだといえる。満洲西北部に学生たちの訪問先がさらに並んでいるのは、前節で触れたように、東京学園語学校などの旅行であり、満洲のなかでもより周辺地域に関心が向けられたものだと捉えることができる。ただし学生らの訪問は1935年以降、見られなくなる。その背景としては、ノモンハン事件（1939年）に代表されるように満ソの国境紛争が旅行をする上で無視できない要素になったこと、また次第に学生による旅行自体が実施しづらい情勢となったことが関わっていると推測される。

対して、満洲東部には実業家とともに教員が訪問した場所が点在しているが、ここには学生の訪問者が乏しい。この地域で1935年以降訪問者が散見されるようになる背景には、すでに触れたように京図線の全通という交通網の拡張があり、弥栄などの日本人移民村や駐屯軍への慰問が旅行目的に挙がるようになる。学生の訪問者が乏しいのは、こういった慰問に意義が見いだされなかったためではなく、先に触れた通り、学生による団体旅行が実施しづらい情勢になっていったことが大きいものと推測される。教員の旅行者は、学生に比べれば旅行がしやすかったためか、慰問のために訪問する例が散見される。

以上のように、旅行者の属性による訪問地の違いは、メジャーな訪問地に関しては表面化しないものの、よりマイナーな訪問地の選択に表れている。個々の旅行記を資料として旅行体験や心象地理を分析するにあたっては、旅程の組み方にどのような意

図が込められていたかが分析の手がかりになるだろう。従来の先行研究の多くは、個々の旅程を所与の前提として、そのなかでの旅行者の植民地理解や帝国意識を探る手法をとる傾向が強かった。個々の旅行記を扱うにあたっては、そのようにせざるを得ない面があるが、小稿が概観したツーリズム空間の広がりを見参照することで、旅行に込められた意図や目的が議論しやすくなることが期待できる。

4. おわりに

付表に収めた 175 点の鮮満旅行記が物語るように、近代日本のコロニアル・ツーリズムの展開において、朝鮮半島と中国東北部は重要な旅行目的地であった。従来、文学史や教育史の観点からこうした旅行を個別に分析した例は少ないが、鮮満ツーリズムの全体像、特にツーリズム空間の形成について参照できる知見が乏しいために、それぞれの事例や分野のなかで分析が止まる傾向が強かった。そこで小稿では、これらの鮮満旅行記の資料的意義に着目し、単行本に限定する形ではあるが網羅的にリストアップし、刊行の時期的な動向や旅行の主体、そしてツーリズム空間の広がりについて、基礎的な分析を提示した。

その結果を改めて要約しておこう。まず旅行記の刊行点数の動向によれば、日露戦争直後から鮮満ツーリズムが始まったといえるものの、それは順調に拡大したわけではなく、おそらくは政情的な理由で何度かの抑制が働いていたとみられる。刊行点数をみる限り、鮮満ツーリズムが最盛期を迎えるのは、1925 年から 1940 年にかけてであった。こうしたツーリズムを牽引した主要な旅行主体となったのは、従来指摘されてきた修学旅行や教員の「視察」旅行だけでなく、同業団体・地域団体を組んで「視察」する実業家たちの存在が大きかった。自由参加型の団体旅行が鮮満旅行の勃興に果たした役割は無視できないが、教員や学生以外に鮮満旅行を希望する人々は、新聞社や旅行社の企画を待つまでもなく、自ら旅行団を組織して、旅立っていったといえる。鮮満ツーリズムが展開するなかで、旅行期間や訪問地の地域的な配分にも変化が生じた。当初、北京や上海など中国の他の地域も加えて、1 か月半に及ぶような長期旅行が多かったが、最盛期となる 1925 年以降は、1 か月以下に日程が縮小し、中国東北

部に重点を置くものが主流となった。それに伴って朝鮮半島への関心は相対的に低下した。旅行者の訪問地は日本の支配権が及ぶ鉄道網に規定され、釜山－京城－平壤－安東－奉天、そして旅順－大連－奉天－撫順－長春・新京－哈爾濱という、奉天を結節点とする2大幹線に沿った10都市が中心であった。言い換えれば、釜山と大連を出入り口としてこの10都市を結ぶ線が、代表的な周遊パターンを構成していたといえる。ただし詳細に見れば、実業家は植民地における事業展開を意識した訪問地を加えている例が散見され、より早い時期には朝鮮半島の南部と西部に、最盛期には朝鮮北東部から満洲東部にかけて、訪問地の分布が認められる。対照的に学生や教員らは、実業家が目を向けない満洲西部への関心が特徴であり、より将来の植民地経営や日本の影響力の拡大が意識されていたことが推測される。

以上の知見をもとに考えれば、鮮満ツーリズムのなかで近代の日本人が体験した鮮満とは、一面では、日本語環境を維持したままの鉄道による駆け足旅行であり、定型化した周遊ルートの中で表面的かつ定型的な植民地理解を形成する機会を作り出すものであったといえる。映画批評家の今村太平は自身の旅行記を「上すべりで皮相な旅行記」と謙遜し、「終始じつに慌ただしい旅で、すべては映画のフラッシュバックの如く眼前を過ぎ去つた。何一つ省みたり、考へたりする暇はなかつたが、それだけに、その刹那刹那の印象は、自分には捨て難いものがある」[#167: 191-192]と振り返っている。鉄路と都市からほとんど離れることができない旅行者たちは、他の旅行者や旅行団とほとんど同じような旅程をたどりつつも、自身の体験をよりどころとして鮮満の「理解」を組み立てていくしかなかったといえる。その意味で、代表的な訪問地において多くの旅行者がたどった典型的な旅行体験のあり方と、それに伴う植民地理解や心象地理の形成を検討することが、コロニアル・ツーリズムのあり方に迫る上で次の課題であるといえる。先行研究においては、特に旅順に関して日露戦争との関わりからそのような分析が進められてきたが、今後は他の訪問地についても検討が深められる必要があろう³⁹。175点の旅行記を通読した筆者の印象では、日露戦争の戦跡地を構成していたのは旅順だけではなく、朝鮮半島から満洲南部にかけて広がっており、それぞれ旅行者の関心も高い。また日露戦争以外にも、日清戦争や満洲事変などに関わる場所も帝国日本を感じさせる場所として機能していた。

このような全体的な傾向を前提とした上で、個々の旅行者が自身の立場や関心に応じて訪問地を選択している事例は、より能動的に構成された旅程として光を当てる必要がある。それは植民地と帝国の将来を見据えた教育的な関心の表れであり、あるいは自身の事業展開という純粋に経済的な関心の表れである。さらに他にも、個々の旅行者ごとに個別の視点があったはずである。こうした関心に基づく旅行体験が鮮満ツーリズムのなかでどのような役割を果たしていたのか、そしてそれが心象地理の形成とどのように関わったかは、改めて検討される必要がある。小稿では、まずは鮮満旅行記の資料的意義を提示することと、ツーリズム空間の把握に重点を置いたため、上に列挙した課題については手つかずのまま残されている。引き続き課題としたい。

小稿は人文地理学会大会(2013年11月10日,大阪市立大学)で報告した内容に基づいている。当日、ご助言を下された皆様に感謝したい。また小稿の研究は、平成23年度～25年度科学研究費補助金(基盤研究C)「近代日本のコロニアル・ツーリズムと北東アジアの心象地理」(課題番号23520950)を使用して為されたものである。記して感謝したい。

注

- 1 歴史地理学における代表的な研究例として、Duncan, D. and Gregory, D.(eds.), *Writes of Passage: Reading Travel Writing*, Routledge, 1999, 225p. および、Driver, F. and Martins, L. (eds.), *Tropical Visions in Age of Empire*, The University of Chicago Press, 2005, 279p. を挙げておく。また、台湾の心象地理に関しては、神田孝治の一連の研究がある。神田孝治「日本統治期の台湾における観光と心象地理」, 東アジア研究 36, 2003年, 115-135頁。同「日本統治期の台湾における遊興空間の形成過程に関する研究」, 旅の文化研究所研究報告 12, 2003年, 87-99頁。同「日本統治期台湾における国立公園の風景地選定と心象地理」, 歴史地理学 53-3, 2011年, 1-26頁。なお小稿に筆者が取り組むきっかけとなった拙稿として、米家泰作「扶余神宮と史蹟—植民地朝鮮における『内鮮一体』の景観—」, 歴史の理論と教育 135・136, 2011年, 45-61頁, および同「『近代』概念の空間的含意をめぐって—モダン・ヒストリカル・ジョグラフィの視座と展望—」, 歴史地理学 54-1, 2012年, 68-83頁, がある。
- 2 森 正人『昭和旅行誌—雑誌『旅』を読む—』, 中央公論新社, 2010年, 72-82頁。
- 3 高 媛「戦地から観光地へ—日露戦争前後の『満洲』旅行—」, 旅遊中国 2 1 29, 2008年, 203-218頁。
- 4 白幡洋三郎『旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の「新文化」—』, 中央公論社, 1996年, 86-92頁。
- 5 有山輝雄『海外観光旅行の誕生』, 吉川弘文館, 2002年, 17-88頁。
- 6 李 良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」, 北東アジア研究 13, 2007年, 149-167頁。ケイト・マクドナルド(山本達也訳)「領土, 歴史, アイデンティティー—鮮満観光と大日本帝国の形成」, *Contact Zone* 5 (京都大学人文科学研究所), 2012年, 1-18頁。
- 7 例えば、石崎 等「〈満鮮〉への旅—大正期における桂月・花袋の異郷体験—」, 立教大学日本文学 88, 2002年, 30-39頁。同「高浜虚子『朝鮮』の成立」, 立教大学日本文学 97, 2006年,

- 30-42 頁。金 成妍「大井冷光の満鮮旅行と『京日お伽講演会』」, 近代文学論集 33, 2007 年, 34-48 頁。中根隆行「『朝鮮』表象の文化誌—近代日本と他者をめぐる知の植民地化—」, 新曜社, 2004 年, 396 頁。水野達郎「『写生』の境界—高浜虚子『朝鮮』の様式—」, 比較文学 49, 2006 年, 21-34 頁。同「田山花袋『満鮮の行楽』の戦略」, 比較文学・文化論集 24, 2007 年, 75-85 頁。同「木下杢太郎『朝鮮風物記』の位置」, 比較文学・文化論集 25, 2008 年, 51-63 頁。ほかに夏目漱石の「満韓とところどころ」に関する研究は数が多く, ここでは割愛する。
- 8 例えば, ①丁 貴連「もう一つの旅行記—柳宗悦の朝鮮紀行をめぐる—」, 宇都宮大学国際学部研究論集 15, 1-14 頁。②高橋勝治「本多辰次郎『北支満鮮旅行記』」, 明治聖徳記念学会紀要 46, 2009 年, 400-413 頁, など。
- 9 ①長 志珠絵「『満洲』ツーリズムと学校・帝国空間・戦場—女子高等師範学校の『大陸旅行』記録を中心に—」(駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂, 2007 年) 337-377 頁。なお奈良女子高等師範学校の修学旅行のうち朝鮮の旅程については, ②伊藤健策「戦時期日本学生の修学旅行と『朝鮮』認識」, 国史談話会雑誌 46, 2005 年, 46-70 頁, が詳細に検討している。
- 10 前掲 3, および高 媛「戦勝が生み出した観光—日露戦争翌年における満洲修学旅行—」, ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ 7, 2010 年, 11-30 頁。
- 11 阿部安成「大陸に興奮する修学旅行—山口高等商業学校がゆく『満韓支』『鮮満支』—」, 旅遊中国 21 29, 2008 年, 219-236 頁。
- 12 ①宋 安寧「1906 (明治 39) 年における『満洲教員視察旅行』に関する研究」, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 1 (2), 2008 年, 37-47 頁。②同「兵庫県教育会による小学校教員の『支那満鮮視察旅行』に関する研究—『満洲国』建国前を中心として—」, 研究論叢 (神戸大学教育学会) 15, 2008 年, 29-42 頁。③同「兵庫県教育会による教員の『支那満鮮視察旅行』—『満洲』建国直後を中心として—」, 社会システム研究 (立命館大学) 21, 2010 年, 115-142 頁。④同「満洲移民地視察のための小学校教員の『満鮮視察旅行』—秋田県教育会主催を事例にして—」, 研究論叢 (神戸大学教育学会) 19, 2012 年, 1-16 頁。⑤同「帝国教育会主催の中国大陸視察旅行—1919 年の『第一回支那及満鮮視察団』・1939 年の『皇軍慰問並に日満教育親善使節派遣』—」, 社会システム研究 (立命館大学) 24, 2012 年, 103-129 頁。
- 13 内田忠賢「東京女高師の地理巡検—1939 年の満州旅行—(1)」, お茶の水地理 42, 2001 年, 31-36 頁。同「東京女高師の地理巡検—1939 年の満州旅行—(2)」, お茶の水地理 43, 2002 年, 25-32 頁。
- 14 ①荒山正彦「戦前期における朝鮮・満洲へのツーリズム—植民地視察の記録『鮮満の旅』から—」, 関西学院史学 26, 1999 年, 1-21 頁。②同「戦跡とノスタルジアのあいだに—「旅順」観光をめぐる—」, 人文論究 50-4, 2001 年, 1-16 頁。③同「リーフレットからみる満洲ツーリズム」(中西遼太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験—絵地図と古写真の世界—』ナカニシヤ出版, 2008 年) 163-181 頁。④同「『内地』と『外地』をめぐる海上ツーリズム—戦前期における日本一周船と日支周遊船—」, 関西学院史学 37, 2010 年, 1-17 頁。⑤同「『旅程と費用概算』(1920 年～1940 年) にみるツーリズム空間—樺太・台湾・朝鮮・満洲への旅程—」, 関西学院大学先端社会研究所紀要 8, 2012 年, 1-17 頁。
- 15 竹国友康『韓国温泉物語—日朝沐浴文化の交流をたどって—』, 岩波書店, 2004 年, 253 頁。
- 16 ①櫻井義之『朝鮮研究文献誌明治大正篇』, 龍溪書舎, 1979 年, 131-170 頁。②同『遺稿朝鮮研究文献誌昭和篇』, 龍溪書舎, 1992 年, 62 頁。また, ③東京経済大学図書館編『桜井義之文庫目録』, 東京経済大学図書館, 113 頁, も参照した。
- 17 末松保和『朝鮮研究文献目録 単行書篇』, 汲古書院, 1980 年, 117-127 頁。

- 18 洪 慶姫『日本에서發行된韓国地理關係 文献目録』, 1994 年, 図書出版曉林, 203-213 頁。
- 19 東洋文庫近代中国研究委員会編『明治以降日本人の中国旅行記 (解題)』, 東洋文庫, 1980 年, 1-117 頁。
- 20 富田 仁『事典 日本人の見た外国』, 日外アソシエーツ, 2008 年, 497 頁。東京経済大学図書館『四方博朝鮮文庫目録』, 同図書館, 2010 年, 39-43 頁。倉橋幸彦編『書齋ニテ中国ニ遊ブー戦前中国旅行ガイド 200—』, 好文出版, 2013 年, 81 頁。
- 21 国立国会図書館サーチ (<http://iss.ndl.go.jp/>) を利用し, 朝鮮・満洲・鮮満・満鮮などをキーワードとして書名や件名を検索した。ただしこの方法では, 書名からは鮮満旅行記であると推測するのが難しい文献については, 件名で登録されていない限り, 検索するのは困難である。しかし他に有効な方法が見当たらないため, 少しでも既存の文献目録の漏れを補うために行った。
- 22 ただし次の文献は, 閲覧可能な所蔵先が不明あるいは筆者が閲覧機会が得ず, 未見であるために除外する。浦部良太郎『満韓巡遊雜観』, 1906 年。桜井市作『清韓之管見』, 1906 年。林正義『満韓視察談』, 1906 年。石井研二『朝鮮視察雜記』, 1910 年。恒松隆慶『満韓漫遊日記』, 1910 年。(著者不詳)『満鮮北支視察記』, 1926 年。埼玉県教育会『満鮮支視察記録』, 1927 年。尾上紫舟『行きつつ歌ひつつ』, 雄山閣, 1930 年。防長史談会『朝鮮渡航日記』, 1934 年。佐治八郎『満洲国を旅して』, 安田銀行, 1934 年。佐藤惣之助『旅念誌本』, 1937 年。鮎沢幸雄『満洲旅日記』, 1943 年。伊藤俊蔵『満鮮の旅』(出版年不詳)。
- 23 例えば, 村松梢風『熱河風景』, 春秋社, 1933 年, 241 頁, のように, 特定の地域(「満洲国」西南部)への訪問を目的とした旅行記は, 鮮満の周遊とはいえないため, 対象から除いた。
- 24 例えば, 朝鮮から満洲を周遊した佐々木忠右衛門『北鮮満洲北支の旅』, 黄海道内務部, 1938 年, 22 頁。また上海の東亜同文書院の学生らの旅にも, 満洲を訪問した例がある。藤田佳久『東亜同文書院生が記録した近代中国の地域像』, ナカニシヤ出版, 2011 年, 330 頁。
- 25 例えば, 徳富猪一郎『七十八日遊記』, 民友社, 1906 年, 373 頁。夏目漱石「満韓ところどころ」(『四編』, 春陽堂, 1910 年, 155-287 頁)。高浜虚子『朝鮮』, 実業之日本社, 1912 年, 560 頁。田山花袋『満鮮ノ行楽』, 大阪屋号書店, 1924 年, 469 頁, など。蘇峰の旅行記は, 旅中に記された通信文の形式を取り, 通信文が書かれた日付と主要な訪問先は判明するが, 旅程は断片的にしかたどることができない。漱石, 虚子, 花袋の旅行記には日程が記されていない。
- 26 前掲 5。
- 27 前掲 14 ①。
- 28 前掲 5, 10, 11, など参照。
- 29 #7 の著者・田淵友彦には地理学に関わる著作があり, 興味深い。金 科哲「韓国における近代地理学の黎明期—張志淵の『大韓新地誌』を中心に—」(千田 稔編『アジアの時代の地理学—伝統と変革—』古今書院, 2008 年) 123-143 頁。
- 30 修学旅行を採りあげた先行研究においても, 学校内で保存されてきた資料を分析したものが多い。前掲 9, 10, 11, 13 参照。
- 31 前掲 9 ①, 339-342 頁。
- 32 前掲 5, 37-39 頁。前掲 12 ①。
- 33 前掲 9 ①, 341-342 頁。なお第 7 回目の報告書は旅程が不分明なため付表には含めていない。
- 34 前掲 25 参照。
- 35 前掲 6。
- 36 ちなみに, 鮮満の旅の多くは初夏から秋にかけて実施されており, 寒さの厳しい冬の旅は例外

的であった。2月から3月にかけて旅した大橋 克は、「此時期に満洲を視察する人は極めて稀」[#146]として、冬に旅する自負を自序で述べている。また鹿山鶯村は、もっぱら夏季に視察する政治家について、「彼等は、満蒙の最もいゝ季節にのみやつて来た。」「展望車に葉巻の紫煙をゆらめかせては、豊かにそよぐ異国の風景に現を抜かし。」「夜は料亭に酒を汲み、財布の紐の太さを測つては、やがて撫順の露天堀に石炭の味をしめ。膨れた腹をさすりながらも」と皮肉を述べている [#94: 136]。

- 37 田中清純『戦場の花』[#5]が大邱から海印寺を往復する間に立ち寄った面鼠洞・金海台・唐峴店の3か所については、同時期の地形図では確認することができず、また他に訪問した旅行記がみられなかった。
- 38 同様の関心は、満洲においても遼東湾の港湾都市である営口に見いだすことができる。営口への訪問件数32のうち、1924年以前が20件、うち1914年以前が13件であった(図2参照)。
- 39 前掲3、前掲14②。なお筆者も扶余の史蹟について検討するにあたり、観光を意図した地域振興の側面に触れたことがある。前掲1、拙稿「扶余神宮と史蹟」。

付表 小稿が対象とする鮮満旅行記

ID	書誌	日数	旅程	備考
1	伊藤長次郎 (1905) 『韓国及九州談』神 戸:自家出版 149頁	29 (16:0)	(1905/9/18)神戸=[中略](29)下関～(30)～釜山(10/1)同=大邱 (2)同=京城(3_4)同=仁川=京城(5_7)同*稷山(8)同*成歙= 水原(9)同=京城(10)同=開城(11)同=京城(12)同=仁川～(13) ～木浦～(14)～釜山～(15)～下関=(16)=宝殿	著者は兵庫農会 長。九州で農会事業 視察の後、韓国の拓 殖事情を視察。
2	村瀬米之助 (1905) 『雲烟過眼録—南日 本及韓半島旅行—』 長野:西沢書店 207頁	60 (16:0)	(1905/4/8)上田=東京 [中略] (28)下関～(29)～釜山(30)同= 大邱(5/1)同=京城(2_4)同=平壤(5_7)同～鎮南浦(8)同～(9) ～仁川(10_12)同～(13)～木浦～(14)～釜山～(15)～下関～門 司 [中略] (6/6)長野=上田	遺稿集『村瀬米之助』 (1936年)によれば著 者は中学校教諭。「歴 史地理学」研究のため の旅行。
3	鶴飼退蔵 (1906) 『満韓行日記』(出 版者不明) 70頁	38 (12:19)	(1905/5/17)草津=[中略](20)下関～(21)～釜山(22)同=大邱 (23)同=京城(24_27)同=仁川(28)同=京城(29)同=平壤(30) 同=新安州～何日里浦(31)同?新義州～安東(6/1)同=鳳凰城(2 _3)同=(4)=連山関*甜水店(5)同*浪子山*湯河沿(6)同*遼 陽(7_8)同=奉天(9_10)同=鉄嶺(11)同=大石橋(12)同=營口 (13)同=(14)=金州=大連(15)同=旅順(16)同=大連(17_18) 同～(19)～(20)～(21)～(22)～広島=(23)=草津	京釜鉄道開通式に3 名で参加。5/31の旅 程は軍事機密に関わ るためぼかされてい る。
4	東京朝日新聞社 (1906)『朝日新聞 満韓巡遊船』東京: 朝日新聞社 310頁	32 (9:10)	(1906/7/25)横浜=[中略](30)門司～(31)～釜山(8/1)同～(2)～ (3)～仁川(4)同=京城(5)同=仁川～(6)～鎮南浦～(7)～平壤 (8)同=大連(9_10)同=(11)=營口=(12)=撫順=奉天(13)同= (14)=遼陽=(15)=金州城=旅順(16_17)同～(18)～(19)～ 長崎[中略](25)～横浜	389名の団体旅行。往 路の釜山・京城・奉天 の間は鉄道利用の別 働隊あり。有山(本文 注5)が分析。
5	田中清純 (1907) 『戦場の花—雲照律 師満韓巡錫誌—』 東京:自家出版 166 頁	187 (132:35)	(1906/5/8)東京=[中略](20)佐世保～(21)～(22)～大連(23)同= 旅順(24_26)同?金州(27)同?旅順(28_6/6)同=金州(7)同= 得利寺(8)同=大石橋(9)同=營口(10)同=大石橋(11)同=遼陽 (12)同=奉天(13_17)同=下馬塘(18_19)同=鳳凰城(20_21) 同=安東(22_25)同=新義州=定州(26)同=平壤(27_28)同= 京城(29_7/8)同=仁川(9_12)同=京城(13_20)同=釜山(21_ 28)同*通度寺(29_30)同?大邱(31)同*面風洞(8/1)同*金海 台(2)同*海印寺(3_4)同*唐岬店(5)同*大邱(6)同=京城[記載 を欠く](10/20)京城(21)同[記載を欠く](31)京城=釜山(11/1_3) 同～巖原[中略](10)=東京	師と従者5名による日 露戦争の戦没者慰霊 の旅。
6	田中靈鑑・奥村洞麟 (1907)『日置黙仙 老師満韓巡錫録』 大阪:香野蔵治 143 頁	79 (15:38)	(1907/1/8)東京=[中略](19)～門司～(20)～(21)～大連(22)同= 旅順(23)同=大連(24_27)同=金州(28)同=得利寺(29)同=大 石橋(30_31)同=營口(2/1)同=湯崗子(2)同*鞍山=遼陽(3_5) 同=奉天(6_9)同=鉄嶺(10_12)同=昌図(13)同=烟台(14_15) 同=撫順(16_18)同=奉天(19_20)同=本溪湖(21)同=草河 口(22)同=鳳凰城(23)同=安東(24_27)同*新義州=定州(28) 同=平壤(3/1_2)同=京城(3)同=仁川(4_5)同=京城(6)同= 釜山(7_9)同=亀浦*通度寺(10)同*梵魚寺(11)同*釜山(12_13) 同～(14)～下関=[中略](27)静岡=東京	師と従者3名による日 露戦争の戦没者慰霊 の旅。
7	田淵友彦 (1907) 『満韓旅行記』東京: 時習舎 184頁	42 (5:14)	(1906/7/23)東京=[中略](8/9)門司～(10)～(11)～(12)～大連 (13)同=旅順=大連(14_15)同=金州=(16)=營口(17)同=遼 陽(18)同=蘇家屯(19)同=撫順=鉄嶺(20)同=奉天(21_23)同= 草河口(24)同=安東(25)同=新義州=平壤(26)同=京城(27_28) 同=仁川=京城(29)同=釜山～(30)～門司[中略](9/2)=東京	毛利家の寄宿舎「時 習舎」関係者23名の 旅行。著者には『韓国 新地理』の著作がある (本文注29)。
8	東京高等師範学校 (1907)『満韓修学 旅行記』東京高等 師範学校 730頁	30 (0:19)	(1906/7/13)東京=[中略](16)～門司～(17)～(18)～大連(19_21) 同=旅順(22_23)同=(24)=奉天(25_26)同=鉄嶺(27)同= (28)=遼陽(29)同=營口(30)同=金州(31_8/1)同=大連(2_5) 同～(6)～(7)～(8)～門司～[中略](11)=東京	教員・学生192名の修 学旅行。7/25に地理 歴史部は撫順を往 復。
9	広島高等師範学校 (1907)『満韓修学 旅行記念録』広島 高等師範学校 470 頁	25 (6:18)	(1906/7/19)広島～(20)～門司～(21)～(22)～(23)～大連(24_25) 同=旅順=大連(26_27)同=(28)=奉天(29_30)同=鉄嶺(27)同= (31)同=(8/1)=遼陽(2)同=營口(3)同=金州(4_5)同=大連(6_8) 同～(9)～(10)～(11)～門司～(12)～広島 ※別働隊(8/3)營口=遼陽(4)同=奉天(5)同=撫順=奉天(6_7) 同=草河口(8)同=安東(9)同=新義州=平壤(10)同=京城(11_12) 同=仁川=京城(13)同=馬山(14)同=釜山～(15)～下関=広島	教員・学生140名の修 学旅行。日数は別働 隊のもの。

10	輔仁会 (1907)『輔 仁会雑誌満韓旅行記 念号』学習院 144 頁	28 (5:22)	(1906/7/17)東京=(18)=広島=(19)~(20)~(21)~(22)~(23) ~大連(24)同=旅順(25_26)同=(27)=奉天(28)同=(29)=鉄 嶺(30)同=(31)=遼陽(8/1)同=營口(2)同=奉天(3)同=草河口 (4)同=安東(5_6)同~新義州=平壤(7)同=京城(8_9)同=仁川 =京城(10)同=釜山~(11)~下関=[中略](13)=東京	学習院の教員・学生 15名の旅。文部省の 旅行募集に参加。
11	北村素堂 (1908) 『瀋水韓山——一名滿 韓紀行——』(出版者 不明) 107	33 (6:16)	(1906/7/22)上田=[中略](24)=広島(25)同~(26)~(27)~(28) ~大連(29_30)同=旅順(31)同=(8/1)=奉天(2_4)同=鉄嶺 (5)同=(6)=遼陽(7)同=營口(8)同=奉天(9_10)同=草河口 (11)同=安東(12)安東~新義州~安東(13)同~新義州=平壤 (14)同=京城(15)同=仁川=京城(16_17)同=釜山~(18)~下 関=[中略](23)=上田	著者は上田中学校の 教諭。教員・生徒16名 で文部省の旅行募集 に参加。
12	股野 琢 (1909) 『葦杭游記』東京: 自家出版 30丁	58 (7:9)	(1908/9/21)東京=(22)=下関~(23)~釜山=京城(24_28)同= 平壤(29)同=新義州~安東(30)同=草河口(10/1)同=奉天(2_3) 同=(4)=旅順=(5)=大連=(6)=營口=山海関(7)同=北京 [中略](11/12)上海~(13)~(14)~長崎=[中略](17)=東京	著者は帝国博物館総 長。58名の旅行団に 参加。漢文。
13	加納久宣 (1911) 『朝鮮旅行記』横 浜:自家出版 64頁	19 (13:0)	(1911/5/11)新橋=神戸(12)同=下関~(13)~釜山(14)同=馬山 (15)同=大邱(16)同=京城(17_18)同=仁川=京城(19)同=水 原=京城(20)京城=鎮南浦(21)同=平壤(22_23)同=新義州 (24)同=京城(25)同=釜山~(26)~門司=飯塚[中略](29)=神 戸=新橋	著者は貴族院議員。 麻生太郎(92代首相 麻生太郎の祖父)らを 同伴しての19名の旅。
14	小林愛雄 (1911) 『支那印象記』東 京:敬文館 222頁	34 (0:5)	(1908/12/21)神戸~(22)~(23)~長崎~(24)~(25)~上海[中 略](1909/1/13)北京=天津(14)同=(15)=奉天(16)同=(17)= 大連=旅順(18)同=大連(19)同~(20)~(21)~下関=(22)=京 都=(23)=東京	著者は音楽学者。
15	下野新聞主筆栃木県 実業家満韓観光団 (1911)『満韓観光 団誌』宇都宮:自家 出版 425頁	32 (9:17)	(1909/9/3)宇都宮=[中略](5)下関~(6)~釜山(7)同=馬山(8) 同=大邱=京城(9_11)同=仁川=京城(12_13)同=平壤(14)同 =新義州~安東(15)同=草河口(16)同=奉天(17)同=(18)=長 春(19)同=哈爾濱(20_21)同=(22)=奉天=撫順=遼陽(23)同 =營口(24_25)同=大連(26)同=旅順(27)同=大連(28_30)同 ~(10/1)~(2)~下関=[中略](4)=宇都宮 ※9/30にいったん解団し、以降は流れ解散。	実業家ら36名の旅。 李(本文注6)が言及。
16	林 静治 (1911) 『日本海之対岸 浦 潮北朝鮮巡航視察 記』新潟:積善組合 279頁	27 (15:0)	(1911/6/28)新潟~(29)~(30)~(7/1)~浦潮(2_4)同~清津(5) 同=羅南*鏡城*独津~(6)~城津~(7)~西湖津=咸興(8)同~ 元山(9)同~(10)~(11)~釜山=(12)=京城(13)同=仁川=京城 (14_15)同=水原(16_18)同=釜山~門司[中略](24)~新潟	新潟県による実業家ら 22名の視察団。新潟 新聞に掲載。
17	広島朝鮮視察団 (1913)『朝鮮視察 概要』広島:増田兄 弟活版所 165頁	12 (10:2)	(1912/4/12)広島=下関~(13)~釜山=大邱(14)同=京城(15_16) 同=仁川(18)同=安東(19)同=新義州=平壤(20)同=(21)= 馬山(22)同=釜山~(23)~下関=広島	1912年に広島市の実 業家有志が広島朝鮮 協会を結成し、21名で 視察旅行を実施。
18	鳥谷幡山 (1914) 『支那周遊図録』東 京:周遊図録発行所 167頁	59 (16:3)	(1913/2/12)東京=[中略](15)神戸~門司(16)同~(17)~(18)~ (19)~基隆[中略](3/20)天津=塘沽~(21)~(22)~大連(23)同 =旅順=大連(24)同~(25)~仁川=京城(26_4/9)同=釜山~ (10)~下関=大阪(11)同=東京	著者は書家。
19	赴清実業団誌編纂委 員会 (1914)『赴清 実業団誌』東京:白 岩龍平 243頁	87 (7:10)	(1910/5/5)下関~(6)~釜山(7)同=大邱=(8)=京城(9)同=仁 川=京城(10_11)同=平壤(12)同=新義州~安東(13)同=草河口 (14)同=奉天(15_17)同=撫順=(18)=大連(19)同=旅順(20) 同=營口(21)同=(22)=天津[中略](6/28)上海~(29)~(30)~ 長崎	各地の商業会議所会 頭や貿易業者ら14名 が「赴清観光実業団」 を結成し、視察旅行を 実施。
20	佐々木米三郎 (1915)『北鮮紀行』 福井:自家出版 72 頁	19 (15:0)	(1915/7/17)福井=(18)=下関~(19)~釜山=京城(20)同=福溪 (21)同=元山~(22)~清津=鏡城(23)同=清津(24_25)同~ (26)~城津(27)同~(28)~西湖津=咸興=西湖津~元山(29_30) 同=京城(31_8/2)同=釜山~(3)~下関=(4)=福井	佐藤福井県知事の視 察に随行。新聞に寄 稿した紀行文にもとづ く。
21	杉本正幸 (1915) 『最近の支那と滿鮮』 東京:東京堂 508頁	34 (6:14)	(1914/10/3)下関~釜山=(4)=清州(5)同=京城(6_7)同=仁川 =京城=(8)=安東=五龍背(9)同=奉天(10_11)同=撫順=奉天 =(12)=長春=(13)=哈爾濱[この間記載が不明確]=大連(16_21) [大連滞在中、旅順を往復しているが日程・経路は不明確]大連~ 旅順~(22)~天津[中略](11/3)上海~(4)~(5)~長崎=京都	著者は東京市の電気 事業から辞職した機 会に4名で旅行を実 施。
22	広島高等師範学校 (1915)『大陸修学 旅行記』広島高等 師範学校 234頁	21 (4:7)	(1914/7/19)広島~(20)~門司~(21)~(22)~上海[中略](27)上 海~(28)~(29)~大連(30)同=旅順(31_8/1)同=湯崗子(2)同 =遼陽=奉天(3)同=(4)=安東=平壤(5)同=京城(6)同=(7)= 釜山~(8)~下関=広島	英語学部の学生有志 12名の旅。広島高師 は1906年にも修学旅 行を実施[#9]。

23	原象一郎 (1917) 『朝鮮の旅』 東京: 巖松堂書店 577頁	51 (?:0)	(1914/7/12) = 下関 ~ (13) ~ 釜山 = 京城 (14_29) 同 = 大田 (30) 同 = 江景 ? 裡里 (31) 同... 全州 (8/1) 同... 群山 (2) 同 = 松汀里 (3) 同... 光州 (4_5) 同... 松汀里 = 羅州 * 梁山浦 = 木浦 (6_7) 同 ~ (8) ~ 麗水 (9) 同 ~ 三干浦 (10) 同... 晋州 (11_12) 同... 馬山 (13) 同 ~ 鎮海 ~ 馬山 (14) 同 = 進永 = 釜山 (15_17) 同 = 密陽 = 大邱 (18) 同... 慶州 (19_20) 同 = 京城 (※「附記」によればこの後、開城や平壤を巡った後、8/31に東京に帰還)	「官用」で朝鮮を訪問した旅行記。著者は軍需局長などを務めた。総督政治を批判したため朝鮮では発売禁止になったという(本文注16①, 165頁)。
24	荒川清次郎 (1918) 『鮮満実業視察団誌』 宇都宮: 自家出版 180頁	23 (10:9)	(1916/9/15) 宇都宮 = 東京 = (16) = 下関 ~ (17) ~ 釜山 (18) 同 = 大邱 = (19) = 京城 (20_22) 同 = 鎮南浦 (23) 同 = 平壤 (24) 同 = 安東 = (25) = 撫順 = 奉天 (26_27) 同 = 營口 (28) 同 = 大連 (29) 同 = 旅順 = 大連 (30_10/1) 同 = (2) = 安東 = (3) = 京城 (4) 同 = 釜山 ~ (5) ~ 下関 [中略] (7) = 東京	著者は宇都宮商工会議所書記長。同会議所が主催した27名による「鮮満各地の実業視察」の記録。
25	埼玉県教育会編 (1918)『踏破六千 哩』 浦和: 埼玉県教育会 139頁	27 (8:7)	(1917/8/2) 浦和 = (3) = 下関 ~ (4) ~ 釜山 = (5) = 京城 (6) 同 = 仁川 = 京城 (7_8) 同 = 平壤 (9) 同 = 安東 = (10) = 奉天 (11) 同 = 撫順 = (12) = 大連 (13) 同 = 旅順 = 大連 (14) 同 = (15) = 營口 = (16) = 天津 [中略] (24) 上海 ~ (25) ~ (26) ~ 下関 = (27) = (28) = 東京	小学校の訓導・校長ら28名の視察旅行。帰途、上海から青島經由の別隊もあり。翌年に第2回の報告書あり [#35]。
26	釈宗演 (1918)『燕 雲楚水』 鎌倉: 東慶 寺 216頁	79 (13:13)	(1917/9/8) 鎌倉 = (9) = 下関 ~ 釜山 (10_11) 同 = 大邱 (12) 同 = 京城 (13_18) 同 = 平壤 (19) 同 = 安東 (20_21) 同 = 奉天 (22_24) 同 = (25) = 北京 [中略] (10/5) 天津 ~ (6) ~ 大連 (7_10) 同 ? 旅順 ? 大連 (11_12) 同 ~ (13) ~ 青島 [中略] (11/13) 上海 ~ (14) ~ (15) ~ 長崎 ~ (16) ~ 門司 (17) 下関 = [中略] (25) = 鎌倉	著者は臨済宗の僧。師と従者3名の旅。漢文の旅行記のほか二條穀堂の「随行日誌」を付す。
27	關 和知 (1918) 『西隣游記』 東京: 自家出版 179頁	42 (4:13)	(1917/10/12) 東京 = 京都 = 大阪 (13) 同 = 下関 ~ (14) ~ 釜山 = 京城 (15_16) 同 = 平壤 (17) 同 = 新義州 = (18) = 奉天 = 大連 (19) 同 ~ (20) ~ 青島 (21) 同 ~ (22) ~ 大連 (23) 同 = 旅順 = 大連 (24_25) 同 = (26) = 長春 = 奉天 (27_28) 同 = 撫順 = 奉天 (29) 同 = (30) = 北京 [中略] (11/17) 上海 ~ (18) ~ (19) ~ 長崎 [中略] (22) = 東京	衆議院議員・大隈信常ら6名の視察旅行。
28	徳富猪一郎 (1918) 『支那漫遊記』 東京: 民友社 556頁	86 (10:18)	(1917/9/15) 東京 = (16) = 下関 ~ (17) ~ 釜山 = 京城 (18_24) 同 = (25) = 新義州 * 安東 = 奉天 (26_28) 同 = 哈爾濱 (29_30) 同 = 長春 (10/1) 同 = 吉林 = 長春 (2) 同 = (3) = 大連 (4_9) 同 = 旅順 = 大連 (10) 同 = 營口 (11) 同 = 山海関 (12) 同 = 秦皇島 [中略] (12/6) 青島 ~ (7) ~ (8) ~ 下関 = (9) = 東京	徳富蘇峰ら3名の旅。1906年の旅(『七十八日遊記』本文注25)の記憶と対比している。
29	内藤久寛 (1918) 『訪鄰紀程』 東京: 自家出版 186頁	57 (5:16)	(1917/10/6) 東京 = (7) = 下関 ~ (8) ~ 釜山 = (9) = 京城 (10_11) 同 = 兼二浦 = 平壤 (12) 同 = 安東 (13) 同 = 本溪湖 (14) 同 = 奉天 (15) 同 = 長春 (16) 同 = 哈爾濱 (17_18) 同 = 長春 (19) 同 = 吉林 = (20) = 奉天 (21_22) 同 = 撫順 = (23) = 大連 (24) 同 = 旅順 = 大連 (25) 同 = (26) = 奉天 = (27) = 天津 [中略] (11/26) 青島 ~ (27) ~ (28) ~ 門司 ~ 下関 (29) 同 = (30) = (12/1) = 東京	著者は日本石油社長。前中国公使・日置益の「漫遊」に同行する3名の旅。
30	旅行団編 (c1918) 『満鮮視察復命書』 (出版者不明) 36頁	19 (5:10)	(1918/9/19) 佐賀 = 門司 ~ (20) ~ (21) ~ 大連 (22) 同 = 旅順 = 大連 (23) 同 ~ (24) ~ 青島 (25_26) 同 ~ (27) ~ 大連 (28) 同 = (29) = 奉天 (30) 同 = 撫順 (10/1) 同 = (2) = 安東 = 平壤 (3) 同 = 京城 (4_5) 同 = 仁川 = 京城 (6) 同 = 釜山 ~ (7) ~ 門司 = 佐賀	佐賀県の教員・視学ら25名の視察団。刊行年は不明だが本文より1918年と推測。
31	植村 寅 (1919) 『青年の満鮮産業見 物』 東京: 大阪屋号 書店 310頁	62 (19:23)	(1918/7/20) 東京 = [中略] (23) = 下関 ~ (24) ~ 釜山 (25) 同 = 亀浦 = 大邱 (26_27) 同 = 群山 = 木浦 (28) 同 = (29) = 水原 = 京城 (30_8/2) 同 = 仁川 = 京城 (3_4) 同 = (5) = 鎮南浦 (6_7) 同 = 平壤 = 兼二浦 = 平壤 (8_9) 同 = 新義州 (10) 同 * 安東 ? 新義州 (11) 同 = (12) = 撫順 = 奉天 (13_16) 同 = 開原 = 四平街 (17) 同 = 公主嶺 = 長春 (18) 同 = 吉林 = (19) = 哈爾濱 (20_21) 同 = (22) = 長春 (23) 同 = 湯崗子 (24) 同 = 瓦房店 (25_26) 同 = 大連 = 旅順 (27) 同 = 大連 (28_30) 同 ~ (31) ~ 青島 [中略] (9/8) 天津 ~ (9) ~ 大連 (10) 同 ~ (11) ~ (12) ~ (13) ~ 神戸 [中略] (19) = 東京	著者は東京帝大政治科の学生。朝鮮銀行が東京帝大・京都帝大・東京高商・神戸高商に鮮満経済研究生を募集し、著者はそれに選ばれて旅行。
32	愛媛教育協会視察団 編 (1919)『支那満 鮮視察記録』 松山: 愛媛教育協会視察団 238頁	29 (5:16)	(1918/5/25) 松山 = 高浜 ~ (26) ~ 下関 ~ (27) ~ 釜山 (28) 同 = 大邱 = 京城 (29_30) 同 ? 仁川 ? 京城 (31) 同 = 開城 = 平壤 (6/1) 同 = 鎮南浦 = 平壤 = 安東 (2_3) 同 = 奉天 (4_5) 同 = (6) = 長春 (7) 同 = 撫順 (8_10) 同 = 遼陽 = 營口 (11) 同 = 大連 (12_13) 同 = 旅順 (14) 同 = 大連 (15_16) 同 ~ (17) ~ 青島 (18_19) 同 ~ (20) ~ (21) ~ 門司 ~ (22) ~ 広島 ~ 高浜	愛媛県の小学校教員ら8名の旅。満鮮方面と支那方面の2分隊の視察記録。ここでは前者の日程を記した。

33	大町桂月 (1919) 『満鮮遊記』東京: 大阪屋号書店 324 頁	117 (51:67)	(1918/9/30) 下関～釜山＝(10/1)＝京城(2)同＝平壤…内金剛(3_9)同*外金剛(10_11)同*海金剛(12_15)同*外金剛(16_25)同…元山＝京城(26_27)同＝平壤(28)同＝奉天(29_31)同＝大連(11/1_3)同＝旅順(4)同＝大連(5_8)同＝湯崗子(9)同＝千山(10_13)同＝熊岳城(14_15)同＝大連(16_18)同＝金州(19)同＝大連(20_24)同＝旅順(25_30)同＝大連(12/1)同＝旅順＝大連(2_4)同＝石河(5)同＝金州＝大連(6_8)同＝奉天(9)同＝長春(10_11)同＝哈爾濱(12)同＝(13)＝長春＝吉林(14)同＝長春(15)同＝公主嶺＝四平街(16)同＝鄭家屯(17_18)同＝四平街＝奉天(19)同＝遼陽(20)同＝奉天(21_24)奉天＝撫順(25)同＝深井子＝奉天(26_27)奉天＝煙台炭鉱＝遼陽＝奉天(28)同＝本溪湖(29)同＝五龍背(30)同＝安東＝五龍背(31_1919/1/2)同＝(3)＝京城(4_9)同＝論山(10)同…扶余(11)同…論山(12)同＝慶州(13_14)同＝浦項(15)同＝慶州(16)同＝蔚山(17_18)同…勿禁＝龜浦～金海(19)同？龜浦＝釜山(20_24)同～	各地で登山・講演を行っている。
34	小畔竜太郎 (1919) 『東亞遊記』長岡: 自家出版 85頁	34 (4:7)	(1919/5/2) 長岡＝[中略](6)＝下関～(7)～釜山＝(8)＝京城(9)同＝(10)＝平壤＝(11)＝本溪湖＝撫順(12)同＝(13)＝大連(14)同＝旅順＝大連(15)同＝(16)＝奉天(17)同＝(18)＝天津[中略](31) 上海～(6/1)～(2)～門司[中略](4)＝長岡	著者は銀行家。長岡商業会議所による10名の「支那視察団」に参加。越佐新報に寄稿。
35	埼玉県教育会編 (1919)『鵬程五千 哩 第二回朝鮮満洲 支那視察録』浦和: 埼玉県教育会 139 頁	30 (6:16)	(1918/7/25) 浦和＝(26)＝下関～(27)～釜山＝(28)＝京城(29_30)同＝仁川＝京城(31)同＝平壤(8/1)同＝安東*新義州*安東＝(2)＝撫順＝奉天(3)同＝長春(4_5)同＝吉林＝長春＝(6)＝四平街(7)同＝奉天(8)同＝大連(9_10)同＝旅順(11)同＝大連(12_13)同～(14)～青島(15)同～(16)～大連(17_18)同～(19)～(20)～(21)～(22)～神戸＝(23)＝東京＝浦和	師範学校・高等女学校・小学校の校長ら20名が参加。第1回の視察報告は前年の『踏破六千哩』[#25]。
36	細井 肇 (1919) 『支那を觀て』東京: 成蹊堂 145・260頁	78 (5:13)	(1919/4/27) 東京＝[中略](5/2) 神戸～(3)～(4)～(5)～(6)～基隆[中略](14) 台南～(15)～厦門[中略](6/23) 青島～(24)～大連(25)同＝旅順＝大連(26_27)同＝(28)＝奉天(29)同＝撫順＝奉天(30)同＝(7/1)＝長春＝(2)＝哈爾濱(3)同＝(4)＝長春＝吉林(5)同＝長春＝(6)＝奉天＝(7)＝京城(8_10)同＝(11)＝[中略](13)＝東京	著者はもと朝鮮研究会の員。東京朝日新聞社に在職。後半に「大亜遊記」を所収。2人旅。
37	間野暢簫 (1919) 『満鮮の五十日』東 京: 国民書院 573頁	54 (22:19)	(1918/7/16) 東京＝[中略](18)＝門司～(19)～釜山(20)同＝大邱＝(21)＝水原(22)同＝京城(23_25)同＝仁川(26)同＝元山(27_29)同～外金剛(30_8/1)同*海金剛(2)同～(3)～元山＝京城(4)同＝開城＝(5)＝平壤＝鎮南浦(6_7)同＝兼二浦(8)同＝安東(9)同*新義州*安東＝(10)＝本溪湖＝撫順(11)同＝奉天(12_13)同＝(14)＝長春＝(15)＝遼陽＝鞍山＝湯崗子(16)同＝大連(17_24)同＝旅順＝大連(25_26)同～(27)～(28)～(29)～(30)～門司[中略](9/7)＝東京	東京高等商業学校とみられる学生の旅行。福島民友新聞に連載。同行者の病気により大連に長逗留している。
38	山科禮藏 (1919) 『渡支印象記―鵬程 千里―』東京: 自家 出版 334頁	49 (6:13)	(1917/10/23) 東京＝(24)＝大阪＝(25)＝下関～(26)～釜山＝京城(27_28)同＝仁川＝京城(29)同＝兼二浦～鎮南浦(30)同＝平壤(31)同＝安東＝五龍背(11/1)同＝長春(2)同＝哈爾濱(3)同＝長春＝(4)＝奉天(5)同＝撫順＝奉天(6)同＝(7)＝旅順＝大連(8_9)同～(10)～青島(11)同～(12)～大連(13)同＝(14)＝(15)＝天津[中略](12/5) 上海～(6)～(7)～(8)～門司[中略](10)＝東京	著者は東京商業会議所副会頭。同会議所から派遣された7名の視察団。
39	松永安左衛門 (1919)『支那我觀』 東京: 実業之日本社 142頁	47 (6:16)	(1918/10/6) 下関～(7)～釜山＝京城(8※11)同＝兼二浦＝平壤(12)同＝(13)＝奉天(14)同＝撫順＝(15)＝大連(16)同？旅順？大連(17_18)同＝(19)＝湯崗子＝立山＝奉天(20)同＝開原＝(21)＝長春＝哈爾濱(22_23)同＝(24)＝長春＝吉林＝長春＝(25)＝奉天(26)同＝本溪湖＝奉天(27_28)同＝唐山[中略](11/19) 上海～(20)～(21)～長崎 ※京城滞在中、仁川を往復。	支那小游と題する旅行記を含む。著者は電力事業に関わり、後に東邦電力社長などを務めた。
40	高森良人 (1920) 『満・鮮・支那遊行の 印象』東京: 大同館 327頁	104 (7:29)	(1919/9/7) 熊本＝下関(8)同～(9)～釜山＝京城(10_14)同＝(15)＝平壤＝(16)＝奉天(17_20)同＝長春(21_?)同＝哈爾濱(?_10/5)同＝(6)＝奉天＝撫順(7)同＝奉天(8)？(10) 大連(11_13)同＝旅順＝大連(14)同～(15)～青島[中略](11/16) 上海～(17)～(18)～(19)～門司	著者は中国哲学者。後に第五高等学校教授。日程の記載がやや曖昧な箇所あり。
41	東京高等商業学校東 亜倶楽部編 (1920) 『中華三千哩』東 京: 大阪屋号書店 305頁	33 (0:5)	(1919/7/20) 神戸～(21)～門司～(22)～(23)～上海[中略](16) 青島～(17)～大連(18_21)同＝旅順	「東亜の研究」を志す学生ら30名の団体旅行。東京高商の団体旅行としては最初の例。

42	沼波瑠音 (1920) 『鮮満風物記』東 京:大阪屋号書店 289頁	72 (43:23)	(1919/7/5) 東京=[中略](8)=下関~釜山=(9)=京城(10_11) 同=仁川=京城(12)同=鳥致院...清州(13)同...鳥致院=大邱 (14)同...慶州(15_17)同*蔚山(18)同...勿金=馬山(19)同~鎮 海~馬山(20)同...晋州(21)同...陝川*海印寺(22)同*居昌(23) 同...金泉=大田(24)同=木浦(25)同=松汀里...光州(26)同... 松汀里=全州(27)同=裡里...群山(28)同=論山*扶余(29)同... 論山...公州(30)同...鳥致院=京城(31_8/1)同=水原=開城(2) 同=平壤(3)同=鎮南浦=平壤(4)同=新義州=(5)=奉天=大連 (6_8)同=旅順(9)同=金州=(10)=熊岳城=大石橋=營口(11_13) 同=鞍山=湯崗子(14)同=遼陽=撫順(15)同=奉天(16_17) 同=(18)=四平街=鄭家屯=四平街=長春(19)同=吉林(20)同= 長春=(21)=哈爾賓=(22)=長春=開原=鉄嶺(23)同=奉天=本 溪湖(24)同=五龍背(25)同=安東(26)同=京城(27_29)同=平 康...内金剛(30_9/1)同*外金剛(2)同*海金剛(3)同...外金剛 (4_6)同~元山(7)同=京城(8)同=(9)=釜山~(10)~下関(11) 同=[中略](14)=東京	拓殖局より植民地に 関する唱歌作詞を依 頼され、各地を訪問。
43	伊藤貞五郎 (1921) 『最近の朝鮮及支那』 神戸市会支那視察団 279頁	29 (4:7)	(1920/10/12) 神戸=下関~(13)~釜山=京城(14_15)同=(16) =平壤=安東(17)同=奉天(18)同=(19)=旅順=大連(20_21) 同=(22)=奉天=(23)=天津[中略](11/6) 上海~(7)~(8)~(9) ~神戸	10名からなる神戸市 会視察団に随行した 神戸新聞記者の連載 「満鮮ひた走り」・「支 那印象記」をまとめる。
44	越佐教育雑誌社 (1922)『越佐教育 満鮮視察記 附青島 上海』新潟:越佐教 育雑誌社 96頁	25 (4:11)	(1922/6/6) 東京=(7)=下関~(8)~釜山=(9)=永登浦=仁川= 京城(10)同=(11)=平壤=(12)=奉天(13)同=撫順=奉天= (14)=長春(15)同=吉林=長春=(16)=營口(17)同=旅順(18) 同=大連(19_22)同~(23)~青島[中略](28) 上海~(29)~(30) ~門司	新潟県の小学校校 長・教育行政関係者ら 22名の視察団。
45	小松春翠 (1922) 『魯山堂漫記一鞍馬 陪乗一』東京:東京 堂書店 38丁	8 (4:0)	(1921/3/23) 明石=呉(24)同~(25)~鎮海~馬山=(26)=京城 (27_28)同=釜山~(29)~呉=(30)=明石	「海軍思想普及宣伝」 を目的とする1府10県 の公務員310名の「雞 林海陸見学団」に参 加。軍艦鞍馬に乗船。 明石日日に寄稿。
46	衆議院議員支那視察 団 (c1922)『大正 十年十月衆議院議員 支那視察団日誌』 (出版者不明) 52頁	41 (4:13)	(1922/10/5) 東京=(6)=下関~(7)~釜山=京城(8_9)同=(10) =新義州...安東=五龍背(11)同=奉天=(12)=長春=吉林(13) 同=(14)=哈爾賓(15_16)同=長春=奉天(17)同=撫順=奉天 (18)同=(19)=大連(20)同=旅順=大連(21_22)同~(23)~青 島[中略](11/11) 上海~(12)~(13)~下関=(14)=東京	「前例ニ依リ各派ヨリ 選出セラレタル議員」 ら12名の視察。
47	石井謹吾 (1923) 『満鮮支那遊記』東 京:石井法律事務所 131頁	29 (3:7)	(1921/10/11) 東京=(12)=下関~(13)~釜山=京城(14_15)同= 安東=(16)=奉天=大連(17)同=旅順=大連(18)同=(19)= 奉天(20_21)同=(22)=北京[中略](11/4) 上海~(5)~(6)~(7) 神戸=(8)=東京	日本弁護士協会臨時 大会(大連)と北京開 催の国際弁護士協会 総会(北京)に64名で 参加。
48	内田春涯 (1923) 『鮮満北支感興とこ ろどころ』東京:内 田重吉 156頁	35 (7:11)	(1922/9/19) 東京=(20)=下関~(21)~釜山=大邱(22)同=京城 (23_27)同=(28)=奉天(29_10/2)同=大連(3_4)同=旅順= 大連(5)同~(6)~天津[中略](15) 青島~(16)~大連(17)同~ (18)~(19)~(20)~神戸[中略](27)=東京	朝鮮医学会(京城)、 満洲医科大学開学式 (奉天)に参加。
49	高井利五郎 (1923) 『最近踏査 鮮満支 那の教育と産業』広 島県立広島工業学校 252頁	49 (5:13)	(1922/10/7) 下関~(8)~釜山=京城(9_11)同=(12)=平壤= (13)=奉天(14)同=撫順=奉天(15)同=(16)=長春=哈爾賓(17 _19)同=(20)=湯崗子=(21)=大連(22)同?旅順?大連(23_25) 同~(26)~青島[中略](11/22) 上海~(23)~(24)~門司	著者は広島県立工業 学校校長。実業之日本 社が25周年記念とし て全国の実業学校長 17名を視察旅行に派 遣。
50	橋本文壽 (1923) 『東亜のたび』函 館:自家出版 79頁	45 (6:21)	(1922/9/20) 函館~[中略](23) 下関~(24)~釜山(25)同=京城 (26_28)同=(29)=奉天(30_10/2)同?撫順?奉天(3)同=大連 (4_7)?旅順=(8)=湯崗子?鞍山?湯崗子(9)同=長春(10)同= (11)=哈爾賓(12_13)同=長春(14)同=公主嶺=四平街(15)同= 鄭家屯=四平街=奉天(16)同=(17)=北京[中略](28) 青島~ (29)~大連(30)同=奉天(31)同=(11/1)=[朝鮮を経由して11/4帰 国]	著者は函館師範学校 の校長か。全国師範 学校校長会・工業学校 長会(大連)に参加の ため旅行団を組んで 出張。会期後に著者 が参加した北京コース は22名参加。

51	渡邊巳之次郎 (1923)『老大国の山河―余と朝鮮及支那―』東京:金尾文淵堂 443頁	46 (1:10)	(1920/5/12)夙川=下関~(13)~釜山=(14)=奉天(15_16)同=(17)=長春=哈爾濱(18)同=(19)=長春=(20)=旅順=大連(21)同=(22)=撫順=奉天(23)同=(24)=北京[中略](6/23)青島~(24)~(25)~下関=(26)=西宮	著者は大阪毎日新聞、東京日日新聞に勤めた。2人旅。
52	木下光太郎 (1925)『北支満鮮視察みやげ』福島(福岡県):福島商工会 91頁	25 (4:18)	(1925/6/22)門司~(23)~(24)~大連(25_29)同~(30)~天津[中略](7/5)天津~(6)~(7)~營口(8)同=奉天(9_11)同=(12)=平壤=[以下日程不明]京城=釜山=門司[7/16着] ※旅順、撫順、仁川も訪ねているが日程は不明確。	福岡県特産品販売会(大連)に出張員として参加。
53	鳥取満鮮実業視察団編 (c1925)『満鮮の旅』同視察団(頁番号なし)	22 (5:13)	(1923/6/5)鳥取=(6)=下関~(7)~釜山=(8)=京城(9)同?仁川?京城=(10)=平壤=安東(11)同*新義州*安東=(12)=奉天(13)同=撫順=奉天=(14)=長春=哈爾濱(15)同=(16)=吉林=長春(17)同=(18)=湯崗子=(19)=大連(20_21)同=旅順=大連(22)同~(23)~(24)~下関[中略](26)=鳥取	鳥取県内の実業家ら19名による視察旅行。
54	伊奈松庵 (1926)『私の鮮満旅行』田原:伊奈森太郎 92頁	25 (6:15)	(1926/8/29)田原=名古屋=(30)=下関~釜山(31)同=(9/1)=京城(2_3)同=平壤(4)同=安東=(5)=奉天(6_8)同=撫順=奉天=(9)=公主嶺=長春(10)同=哈爾濱(11_12)同=(13)=鞍山=湯崗子(14)同=大連(15_16)同=旅順=大連(17_18)同~(19)~(20)~(21)~神戸=京都(22)同=田原	著者は愛知県田原町の中部尋常高等小学校長。満鉄主催の全国小学校長会議(奉天)に愛知県から6名で参加。
55	全国中等学校地理歴史科教員協議会編 (1926)『全国中等学校地理歴史科教員第七回協議会及満鮮旅行報告』東京:同協議会 315頁	30 (6:13)	(1925/7/23)門司~(24)~(25)~大連(26)同=旅順=大連(27_29)同=(30)=營口=湯崗子(31)同=鞍山=湯崗子=(8/1)=公主嶺=長春=(2)=哈爾濱(3)同=(4)=奉天(5)同=撫順=奉天(6)同=安東=平壤(7)同=開城=京城(8_10)同=仁川=京城(11)同=釜山~ ※帰路「丁案」(8/6)奉天=(7)=北京[中略](11)天津=(12)=奉天=(13)=安東=(14)=平壤=京城(15_16)同=(17)=釜山~(18)~下関	満鉄の支援を得て大連で協議会を開催し、あわせて満鮮旅行を実施。115名が参加。飯本信之、三沢勝衛、内田寛一も参加。
56	農業学校長協会編 (1926)『満鮮行 附北支紀行』東京:農業学校長協会 189頁	21 (6:15)	(1925/9/24)釜山=(25)=水原=京城(26_27)同=仁川=京城=(28)=平壤=(29)=奉天(30)同=撫順=奉天=(10/1)=四平街=通遼=鄭家屯(2)同=四平街=公主嶺(3)同=長春(4)同=哈爾濱(5_6)同=(7)=熊岳城(8)同=大連(9_11)同=旅順=大連=(12)=奉天※(13)同=(14)=釜山 ※参加者の一部は別れて中国を視察、22日に青島で解散。	全国農業学校長会議を公主嶺で開催し、あわせて74名での視察旅行を行う。
57	藤田元春 (1926)『西湖より包頭まで』東京:博多成象堂 430頁	63 (5:7)	(1924/8/10)京都=神戸~(11)~長崎~(12)~上海[中略](9/28)青島~(29)~大連(30_10/1)同=旅順=大連(2)同=(3)=奉天(4)同=撫順?奉天(5)同=(6)=平壤(7)同=京城(8_9)同=(10)=釜山~下関=(11)=京都	著者は地理学者。第三高等学校教授。田中啓爾、西田与四郎、多田文男とともに外務省対支文化事業局の名により中国を調査。
58	森本角蔵 (1926)『鮮満支とところどころ一雲烟過眼日記―』東京:目黒書店 206頁	31 (3:6)	(1925/7/31)東京=(8/1)=下関~(2)~釜山=京城(3)同=(4)=平壤=(5)=奉天(6)同=撫順=奉天=(7)=大連(8)同=旅順=大連(9_10)同~(11)~青島[中略](29)上海~(30)~長崎	外務省文化事業部派遣の21名の支那視察教員団に参加。
59	東京外国語学校支那語部 (c1926)『大正十四年度東京外国語学校支那旅行報告』(謄写版)(頁番号なし)	47 (0:11)	(1925/7/18)東京=(19)=神戸~(20)~(21)~(22)~大連(23)同?旅順?大連(24)同~(25)~天津[中略](8/21)北京=(22)=奉天(23_24)奉天=長春(25_26)同=(27)=大連(28_29)同~(30)~(31)~(9/1)~神戸=(2)=東京	学生16名・教員2名による見学旅行。以後、大正15年度~昭和5年度および昭和7年度の各年度の旅行報告が確認できる。
60	帝国鉄道協会編 (1927)『視鮮漫録』東京:帝国鉄道協会 343頁	11 (10:0)	・丸山熊八「朝鮮旅行記」(89-109頁) (1927/5/20)下関~(21)~釜山=京城(22_24)同=仁川=京城(25)同=平壤(26)同=安東=(27)=大邱(28)同=慶州(29)同...釜山(30)同~[以下記載なし] ・今井捨吉「日記と感想」(149-159頁) (1927/5/25)京城=広川=温陽(26)同=黄登...裡里=木浦(27)同=群山(28)同=大邱(29)同=慶州(30)同...釜山 ・菅野平三「視察旅行の雑感」(290-305頁) (1927/5/19)東京=[記載なし](21)~釜山=京城(22_24)同=仁川=京城=(25)=平壤=京城=(26)=元山~外金剛...海金剛...外金剛(27_28)同*内金剛(29_30)同...炭甘=京城	帝国鉄道協会総会(京城)と4班に分かれての視察旅行の参加者の感想文を集成したものである。総参加人数は不明。左には日程が判明する感想文3例の旅程を示す。日数の項は丸山熊八の例。

61	中山正善 (1927)『鮮満支素見』丹波市(奈良県):天理教道友社 232頁	34 (11:15)	(1926/8/10)大阪=(11)下関～釜山(12)同=京城(13_14)同=(15)=元山(16)同=京城(17)同=平壤(18)同=(19)=奉天(20)同=撫順=奉天(21_22)同=(23)=哈爾賓(24)同=(25)=湯崗子(26)同=大連(27_28)同=旅順…大連(29_31)同～(9/1)～天津[中略](6)北京=(7)=奉天(8)同=(9)=京城(10)同=(11)=釜山～下関=(12)=大阪	著者は天理教真柱。天理教布教に関わる旅。同伴者の数是不明。『あをぎり』に掲載。
62	福德生命保険株式会社編 (1927)『教育家の目に映じたる朝鮮満洲南洋事情 第一輯』大阪:福德生命保険株式会社 207頁	29 (7:13)	(1927/6/12)下関～(13)～釜山(14)同?慶州=(15)=仁川=京城(16_17)同=(18)=平壤(19)同=安東=(20)=撫順=奉天(21_23)同=長春(24)同=哈爾賓(25)同=(26)=鞍山=湯崗子(27)=旅順(28)同=大連(29_7/1)同～(2)～天津[中略](7)天津～(8)～(9)～(10)～門司	福德生命保険会社が創立15周年記念事業として欧米・南洋・支那朝鮮に小中学校の教員らを派遣。人選は文部省に委ねる。支那朝鮮には15名。
63	渡辺文弥 (1927)『満鮮を視察して』須賀川(福島県):須賀川時報社 183頁	36 (8:17)	(1924/9/5)須賀川=[中略](7)=下関(8)同～釜山(9_10)同=京城(11※13)同=平壤? (14)=安東(15)同=(16)=奉天(17)同=撫順=奉天(18)同=大連(19※22)同=(23)=營口=湯崗子(24)同=鞍山=湯崗子=(25)=公主嶺=長春(26)同=哈爾賓(27_29)同=(30)=(10/1)=(2)=釜山～(3)～下関[中略]=(10)須賀川※日程は不明だが京城滞在中仁川に、大連滞在中旅順に、それぞれ鉄道で往復。	著者は福島県須賀川商業学校長。50余名の視察団を釜山で結成、全国商業学校長会議(大連)に参加。旅行年次は推測。須賀川時報に連載。
64	東京外国語学校支那語部・蒙古語部(c1927)『大正十五年度東京外国語学校支那旅行報告』(謄写版) 217頁	51 (0:28)	(1926/7/13)東京=(14)=神戸～(15)～(16)～(17)～大連(18)同?旅順?大連(19)同=(20)=奉天(21)同?撫順?奉天(22)同=長春(23)同=(24)=哈爾賓[以下2班に分かれる]※支那班(25)哈爾賓=(26)=長春=吉林=長春(27)同=(28)=大連(29_30)同～(31)～天津[中略](8/24)上海～(25)～(26)～神戸=(27)=東京※蒙古班(25)哈爾賓(26)同=(27)=滿洲里(28_30)同=海拉爾(31_8/1)同=興安(2)同=齊齊哈爾(3_5)同=洮南(6_7)同=鄭家屯(8)同=通遼(9)同=鄭家屯(10)同=四平街=(11)=大連(12_13)同～(14)～天津[中略](27)同～(28)～(29)～(30)～(31)～神戸=(9/1)=東京	支那班20名と蒙古班4名(それぞれ教授1名を含む)の旅。日数は蒙古班のもの。
65	小林福太郎 (1928)『北支満鮮随行日誌』東京:自家出版 33頁	18 (2:4)	(1928/4/19)東京=(20)=神戸～(21)～門司～(22)～(23)～(24)～天津[中略](29)天津～(30)～大連(5/1)同…旅順…大連=(2)=奉天(3)同=(4)=京城=(5)=釜山～下関=(6)=東京	日蓮宗の師の海外布教活動に随行。師と従者4名の旅。
66	千葉県教育会編 (1928)『満鮮の旅』千葉県教育会 190頁	19 (4:11)	(1927/9/10)東京=(11)=神戸～(12)～(13)～(14)～大連(15)同=旅順=大連(16_17)同=(18)=鞍山=奉天(19)同=撫順=奉天(20)同=(21)=長春=哈爾賓(22)同=長春(23)同=公主嶺=奉天=(24)=安東=(25)=平壤=京城(26_27)同=仁川=京城=(28)=釜山～下関	内鮮満聯合教育会(大連)に18名の教育視察団を派遣。
67	東京外国語学校支那語部・蒙古語部編 (1928)『昭和二年度東京外国語学校支那旅行報告』東京外国語学校支那語部・蒙古語部(謄写版) 365頁	50 (3:21)	(1927/7/18)東京=(19)=下関～(20)～釜山=京城(21)同=(22)=新義州?安東=五龍背(23)同=奉天(24_26)同=四平街=鄭家屯(27)※支那班(27)鄭家屯=通遼=鄭家屯=(28)=洮南(29)同=齊齊哈爾(30_8/1)同=安達=哈爾賓(2_3)同=長春(4_6)同=公主嶺=(7)=大連(8_10)同=(11)=奉天=(12)=北京[中略](31)天津～(9/1)～(2)～(3)～(4)～神戸=(5)=東京※蒙古班(27)鄭家屯=通遼=鄭家屯(28_30)同=洮南(31_8/1)同=齊齊哈爾(2)同=滿洲里(3_4)同…ダライ湖(5)同…滿洲里(6)同=(7)=海拉爾(8_10)同=宜立克都(11)同=哈爾賓[以下支那班のルートを追って合流]	支那班16名と蒙古班4名(それぞれ教授1名を含む)の旅。日数は支那班のもの。
68	福德生命保険株式会社編 (1928)『教育家の目に映じたる欧米南洋満鮮事情 昭和三年度』大阪:福德生命保険株式会社 225頁	26 (7:13)	(1928/5/25)下関～(26)～釜山(27)同…梵魚寺…蔚山=慶州=大邱=(28)=仁川=京城(29_30)同=(31)=平壤(6/1)同=安東=(2)=撫順=奉天(3_4)同=長春=哈爾賓(5_7)同=(8)=鞍山=旅順(9_10)同=大連(11_13)同～(14)～青島[中略](18)上海～(19)～長崎	福德生命保険会社の教育家派遣事業の第2回目。欧米・南洋・支那朝鮮に派遣。支那朝鮮には12名。
69	北条太洋 (1928)『支那遊行記』東京:北洋社 170頁	66 (?:?)	(1927/10/26)?(28)長崎～(29)～上海[中略](12/20)天津～(21)～(22)～大連(23)同=(24)=奉天=(25)=哈爾賓(26)同=(?)=釜山～?(30)?	全亜細亞聯盟理事会(上海)に参加。紀伊毎日に連載。著者は外交官とみられる。

70	天沼俊一 (1929) 『朝鮮紀行一月精寺・ 華嚴寺・海印寺』 (出版者不明) 44頁	30 (28:0)	(1929/3/21) 京都 = ? (22) ? 慶州 (23_26) 同 = 京城 (27_29) 同 ? 水原 ? 京城 (30_31) 同 ? 開城 (4/1_2) 同 ? 京城 (3) 同... 原州 (4) 同... 月精寺 (5_7) 同... 原州 (8) 同... 京城 (9_10) 同 = 光州 (11) 同... 求礼... 華嚴寺 (12_14) 同 = 求礼... 光州 (15) 同 = 大邱 (16) 同... 海印寺 (17_18) 同... 大邱 = 釜山 ~ (19) ~	著者は京都帝大教授。仏教寺院調査の2人旅。『東洋美術』に寄稿した紀行文を集成。1932年に続編[#92]。
71	漆山雅喜 (1929) 『朝鮮巡遊雑記』 東京: 自家出版 100頁	18 (15:0)	(1929/4/17) 下関 ~ (18) ~ 釜山 = 京城 (19_22) 同 = 沙里院... 海州 (23) 同... 長山串 (24) 同 ? 信川温泉 (25) 同... 沙里院 = 平壤 (26_28) 同 = 京城 (29_30) 同 = (5/1) = 大邱... 慶州 (2) 同... 釜山 ~ (3) ~ 下関 = 京都 (4) 同 = 東京	團琢磨(三井合名会社)ら7名の産業視察旅行に随行。著者は三井合名会社の山林課長。
72	島 房男 (1929) 『満鮮みやげ』 敦賀: 自家出版 146頁	16 (5:10)	(1928/5/24) 敦賀 = 下関 ~ (25) ~ 釜山 = (26) = 京城 (27) 同 = 平壤 = (28) = 撫順 = (29) = 旅順 ? 大連 (30_?) ? 金州 ? (?) ? 湯崗子 ? (6/1) ? 鞍山 = (2) = 哈爾濱 (3) 同 = 長春 = 公主嶺 = 奉天 (4) 同 = (?) = 安東 = (6) = 仁川 = 釜山 (7) 同 ~ 下関 = (8) = 敦賀	福井・滋賀の経済界の236名の団体旅行。新聞に連載。著者は敦賀郡医師会会長を務めた。
73	下関鮮満案内所編 (1929) 『鮮満十二 日―鮮満視察団紀念 誌―』 下関鮮満案内所 111頁	12 (6:6)	(9/24) 下関 ~ (25) ~ 釜山 = 京城 (26_27) 同 = 仁川 = 京城 = (28) = 平壤 = (29) = 大連 (30) 同 = 旅順 = 大連 (10/1) 同 = (2) = 撫順 = 奉天 (3) 同 = (4) = 安東 = (5) = 釜山 ~ 下関	下関鮮満案内書の企画旅行。199名の参加者中数十名が随筆を寄稿。
74	福德生命保険株式会社編 (1929) 『教育家の目に映じたる欧米南洋鮮支事情 昭和四年度』 大阪: 福德生命保険株式会社 236頁	29 (4:6)	(1929/6/2) 下関 ~ (3) ~ 釜山 = 京城 (4) 同 = (5) = 平壤 (6) 同 = 新義州 ~ 安東 = (7) = 撫順 = 奉天 (8) 同 = (9) = 旅順 = 大連 (10_11) 同 ~ (12) ~ 塘沽 = 天津 [中略] (29) 上海 ~ (30) ~ 長崎	福德生命保険会社の教育家派遣事業(第3回目)。欧米・南洋・支那朝鮮に小学校校長らを派遣。支那朝鮮には11名。
75	的場 實 (1929) 『見たまゝの北支と満蒙』 東京府立第一商業学校校友会 92頁	33 (4:15)	(1926/8/10) 東京 = (11) = 下関 ~ (12) ~ 釜山 = 京城 (13_14) 同 = 仁川 ? = (15) = 平壤 = 安東 (16) 同 = 奉天 (17_18) 同 = 撫順 = 奉天 = (19) = 洮南 (20) 同 = 齊齊哈爾 (21) 同 = 哈爾濱 (22_23) 同 = (24) = 長春 = 公主嶺 = (25) = 湯崗子 = 營口 (26) 同 = 大連 (27_28) 同 ? 旅順 = 大連 (29) 同 ~ (30) ~ 天津 [中略] (9/5) 天津 = 大沽 ~ (6) ~ (7) ~ (8) ~ (9) ~ 神戸 [中略] (11) = 東京	東京府立第一商業学校の第3回満蒙旅行団に参加。同校では最上級生に見学旅行を実施していた。総参加者数は不明。
76	東京外国語学校支那語部 (c1929) 『昭和三年度東京外国語学校支那語部生徒支那旅行報告』 (謄写版) 471頁	51 (2:9)	(1928/7/13) 東京 = (14) = 下関 ~ (15) ~ 釜山 = 京城 (16) 同 = (17) = 奉天 (18_19) 同 = 撫順 = 遼陽 (20) 同 = 湯崗子 (21) 同 = 大連 (22) 同 = 旅順 ? 大連 (23_24) 同 ~ (25) ~ 天津 [中略] (8/29) 上海 ~ (30) ~ (31) ~ 神戸 = (9/1) = 東京	学生20名・教員2名による旅。
77	大屋徳城 (1930) 『鮮支巡礼行』 京都: 東方文献刊行会 120頁	59 (56:0)	(1922/3/18) 京都 = (19) = 下関 ~ 釜山 = (20) = 京城 (21_30) 同 = 平壤 (31_4/1) 同 = 岐陽 = 平壤 (2_3) 同 = 真池洞 = 平壤 = (4) = 開城 = 京城 (5_6) 同 = 開城 (7_8) 同 = 京城 (9) 同 = 開城 = 京城 (10_20) 同 = 論山 (21) 同... 扶余... 論山 = (22) = 大邱 (23_25) 同... 高靈 * 海印寺 (26_5/3) 同... 大邱 (4_5) 同 = 慶州 (6_8) 同 = 大邱 (9_10) 同 = 若木 = 大邱 (11_13) 同 = 釜山 ~ (14) ~ 下関 = (15) = 京都	大正11年および12年の調査旅行記を収録。前者は2人旅、後者は単独行。著者は後に大谷大学教授。
		30 (13:2)	(1923/3/21) 京都 = (22) = 下関 ~ (23) ~ 釜山 (24) 同 = 勿金... 通度寺... 蔚山 (25) 同 = 慶州 = 大邱 (26_30) 同 = 京城 (31_4/3) 同 = 平壤 (4) 同 = (5) = 奉天 (6) 同 = (7) = 天津 [中略] (15) 上海 ~ (16) ~ (17) ~ (18) ~ 門司 ~ (19) ~ 神戸	
78	小野塚久平 (1930) 『満鮮旅行日記』 小山: 自家出版 81頁	22 (3:12)	(1927/10/16) 小山 = 東京 = (17) = 下関 ~ (18) ~ 釜山 = 京城 (19) 同 = (20) = 平壤 = 安東 (21) 同 * 新義州 * 安東 = 奉天 (22_23) 同 = 撫順 = 奉天 = 鉄嶺 (24) 同 = 長春 = (25) = 哈爾濱 (26) 同 = 公主嶺 (27) 同 = 遼陽 (28) 同 = 海城 (29) 同 = 旅順 (30) 同 = 大連 (31_11/1) 同 ~ (2) ~ (3) ~ (4) ~ 神戸 (5) 同 = (6) = 東京	著者は栃木県小山町長。栃木県町村長会11名による満洲駐留軍慰問の旅。
79	東京外国語学校支那語部・蒙古語部 (1930) 『昭和四年度東京外国語学校支那旅行報告』 東京外国語学校 (謄写版) 389頁	50 (4:27)	(1929/7/15) 東京 = (16) = 下関 ~ (17) ~ 釜山 = 京城 (18) 同 = (19) = 平壤 (20) 同 = 新義州 * 安東 = 五龍背 (21) [この間私用で鞍山に滞在] (24) 奉天 = (25) = 長春 = 哈爾濱 (26_28) 同 = (29) = 齊齊哈爾 (30) 同 = 哈爾濱 = (31) = 長春 = (8/1) = 奉天 = 鞍山 (2) [この間私用で鞍山に滞在] (8) 旅順 ? 大連 (9_15) 同 ~ (16) ~ 大沽 = 天津 [中略] (27) 北平 [以下記述がないが、全旅程は50日とする]	支那班(13名)・蒙古班(3名)の2班の学生と教員2名の旅。左の旅程は中島庫「鮮満支印象記」(349~389頁)の示す蒙古班のもの。

80	友田亘剛 (1930) 『支那満洲朝鮮旅行 飛ぶ鳥物語』東京: 三成社 453頁	38 (4:8)	(1929/2/21) 東京=[中略] (23)=長崎~(24)~上海[中略] (3/7) 青島~(8)~大連(9)同...旅順=大連(10)同~(11)~塘沽[中略] (18) 北京=(19)=奉天=長春=(20)=哈爾濱=(21)=奉天(22)同=撫順=奉天(23)同=(24)=京城(25_26)同=釜山(27)同~(28)~下関=(29)=東京	著者は陸軍教授で国語教育に関する著作がある。子どもに旅行談を語る体裁をとる。
81	藤山雷太 (1930) 『鮮支遊記』東京: 千倉書房 150頁	56 (23:23)	(1929/9/15) 東京=[中略] (18)=門司(19)同=釜山(20)同...蔚山...慶州(21)同=大邱(22)同=京城(23_26)同=内金剛(27_28)同*外金剛(29)同=海金剛?外金剛(30_10/1)同=元山(2)同*釈王寺=京城(3_5)同=開城...延安...海州(6)同...夢金浦(7)同...信川温泉(8_9)同...沙里院=平壤(10)同=鎮南浦?平壤(11)同=安東(12)同=新義州?五龍背(13)同=奉天(14_16)同=大連(17)同=旅順?大連(18_20)同~(21)~青島[中略] (30) 上海~(31)~長崎[中略] (11/9) 京都=東京	著者は財閥・藤山コンツェルンの中心人物。4名の旅。大日本製糖を経営。後に『満鮮遊記』(124)も著している。
82	与謝野寛・晶子 (1930)『満蒙遊記 附満蒙の歌』東京: 大阪屋号書店 344 頁	44 (0:35)	(1928/5/5) 東京=(6)=神戸~(7)~(8)~(9)~大連(10_12)同...旅順...大連(13_16)同=金州=熊岳城(17)同=營口=湯崗子(18)同*千山(19)同*湯崗子(20_21)同=遼陽(22)同=安東(23)同=五龍背(24)同=四平街(25)同=洮南(26)同=齊齊哈爾(27)同=哈爾濱(28_31)同=長春(6/1)同=吉林=長春(2_3)長春=公主嶺=奉天(4)同=撫順=奉天(5_7)同=大連(8※12)同~(13)~(14)~(15)~(16)~神戸=京都(17)同=東京 ※大連滞在中、旅順を再訪	満鉄の招待により満洲を夫婦で訪問。紀行文の大部分は晶子による。
83	吉野豊次郎 (1930) 『鮮満旅行記』東 京:金洋社 88頁	20 (5:10)	(1929/10/7) 東京=(8)=下関~(9)~釜山=京城(10_11)同=仁川=京城=(12)=平壤(13)同=新義州*安東=(14)=撫順=奉天(15)同=(16)=哈爾濱(17)同=(18)=長春=湯崗子(19)同=大連(20)同=旅順=大連(21_22)同~(23)~(24)~下関=[中略] (26)=東京	日本旅行協会(JTB)が募集した第一回鮮満視察団(15名)に参加。京城で博覧会を見学。
84	加太邦憲 (1931) 『加太邦憲自歴譜』 東京:加太重邦 330 頁	46 (10:11)	(1912/5/31) 神戸~(6/1)~門司(2)同~(3)~(4)~上海[中略] (21) 天津~(22)~營口(23)同=大連(24_25)同=旅順=大連(26)同=(27)=哈爾濱(28)同=長春=(29)=撫順=奉天(30_7/1)同=安東(2)同=京城(3_4)同=仁川=京城(5_7)=平壤(8_10)同=京城(11)=釜山~(12)~下関[中略] (15)=東京	10章を1912年の貴族院議員10名の視察旅行の記録に宛てる。
85	賀茂百樹 (1931) 『満鮮紀行』東京: 自家出版 133頁	25 (8:11)	(1931/5/13) 東京=大阪(14)同=神戸~(15)~(16)~大連(17_18)同=旅順=大連(19_20)同=遼陽=奉天(21)同=撫順=奉天(22_24)同=五龍背(25)同=安東...新義州...安東(26)同=平壤(27)同=開城=京城(28_29)同=仁川=京城(30)同=内金剛(31)同=京城=(6/1)=慶州=釜山~(2)~下関=[中略] (6)=東京	著者は靖国神社官司。日露戦争慰霊の公務のため出張。
86	里見 弴 (1931) 『満支一見』東京: 春陽堂 135頁	43 (0:20)	(1929/12/21) 大船=(22)=京都=(23)=下関~(24)~(25)~大連(26)同...旅順...大連(27_28)同=熊岳城(29)同=營口=湯崗子(30_31)同=遼陽=鉄嶺(1930/1/1)同=四平街(2)同=鄭家屯(3)同=長春=吉林=長春=(4)=哈爾濱(5_7)同=(8)=長春=奉天(9)同=撫順=奉天=(10)=大連(11)同~(12)~(13)~天津[中略] (25) 天津~(26)~大連(27)同~(28)~(29)~(30)~下関=京都(31)同=(2/1)=大船	志賀直哉と2人で満鉄に招待される。時事新報に掲載。
87	東京外国語学校支那 語部編 (1931)『昭 和五年度東京外国語 学校支那旅行報告』 東京外国語学校支那 語・蒙古語部(謄写 版) 451頁	50 (3:28)	(1930/7/14) 東京=(15)=神戸~(16)~長崎~(17)~上海[中略] (31) 青島~(8/1)~大連(2)同=旅順=大連(3_5)同~天津[中略] (22) 北平=(23)=山海関=(24)=奉天(25_26)同=撫順=奉天=(27)=五龍背(28)同=安東=(29)=京城(30)同=(31)=釜山~下関=(9/1)=東京	学生19名と教員2名の旅。
88	東京鉄道局編 (1931)『鮮満の旅』 東京鉄道局 192頁	18 (5:10)	(1931/5/5) 東京=(6)=下関~(7)~釜山=京城(8)同=仁川=京城(9)同=(10)=平壤=安東=(11)=金州=大連(12)同=旅順=大連(13)同=(14)=鞍山=遼陽=長春(15)同=哈爾濱(16)同=長春=(17)=撫順=奉天(18)同=(19)=安東=(20)=釜山~(21)~下関=宮島=(22)=東京	東京鉄道局主催の団体旅行の記念誌。参加者254名。荒山(本文注14①参照)。
89	福德生命保険株式会 社編 (1931)『教育 家の目に映じたる欧 米南洋鮮支事情 昭 和五年度』大阪:福 德生命保険株式会 社 278頁	31 (4:11)	(1930/5/25) 下関~(26)~釜山=(27)=京城=(28)=平壤(29)同=安東~新義州=安東=(30)=撫順=奉天(31)同=(6/1)=哈爾濱(2)同=(3)=長春=大連(4_5)同=旅順...大連(6)同~(7)~天津[中略] (11) 天津~(12)~(13)~大連(14)同~(15)~青島[中略] (23) 上海~(24)~長崎	福德生命保険会社の教育家派遣事業の第4回目。欧米・南洋・鮮満支に小学校校長らを派遣。鮮満支には13名。

90	松本亀次郎 (1931) 『中華五十日遊記』 東京:東亜書房 126 頁	52 (3:8)	(1930/4/3) 東京 = (4) = 神戸 ~ (5) ~ 長崎 ~ (6) ~ 上海 [中略] (5/11) 北平 = (12) = 奉天 (13) 同 = 撫順 = 奉天 (14_15) 同 = (16) = 哈爾濱 (17_18) 同 = 奉天 = (19) = 安東 = 京城 (20) 同 = (21) = 釜山 ~ 下関 = [中略] (24) = 東京	著者は留学生の日本語教育を担う東亜高等予備学校の設立者。4名で中国の教養子や教育施設を訪ねる。
91	由谷義浩 (1931) 『衆議院議員満鮮視察団報告書』(謄写版) 44頁	21 (0:11)	(1931/10/16) 東京 = (17) = 神戸 ~ (18) ~ (19) ~ (20) ~ 大連 (21) 同...旅順...大連 (22) 同 = (23) = 奉天 = 撫順 = 奉天 = (24) = 吉林 = (25) = 哈爾濱 (26) 同 = (27) = 長春 (28) 同 = 奉天 (29) 同 = (30) = 大連 ~ (31) ~ 青島 [中略] (11/4) 上海 ~ (5) ~ 長崎	昭和6年の衆議院議員満鮮視察団の団長として13名で視察旅行。郷里の新聞に掲載したものをまとめた。
92	天沼俊一 (1932) 『続朝鮮紀行—金山寺・神勒寺・桐華寺—』(出版者不明) 118頁	21 (21:0)	(1935/8/30) 京都 = 下関 ~ (31) ~ 釜山 (9/1) 同 = 大田 (2) 同 = 金堤...院坪里 * 金山寺 (3_4) 同 * 院坪里 (5) 同...金堤 = 京城 (6) 同 = 水原 = 京城 (7_9) 同...驪州 * 神勒寺 (10_12) 同 * 驪州...京城 = (13) = 大邱 (14) 同 * 桐華寺 (15_17) 同 * 大邱 (18) 同 = 釜山 ~ (19) ~ 下関 = 京都	著者は京都帝大教授。仏教寺院調査の旅。#70に続き、『東洋美術』に寄稿した紀行文を集成。
93	岡田潤一郎編 (1932)『僕等の見たる満洲南支』東京府立第一商業学校校友会	30 (5:12)	(1931/5/22) 東京 = (23) = 下関 ~ (24) ~ 釜山...蔚山...慶州 (25) 同 = (26) = 内金剛 = 京城 (27) 同 = (28) = 平壤 = 安東 (29) 同 = (30) = 撫順 = 奉天 (31) 同 = (6/1) = 哈爾濱 (2) 同 = (3) = 長春 = 湯崗子 (4) 同 = 大石橋 = 大連 (5) 同? 旅順? 大連 (6_8) 同 ~ (9) ~ 青島 [中略] (16) 上海 ~ (17) ~ 長崎 ~ (18) ~ 神戸 = 京都 (19) 同 = (20) = 東京	大正14年から始まった東京府立第一商業学校の第7回中華民国視察団(80名)の記録。
94	鹿山鶯村 (1932) 『明け行く満蒙の透視』東京:岡村書店 414頁	43 (2:39)	(1931/12/1) 東京 = (2) = 神戸 ~ (3) ~ 門司 ~ (4) ~ (5) ~ 大連 (6_7) 同...旅順...大連 (8) 同 = 奉天 (9_11) 同 = 四平街 (12) 同 = 鄭家屯 = 洮南 (13_14) 同 = 江橋 = 大興 = 齊齊哈爾 (15_18) 同 = 哈爾濱 (19_21) 同 = 長春 (22_23) 同 = 吉林 (24) 同 = (25) = 奉天 = 遼陽 = 湯崗子 (26_27) 同 = 營口 = 撫順 (28) 同 = 奉天 (29_1932/1/2) 同 = 大連 (3_8) 同 = 奉天 (9_10) 同 = 本溪湖 = 安東 (11) 同...新義州...安東 (12) 同 =	著者は詩人(作詞家)。明治会慰問使として5名で日本軍を慰問。
95	栗原長二 (1932) 『鮮満事情』尾鷲:自家出版	21 (8:10)	(1931/9/29) 津 = (30) = 下関 ~ 釜山 (10/1) 同...蔚山 = 慶州 (2) 同 = 大邱 (3) 同 = 京城 = (4) = 内金剛 = (5) = 京城 (6) 同 = 仁川 = 京城 = (7) = 平壤 = 安東 (8) 同 = 奉天 = (9) = 長春 = 奉天 (10_11) 同 = 撫順 = 湯崗子 (12) 同 = 大連 (13) 同 = 旅順 (14) 同...大連 (15_16) 同 ~ (17) ~ (18) ~ (19) ~ 神戸	著者は三重県南部の教育関係者とみられ、「鮮満教育視察」(人数不明)に参加。
96	篠原義政 (1932) 『満洲縦横記』東京:国政研究会 201頁	21 (2:15)	(1932/10/1) 東京 = (2) = 下関 ~ (3) ~ 釜山 = (4) = 奉天 (5_6) 同? 撫順? 奉天 (7) 同 = 公主嶺 = 新京 (8_10) 同 > 哈爾濱 (11_12) 同 > 齊齊哈爾 (13_14) 同 = 新京 (15) 同 = 營口 = (16) = 大連 (17) 同...旅順...大連 (18) 同 ~ (19) ~ (20) ~ 下関 ~ (21) ~ 神戸	政友会の衆議院議員ら5名の旅。
97	神風義塾編 (1932) 『鮮満旅行記念』神風(号外) 88頁	21 (9:8)	(1931/9/20) 加佐登 = (21) = 萩 = 下関 ~ (22) ~ 釜山 = (23) = 金堤 = 群山 (24) 同 = (25) = 水原 = 京城 (26) 同 = 洗浦 (27) 同 = 平康 (28) 同 = 鉄原 = 内金剛 (29) 同 = 京城 = (30) = 平壤 = 新義州 * 安東 = (10/1) = 撫順 = 奉天 (2) 同 = 公主嶺 (3) 同 = 湯崗子 (4) 同 = 熊岳城 (5) 同 = 旅順...大連 (6_7) 同 ~ (8) ~ (9) ~ (10) ~ 神戸 = 加佐登	農政家・山崎延吉の私塾・神風義塾(三重県鈴鹿)の教員・生徒17名による修学旅行。
98	末松借一郎 (1932) 『満蒙間島北鮮旅行記』東京:市町村雑誌社 22頁	55 (15:34)	(1932/3/24) 東京 = (25) = 門司 ~ (26) ~ (27) ~ 大連? 旅順? 大連 (28) 同 = 奉天 (29_4/3) 同 = 遼陽 = 奉天 (4_10) 同 = 長春 (11_14) 同 = 吉林 = 長春 (15) 同 = 哈爾濱 (16_17) 同 = 齊齊哈爾 (18) 同 = (19) = 洮南 = 四平街 = 奉天 (20_21) 同 = 撫順 = 奉天 (22) 同 = 錦州 (23) 同 = 奉天 (24_25) 同 = 安東 (26) 同 = 京城 (27_28) 同 = (29) = 興南 = (30) = 羅南 (5/1_2) 同...雄基 = 慶源...鍾城 (3) 同 = 上三峰 = 延吉...龍井 (4_5) 同 = 図們 = 会寧 = (6) = 元山...外金剛 (7_8) 同 *...内金剛 (9) 同 = 京城 (10_11) 同 = 釜山 ~ (12) ~ 下関 [中略] (17) = 東京	著者は衆議院議員(本紀行の時期は落選)。かつて清国の顧問として奉天に滞在した経験があり、「満洲国」の建国を視察旅行。
99	津村重舎 (1932) 『満洲国を旅して』東京:津村順天堂 187頁	23 (2:13)	(1932/10/3) 東京 = (4) = 下関 ~ (5) ~ 釜山 = 京城 (6) 同 = (7) = 奉天 = 新京 (8_9) 同 = 吉林 (10) 同 = 新京 (11) 同 > 齊齊哈爾 > 哈爾濱 (12_13) 同 > 新京 = 奉天 (14_15) 同 = 大連 (16_19) 同 ~ (20) ~ 青島 [中略] (23) 上海 ~ (24) ~ 長崎 [中略] (26) = 東京	貴族院議員ら13名による「朝鮮、満洲国及上海方面視察旅行団」に参加。

100	東京外国語学校支那語同学会編 (1932)『会誌 満蒙慰問使報告号』東京外国語学校支那語同学会 39頁	17 (0:?)	(1931/12/25)東京=(26)=神戸～(27)～(28)～(29)～大連=(30)=奉天 ※南班 (31)同=四平街=長春(1932/1/1)同=吉林=長春=(2)=奉天=(3)=錦州(4)同? 溝帮子(5)同=奉天 ※北班 (31)同=四平街(1932/1/1)同=鄭家屯=洮南(2)同=(3)=齊齊哈爾(4_5)同=哈爾濱=(6)=長春 [以下、大連で合流し、1/10に東京]	学生4名による満洲事変下の日本軍慰問の旅。南北2班に分かれ、南班は錦州占領に同行。
101	福德生命保険株式会社編 (1932)『教育家の目に映じたる欧米南洋鮮支事情 昭和六年度』大阪:福德生命保険株式会社 410頁	31 (4:11)	(1931/5/14)下関～(15)釜山・蔚山=慶州(16)同=大邱=京城(17)同=(18)=平壤=安東(19)同=(20)=撫順=奉天(21)同=(22)=哈爾濱(23)同=(24)=長春=公主嶺=湯崗子(25)同=金州=大連(26_27)同=旅順=大連(28)同～(29)～天津[中略](6/12)上海～(13)～長崎	福德生命保険会社の教育家派遣事業の第5回目。欧米・南洋・鮮支に小学校校長らを派遣。鮮支には15名。
102	東京府教育研究会(c1932)『鮮満地方視察報告』(刊行者不明) 53頁	16 (3:10)	(1932/5/22)東京=(23)=下関～(24)～釜山=京城(25)同=(26)=平壤=安東(27)同=奉天(28)同=撫順=奉天(29)同=(30)=長春(31)同=公主嶺=湯崗子(6/1)同=大連(2)同=旅順・大連(3_4)同～(5)～(6)～下関	小学校の校長ら25名の視察旅行。旅行の年次は記されていないが内容より推測。刊行年の記載はない。
103	石倉多異花 (1933)『新天地を行く一満鮮視察旅行記』米沢新聞社 143頁	21 (3:11)	(1933/3/26)米沢=[中略](28)=下関～(29)～釜山=京城(30)同=平壤(31)同=安東(4/1)同=(2)=新京(3)同=哈爾濱(4_5)同=奉天(6)同=撫順=奉天(7)同=鞍山=湯崗子(8)同=大連(9)同・旅順・大連(10)同～(11)～(12)～門司[中略](15)=米沢	著者は米沢新聞主幹。2人旅。日本軍の慰問と満洲視察のため社より派遣し、紙上に連載した。
104	橋本孝市 (1933)『満鮮への旅』御殿場:自家出版 72頁	15 (3:9)	(1933/10/6)御殿場=大阪(7)同=下関～(8)～釜山=(9)=京城(10)同=奉天=(11)=新京=哈爾濱(12)同>齊齊哈爾>哈爾濱(13)同=新京=(14)=奉天(15)同=撫順=大連(16)同・旅順=大連(17_18)同～(19)～(20)～門司	著者の目的や立場、旅行人数は明示されていないが、満洲への農業移民に関心か。
105	福德生命保険株式会社編 (1933)『文部省推選派遣教育家の見たる海外事情 昭和八年度』大阪:福德生命保険株式会社 478頁	28 (6:15)	(1932/6/27)～釜山・蔚山? 慶州=京城? 仁川? 京城=平壤? 新義州(7/2)安東? 撫順? 奉天? 齊齊哈爾? 哈爾濱? 長春? 吉林? 公主嶺? 鞍山? 湯崗子? 旅順? (16)大連～(17)～青島[中略]上海～(24)～長崎	福德生命保険会社の教育家派遣事業の第6回目。欧米・南洋・鮮満中華民国に派遣。鮮満中華民国には14名。一部日程が曖昧。
106	村 秀三編 (1933)『富山県より望む対岸 満鮮の概観』富山:富山印刷社 140頁	12 (5:3)	(1933/1/2)伏木～(3)～(4)～浦潮(5)同～(6)～雄基・羅津・雄基(7)同=訓戎・珥春(8)同・訓戎=南陽・延吉(9)同・龍井=上三峯=清津(10)同～(11)～(12)～(13)～伏木	編者は富山タイムス記者。北陸汽船会社社長石原正太郎の視察に随行。
107	渡辺房吉 (1933)『満洲から朝鮮へ』横浜:自家出版 184頁	26 (6:11)	(1932/9/19)東京=[中略](21)神戸～(22)～門司～(23)～(24)～大連(25)同・旅順? 大連(26_27)同=新京(28_30)同=奉天(10/1_2)同? 撫順? 奉天(3)同=安東(4)同=平壤(5)同=京城(6_8)同? 仁川? 京城=(9)=釜山～(10)～下関(11)[中略](14)=東京	全国聯合小学校教員会および東京日々・大阪毎日新聞社が共催した小学生の交流使節団20名に随行。医事公論と医文学に掲載。
108	東京外国語学校支那語部編 (c1933)『昭和七年度東京外国語学校支那旅行報告』(謄写版) 223頁	49 (4:24)	(1932/7/14)東京=(15)=下関～(16)～釜山=京城(17)同=(18)=平壤(19)同=安東(20)同=奉天(21_22)同=撫順=奉天(23)同=四平街=鄭家屯(24)同=(25)=洮南(26)同=(27)=齊齊哈爾(28_29)同=哈爾濱(30_31)同=(8/1)=長春(2)同=吉林(3)同=長春(4)同=公主嶺=奉天(5)同=新民=錦州(6)同=溝帮子=營口(7)同=熊岳城(8)同=大連(9)同・旅順=大連(10_11)同～(12)～天津[中略](31)青島[解散]	学生11名・教員1名の旅。なお昭和六年度の「支那旅行」報告書は確認できない。
109	加藤角太郎 (1934)『満鮮視察日記』山梨県北都留郡甲斐絹同業組合 38頁	17 (3:9)	(1933/7/12)上野原=東京=神戸(13)同～(14)～門司～(15)～(16)～大連(17_20)同・旅順・大連(21_23)同=奉天(24)同=京城(25_26)同=釜山～(27)～下関=(28)=東京=上野原	満洲建国祝賀博覧会(大連)に絹組合より出品、5名で参加。
110	全国社会教育主事協会編 (1934)『社会教育者は満鮮を斯く見る』東京:社会教育会 216頁	22 (3:16)	(1933/9/22)下関～(23)～釜山=京城(24)同=(25)=平壤=安東(26)同=奉天(27)同=撫順=奉天(28_29)同=新京(30)同=吉林=新京(10/1)同=哈爾濱(2)同=海倫(3)同=齊齊哈爾(4)同=哈爾濱(5)同=新京(6_7)同=公主嶺=(8)=大連=旅順=大連(9_10)同～(11)～(12)～(13)～神戸=東京	教育主事ら22名による慰問と視察の旅。

- | | | | | |
|-----|---|---------------|---|--|
| 111 | 中山正善 (1934)
『上海から北平へ』
天理:天理教道友社
427頁 | 45
(0:3) | (1930/3/2)天理=[中略](4)長崎～(5)～上海[中略](4/9)北平＝
(10)＝奉天＝大連(11_12)同～(13)～(14)～門司～(15)～神戸
＝天理 | 著者は天理教真柱。
布教に関わる7名の
旅。天理教関連の雑
誌に掲載。著者は
1927年に『鮮満支素
見』[#61]を出版。 |
| 112 | 西村真琴編著
(1934)『新しく観た
満鮮』東京:創元社
154頁 | 16
(3:10) | (1933/8/4)京都＝下関～(5)～釜山＝京城(6)同＝(7)＝平壤＝安
東＝(8)＝撫順＝奉天(9)同＝公主嶺＝新京(10)同＝吉林＝新京
(11)同＝哈爾濱(12)同＝新京＝(13)＝遼陽＝鞍山＝湯崗子＝
(14)＝金州＝旅順…大連(15_16)同～(17)～(18)～(19)～神戸 | 編者は大阪毎日新聞
社顧問。編者を団長と
する大毎旅行会の満
洲国視察団(183名)の
旅行記「満鮮視察記」
(岡村勇)を収録。 |
| 113 | 依田 泰 (1934)
『満鮮三千里』岩村
田(長野県):中信毎
日新聞社 279頁 | 36
(9/21) | (1933/8/20)小諸=[中略](22)＝神戸～(23)～門司～(24)～(25)
～大連(26_27)同＝旅順？大連(28)同＝熊岳城(29)同＝撫順？奉
天(30_9/1)同＝山海関(2)同＝錦州(3)同＝北票(4)同＝奉天(5)
同＝(6)＝齊齊哈爾(7)同＝哈爾濱(8_9)同＝新京(10_12)同＝
吉林＝新京(13)同＝(14)＝安東＝平壤(15)同＝京城(16)同＝
(17)＝会寧＝鍾城(18)同＝雄基…清津＝(19)＝内金剛(20)同＝
京城＝(21)＝大邱…慶州＝大邱(22)同＝釜山～(23)～博多[中
略](9/24)＝東京 | 著者は小諸の校長
か。中信毎日新聞に
連載。 |
| 114 | 四ツ橋銀太郎
(1934)『満鮮を旅
する』富山:自家出
版 190頁 | 19
(8:9) | (1934/5/1)伏木～(2)～(3)～雄基(4)同…羅津…雄基(5)同＝慶
源…琿春…訓戒＝図們＝(6)＝新京(7)同＝(8)＝哈爾濱(9)同＝
新京＝奉天(10)同＝大連[この間記載が曖昧]＝平壤＝京城(14_
17)同＝釜山～(18)～下関[中略](19)＝富山 | 富山日報記者。対岸
貿易拓殖振興会の委
嘱で視察。 |
| 115 | 石川磐彦 (1935)
『鮮満視察旅行』大
阪:自家出版 50頁 | 21
(7:11) | (1935/5/9)大阪＝下関～(10)～釜山＝京城(11)同＝(12)＝内金
剛(13)同＝外金剛(14)同＝元山＝(15)＝朱乙＝清津(16)同…羅
津…雄基＝(17)＝吉林＝新京(18)新京＝哈爾濱(19_20)同＝新
京(21)同＝(22)＝撫順＝奉天(23_24)同＝鞍山＝湯崗子＝(25)
＝大連…旅順？大連(26_27)同～(28)～(29)～門司 | JTB主催の鮮満視察
団(41名)に参加。日
程の記載は不十分だ
が同行程の白須皓
『我が観たる鮮満』より
[#117]補った。 |
| 116 | 石渡繁胤 (1935)
『満洲漫談』東京:
明文堂 294頁 | 16
(8:3) | (1923/10/12)東京=[中略](14)＝下関～(15)～釜山＝京城(16_
18)同＝平壤(19)同＝新義州…義州(20)同…新義州…安東(21_
22)同＝(23)＝水原＝大邱(24)同＝釜山～(25)～下関[中略](27)
＝東京 | 養蚕学者の随筆・旅
行記集。著者は後に
東京農大教授。ここ
では旅程が判明する「朝
鮮旅行記」(大正12
年)、「満鮮旅日記」
(大正14年)、「朝鮮及
満洲旅日記」(昭和元
年)の行程を示す。い
ずれも養蚕業に関わ
る調査や学会参加の
旅。 |
| | | 28
(13:13) | (1925/9/2)東京＝(3)＝下関～(4)～釜山＝大邱(5)同…慶州…
大邱(6)同＝水原＝京城(7_8)同＝(9)＝新義州…安東…新義州
(10)同…義州(11_12)同～九連城～義州(13)同…朔州(14)同…
亀城(15)同…定州＝宣川＝新義州(16)同？安東？五龍背(17_
18)同＝奉天＝公主嶺(19)同＝長春＝(20)＝奉天＝熊岳城(21)同
＝万家嶺＝大連(22)同…旅順(23)同…大連(24)同＝營城子＝大
連(25_26)同～(27)～(28)～下関＝(29)＝京都＝東京 | |
| | | 32
(17:13) | (1926/8/22)東京＝(23)＝下関～釜山＝(24)＝水原＝京城＝(25)
＝新義州＝(26)＝奉天＝旅順(27_28)同＝大連(29)同＝旅順＝大
連(30)同＝金州(31)同＝普蘭店…貔子窩(9/1_2)同？普蘭店？
大連(3)同？旅順？大連(4)同＝万家嶺＝熊岳城(5)同＝湯崗子(6)
同＝鞍山＝遼陽＝湯崗子(7)同＝奉天＝(8)＝新義州(9)同？義
州？新義州(10)同？安東？新義州(11)同＝平壤＝(12)＝京城
(13)同＝(14)＝元山～外金剛…海金剛…外金剛(15_16)同～元
山＝(17)＝鉄原＝水原＝大田＝木浦(18)同＝羅州…光州…裡
里…全州(19)同？裡里＝大田(20)同＝大邱＝釜山(21)同～下関
＝(22)＝東京 | |
| 117 | 白須 皓 (1935)
『我が観たる鮮満』
瑞穂(山梨県):林風
社 44頁 | 18
(7:11) | (1935/5/10)～釜山＝京城(11)同＝(12)＝内金剛(13)同＝外金剛
(14)同＝元山＝(15)＝朱乙＝清津(16)同…羅津…雄基＝(17)＝
吉林＝新京(18)新京＝哈爾濱(19_20)同＝新京(21)同＝(22)＝
撫順＝奉天(23_24)同＝鞍山＝湯崗子＝(25)＝大連…旅順？大
連(26_27)同～ | JTB主催の鮮満視察
団(41名)に参加。石
川磐彦『鮮満視察旅』
[#115]と同行程。 |
| 118 | 杉/原英太郎
(1935)『満。鮮。北
支。みたま』東京:
自家出版 61頁 | 29
(7:20) | (1935/5/6)東京＝(7)＝下関～釜山[※1](11)京城？三泉温泉
(12)同？平壤(13)同＝奉天(14[※2]16)同＝(17)＝新京(18)[※
3](22)哈爾濱＝(23)＝奉天＝(24)＝天津[中略](26)北平＝(27)
＝山海関＝奉天＝湯崗子(28)同＝大連(29_31)同…旅順…大連
(6/1)同～(2)～(3)～門司
※1大邱を経由し、京城に2日滞在、仁川往復。※2この間撫順を鉄道
で往復。※3新京より吉林を往復して哈爾濱に移動。 | 著者は東京市会議
員。東京石鹼製造同
業組合の依頼により視
察旅行。 |

119	杉山佐七 (1935) 『観て来た満鮮』東京:日本商業教育会 229頁	32 (12:21)	※(1)東京=(2)=下関～釜山(3)同…慶州=大邱=京城(4_6)同=(7)=平壤=鎮南浦=平壤(8)同=安東*新義州*安東=(9)=奉天(10)同=撫順=奉天(11)同=(12)=大連(13)同…旅順…大連(14)同=熊岳城=鞍山(15)同=奉天(16)同=錦州=山海関(17)同=奉天(18)同=(19)=齊齊哈爾(20)同=海倫(21)同=哈爾濱(22_24)同=新京(25)同=吉林=新京(26)同=公主嶺=新京(27)同=敦化(28)同=図們=雄基(29)同…清津(30)同=元山(31)同=外金剛=(32)=京城=釜山～(33)～下関	※年月日の記載がないが1933年または1934年か。第2日目に二百十日(9/1)の記述がある。著者は東京市立工業学校長を務めた。
120	園田 銈 (1935) 『満鮮旅行記』東京:自家出版 23頁	20 (2:10)	(1935/5/21)東京=[中略](22)神戸～(23)～門司～(24)～(25)～大連(26)同?金州?大連(27)同?旅順?大連(28_30)大連=奉天(31)同=湯崗子(6/1_2)同=奉天(3)同=(4)=京城(5)同=釜山～(6)～下関[中略](9)=東京	伝染病研究者小島三郎の学会参加に同行。4名の旅。
121	電気学会編 (1935) 『携手同行一満洲電気大会参加記念出版一』東京:電気学会 (頁番号なし)	22 (4:14)	(1935/8/16)神戸～(17)～門司～(18)～(19)～大連(20_21)同…旅順…大連=(22)=鞍山=奉天(23_24)同=撫順=(25)=新京(26_27)同=哈爾濱(28_29)同=北安(30)同=齊々哈爾(31)同=(9/1)=奉天=安東(2)同=平壤(3)同=京城(4)同=(5)=釜山～(6)～下関 ※第二班(8/27)新京=吉林(28)同=図們(29)同=雄基(30)同…羅津…清津…朱乙温泉(31)同=(9/1)=元山=外金剛(2)同*内金剛(3)同=京城	満洲電気大会(満洲電気協会・電気学会満洲支部主催)の記念誌。大連から新京までの123名による見学旅行を主とする「学会」後、2班に分かれて朝鮮を旅行。参加者の手記に#122, #131, #132がある。
122	林 安繁 (1935) 『満鮮遊記』本山(兵庫県):自家出版 63頁	22 (4:14)	(1935/8/16)神戸～(17)～門司～(18)～(19)～大連(20_21)同…旅順…大連=(22)=鞍山=奉天(23_24)同=撫順=(25)=新京(26_27)同=哈爾濱(28_29)同=北安(30)同=齊々哈爾(31)同=(9/1)=奉天=安東(2)同=平壤(3)同=京城(4)同=(5)=釜山～(6)～下関=神戸	満洲電気大会に123名の団体を組んで参加。#121によれば著者は宇治川電気株式会社社長。
123	福德生命保険株式会社編 (1935)『文部省推選派遣教育家の見たる鮮満事情 昭和十年版』大阪:福德生命保険株式会社 316頁	32 (11:16)	(1934/5/16)大阪=(17)=下関～釜山=(18)=京城(19)同=仁川=京城=(20)=内金剛…外金剛(21)同=元山=(22)=清津…羅津…雄基(23)同=南陽=(24)=吉林=新京(25)同=(26)=哈爾濱(27)同=齊齊哈爾(28)同=(29)=洮南=(30)=奉天(31_6/1)同=撫順=奉天=鞍山=湯崗子(2)同=(3)=大連(4)同=旅順=大連(5)同～(6)～天津[中略](10)天津=山海関=(11)=奉天(12)同=平壤(13)同=(14)=慶州…釜山(15)同～下関=(16)=大阪	福德生命保険会社の教育家派遣事業の第8回目。今回より欧米・南洋への派遣を始め、鮮満のみとした。25名派遣。
124	藤山雷太 (1935) 『満鮮遊記』東京:千倉書房 172頁	37 (11:13)	(1934/10/3)東京=[中略](8)神戸～(9)～下関～(10)～(11)～大連(12_14)大連?旅順?大連(15)同=新京(16_20)同=奉天(21_23)同=平壤(24_26)同=京城(27_28)同=仁川=京城(29_31)同=釜山(11/1_2)同～(3)～下関[中略](8)=東京	著者は財閥・藤山コンツェルンの中心人物。既出の紀行文に『鮮支遊記』[#81]がある。大日本製糖を経営し、平壤に朝鮮製糖を創立した。4名の旅の帰途、その工場を視察。
125	水谷重之助 (1935) 『満鮮の旅』津:自家出版 63頁	18 (10:4)	(1934/9/21)津=神戸(22)同～(23)～門司～(24)～(25)～大連(26)同=旅順=大連=(27)=奉天(28)同=撫順=奉天=(29)=齊齊哈爾(30)同=泰安=齊齊哈爾(10/1)同=哈爾濱(2)同=新京(3)同=(4)=安東=平壤(5)同=京城(6)同=(7)=釜山～下関=(8)=津	著者は三重県社会教育主事。三重県各郡市代表者20名による軍人慰問の旅。
126	山形県教育会満鮮視察団編 (1935)『満鮮の旅(視察報告)』上山:山形県教育会満鮮視察団 67頁	18 (7:9)	(1935/8/10)山形=(11)=敦賀～(12)～(13)～清津…羅南…清津～羅津…雄基(14)同=(15)=吉林=新京(16)同=哈爾濱(17)同=公主嶺=(18)=大連(19)同…旅順…大連=(20)=奉天(21)同=撫順=奉天=(22)=平壤=(23)=京城(24)同=平康=内金剛(25)同=京城=(26)=慶州=蔚山…釜山～(27)～下関	尋常小学校の訓導ら8名の視察旅行。
127	大房 暁 (1936) 『鮮満紀行』藤枝:岡文社 94頁	21 (3:14)	(1935/9/21)静岡=下関～(22)～釜山=京城(23)同=(24)=平壤=(25)=奉天=撫順=奉天(26)同=新京(27_28)同=哈爾濱(29_10/1)哈爾濱=齊齊哈爾(2)同=(3)=奉天=山海関(4)同=奉天=遼陽(5)同=首山=鞍山=大連(6)同=旅順=大連(7_8)同～(9)～(10)～下関=(11)=山田=静岡	静岡県教育会の委嘱により、学事視察と軍人慰問。

- 128 東海商工会議所聯合
会満鮮視察団編
(1936)『満鮮 旅の
思ひ出』名古屋商
工会議所 173頁 20
(7:11) (1934/6/1)名古屋＝敦賀～(2)～(3)～清津？羅津？雄基(4)同＝
南陽？図們＝延吉(5)同＝敦化(6)同＝吉林＝新京(7)同＝(8)＝哈
爾賓(9)同＝新京(10)同＝公主嶺＝(11)＝大連(12)同？旅順？大
連＝(13)＝鞍山＝撫順＝奉天(14)同＝(15)＝平壤＝(16)＝京城
(17)同＝内金剛(18)同＝京城＝(19)＝釜山～下関＝(20)＝名古屋
- 129 東京外語東亜同学会
(1936)『昭和十一
年度鮮満支旅行報告
書』東京外語東亜
同学会(謄写版)
104頁 42
(4:13) (1936/7/11)東京＝(12)＝下関～(13)～釜山＝京城(14)同＝(15)
＝清津…羅津…雄基(16)同＝図們(17)同＝吉林(18)同＝新京
(19_21)同＝奉天(22_23)同＝撫順？(24)？＝(25)＝大連(26_28)
同～(29)～塘沽[中略](8/17)塘沽～(18)～(19)～(20)～(21)
～神戸＝東京
- 130 中根環堂 (1936)
『鮮満見聞記』東
京:中央仏教社 123
頁 45
(43:4) (1935/5/16)～釜山(17)同＝京城(18_19)同＝元山(20)同＝咸興
(21)同＝吉州(22)同＝城津(23)同＝清津…羅津(24)同＝清津(25
_28)同＝会寧(29)同＝(30)＝京城＝(31)＝安東(36/1_2)同…新
義州(3_4)同＝新京(5)同＝奉天＝(6)＝平壤＝鎮南浦(7_8)同＝
平壤(9_10)同＝熙川(11)同＝京城(12)同＝平沢(13)同＝天安
(14)同＝京城(15)同＝鉄原(16)同＝京城(17)同＝光州(18)同＝
木浦(19_20)同＝群山(21)同＝大田(22_24)同＝大邱(25)同？
慶州(26)同？大邱(27)同＝鎮海(28)同＝釜山(29)同～
- 131 林 邦二 (1936)
『満鮮漫歩断片』
(出版者不明) 50頁 24
(8:11) (1935/8/15)酒田？(16)神戸～(17)～門司～(18)～(19)～大連
(20_21)同…旅順…大連＝(22)＝鞍山＝奉天(23_24)同＝撫順
＝(25)＝新京(26※29)新京＞吉林＞図們…南陽(30)同＝雄基…
朱乙温泉(31)同＝(9/1)＝元山＝外金剛(2)同＊内金剛(3)同＝京
城(4)同＝(5)＝釜山～(6)～下関＝(7)＝酒田
※この間哈爾賓を往復。
- 132 広瀬為久 (1936)
『普選より非常時ま
で』自家出版 158
頁 27
(5:15) (1935/8/15)東京＝(16)＝神戸～(17)～門司～(18)～(19)～大連
(20_21)同…旅順…大連＝(22)＝鞍山＝奉天(23_24)同＝撫順
＝(25)＝新京(26_27)同＝哈爾賓(28_30)同＞齐齐哈尔(31)同
＞哈爾賓＞新京＝奉天(9/1)同＝安東(2)同＝平壤＝(3)＝京城(4)
同＝仁川＝京城(5)＝大邱…慶州？蔚山？釜山(6)同～下関[中
略](10)＝東京
- 133 福德生命保険株式会
社編 (1936)『文部
省推選派遣教育家の
見たる満鮮事情 昭
和十一年版』大阪:
福德生命保険株式会
社 226頁 22
(9:15) (1935/5/3)下関～釜山＝(4)＝京城(5)同＝仁川＝京城＝(6)＝清
津…羅津？雄基(7)同＝南陽＝図們＝(8)＝吉林＝新京(9_10)同
＝哈爾賓(11_12)同＝齐齐哈尔(13)同＝洮南＝(14)＝奉天(15
_16)同＝撫順＝湯崗子(17)同＝鞍山＝營口(18)同＝大石橋＝大連
(19)同…旅順？大連(20)同＝(21)＝奉天＝安東＝平壤(22)同＝
(23)＝慶州…釜山(24)同～下関
- 134 藤原千代 (1936)
『満鮮旅行の思出』
東京:武蔵野書院
125頁 54
(10:25) (1935/7/19)？＝大阪＝(20)＝下関(21)同～(22)～釜山(23_24)
同＝京城(25_26)同＝仁川(27)同＝平壤(28_29)同＝安東(30_31)
同＝(8/1)＝奉天(2_3)同＝撫順(4_5)同＝新京(6_8)同＝
吉林(9)同＝(10)＝哈爾賓(11_13)同＝齐齐哈尔(14)同＞新京
(15)同＝大連(16_17)同？旅順(18)同？大連(19)同＝奉天(20
_21)同＝錦州(22)同＝興城＝(23)＝北平[中略](29)天津＝塘沽～
(30)～大連(31)同～(9/1)～(2)～門司[中略](10)＝東京
- 135 本多辰次郎 (1936)
『北支満鮮旅行記
第二輯』東京:日満
仏教協会本部 92頁 34
(10:9) (1933/9/24)東京＝(25)＝京都＝神戸～(26)～(27)～(28)～(29)
～塘沽[中略](10/5)北平＝塘沽～(6)～大連(7_8)同…旅順＝大
連＝(9)＝撫順(10_11)同＝奉天＝新京(12_14)同＝吉林＝奉天
＝(15)＝平壤(16)同＝京城(17_19)同＝鉄原(20)同＝内金剛
(21)同＊外金剛(22_23)同＝京城(24)同＝大邱…慶州…釜山～
(25)～下関＝[中略](27)＝東京
- 136 満支視察団記編輯部
編 (1936)『大阪よ
り満鮮北支へ』大
阪:満支視察団記編
輯部 212頁 27
(2:17) (1936/9/10)大阪＝下関～(11)～釜山＝京城(12)同＝鳳凰城＝奉
天(13_14)同＝新京(15_16)同＝吉林(17)同＝新京(18)同＝哈
爾賓(19_20)同＝齐齐哈尔(21)同＝(22)＝奉天＝撫順＝奉天
(23)同＝錦州(24)同＝胡蘆島＝山海関＝(25)＝天津[中略](29)
北平＝(30)＝鞍山＝大連(10/1_2)同…旅順…大連(3)同～(4)
～(5)～門司～(6)～神戸
※空路を利用した3つの別働隊あり。(9/18)奉天＞承德,(9/19)哈爾
賓＞佳木斯＞哈爾賓,(9/20)哈爾賓＞黒河＞齐齐哈尔
- 東海商工会議所主催
の視察団43名による
紀行文集。
- 東京外語支那語部鮮
満支旅行団6名(学生
5名,教員1名)の報
告書。
- 著者は曹洞宗僧侶。
布教講演の旅。
- 著者名は酒田新聞連
載時のペンネーム。満
洲電気大会に123名
の団体を組んで参
加。旅程は明確に記
されていないが『携手
同行』[#121]より補
う。一部別行動。
- 満洲電気大会(#[121
参照])に123名の団
体を組んで参加した「満
鮮旅行記」(62頁)を
巻末に収録。一部別
行動。
- 福德生命保険会社の
教育家派遣事業の第
9回目。27名を派遣。
参加者のうち伊藤俊
蔵は別に『満鮮の旅』
に出版。
- 著者は日本女子大学
校留学生係。外務省
文化事業部視察員と
して旅行。
- 著者は宗教史研究
者。夫婦2人旅。本文
注8②参照。
- 大阪商工会議所の56
名の視察団。

137	有田芳太郎 (1937)『鮮満北支の旅』東京: 自家出版 73頁	31 (9:15)	(1936/4/25) 東京 = (26) = 下関 ~ (27) ~ 釜山 = 京城 (28) 同 = 仁川 = 京城 (29) 同 = (30) = 安東 = 奉天 (5/1_2) 同 = 撫順... 奉天 = (3) = 吉林 = 新京 (4_5) 同 = 哈爾賓 (6_7) 同 = 公主嶺 = (8) = 鞍山 = 湯崗子 (9) 同 = 大連 (10_12) 同 = 旅順 = 大連 (13) 同 = (14) = 北平 [中略] (16) 天津 = (17) = 奉天 = (18) = 京城 (19) 同 = (20) = 外金剛 * 内金剛 (21) 同 = 京城 (22) 同 = (23) = 釜山 ~ 下関 [中略] (25) = 東京	帝国鉄道協会の総会 (大連) と視察旅行団 (136名) に参加。5/13 より3名で別行動。
138	岐阜県社会教育課編 (1937)『鮮満視察輯録』岐阜県社会教育課 125頁	17 (3:9)	(1937/9/4) 岐阜 = (5) [中略] = 下関 ~ (6) ~ 釜山 = 京城 (7) 同 = (8) = 平壤 = (9) = 撫順 = 奉天 (10) 同 = (11) = 公主嶺 = 新京 (12) 同 = 哈爾賓 (13_14) 同 = (15) = 大連 (16) 同 ? 旅順 ? 大連 (17) 同 ~ (18) ~ (19) ~ 門司 ~ (20) ~ 神戸 = 岐阜	大正12年以来、岐阜県聯合青年団が隔年ごとに行う視察旅行。県内各都市より代表青年ら21名が参加。
139	群馬県編 (1937)『鮮満産業視察県産品見本展示会報告書』群馬県 74頁	22 (2:15)	(1937/5/21) 前橋 = 東京 = (22) = 下関 ~ (23) ~ 釜山 = 京城 (24) 同 = (25) = 奉天 (26_27) 同 = 撫順 = 奉天 = 新京 (28_29) 同 = 吉林 (30) 同 = 哈爾賓 (31_6/2) 同 = 齊齊哈爾 (3) 同 = (4) = 鞍山 = 湯崗子 (5) 同 = 旅順 (6) 同... 大連 (7_8) 同 ~ (9) ~ (10) ~ 門司 = (11) = 東京	群馬県産品の販路拡張のため県商工課長と県内各地の織物組合代表計12名を派遣した報告書。
140	西条欣吾 (1937)『満鮮の瞥見』坂出: 自家出版 63頁	19 (5:12)	(1929/5/7) 坂出 = ? 下関 ~ (8) ~ 釜山 = 大邱 = (9) = 京城 = 仁川 = 京城 (10_11) 同 = (12) = 平壤 = 安東 (13) 同 = 奉天 = (14) = 長春 = 哈爾賓 (15) 同 = (16) = 長春 = 奉天 (17※19) 同 = 營口 (20) 同 = 大連 (21) 同 ? 旅順 ? 大連 (22_23) 同 ~ (24) ~ (25) ~ 下関 = 宇野 ~ 高松 ~ 坂出 ※奉天滞在中、鉄道で撫順往復。	坂出町商工会有志9名の視察旅行。四国民報に掲載。
141	中島正國 (1937)『鮮満雑記』鎌倉: 自家出版 99頁	21 (5:12)	(1936/10/3) 鎌倉 = (4) = 下関 ~ 釜山 = (5) = 京城 = (6) = 平壤 = 奉天 (7_8) 同 = 撫順 = 奉天 = 新京 (9) 同 = (10) = 哈爾賓 (11) 同 = 北安 (12) 同 = 齊齊哈爾 (13) 同 = (14) = 大連 (15_16) 同... 旅順... 大連 = (17) = 安東 = (18) = 慶州 = 釜山 ~ (19) ~ 下関 = [中略] (23) = 鎌倉	著者は鶴岡八幡宮官司。内務省神社局の命により在満郷土部隊を慰問。
142	日本旅行会編 (1937)『鮮満(北支)の旅—記念写真帳—』東京: 日本旅行会 28頁	17 (4:10)	(1937/5/6) 東京 = (7) = 下関 ~ 釜山 (8) 同 = 京城 (9) 同 = 清津 = 羅津 = 雄基 (10) 同 = 吉林 (11) 同 = 新京 (12) 同 = 哈爾賓 (13) 同 = (14) = 撫順 = 奉天※ ※A班 (15) 奉天 = 鞍山 = 奉天 (16) 同 = 熊岳城 (17) 同 = 旅順... 大連 (18_19) 同 ~ (20) ~ (21) ~ 下関 = (22) = 東京 ※B班 (15) 奉天 (16) 同 = 山海関 (17) 同 = 北平 [中略] (20) 天津 = 奉天 = (21) = 大連 = 旅順... 大連 (22_23) 同 ~ (24) ~ (25) ~ 門司 ~ (26) ~ 神戸	日本旅行会による団体旅行 (154名) の記念誌。日数はA班のもの。
143	福德生命保険株式会社編 (1937)『文部省推選派遣教育家の見たる鮮満事情 昭和十二年版』大阪: 福德生命保険株式会社 220頁	22 (9:14)	(1936/5/14) 下関 ~ 釜山 (15) 同 = 京城 (16) 同 = 仁川 = 京城 (17) 同 = 清津... 羅津... 雄基 (18) 同 = 図們 = (19) = 吉林 = 新京 (20) 同 = (21) = 哈爾賓 (22_23) 同 = 齊齊哈爾 (24) 同 = 奉天 (25_27) 同 = 撫順 = 奉天 = 湯崗子 (28) 同 = 鞍山 = 營口 (29) 同 = 大連 (30_31) 同... 旅順 ? 大連 = (6/1) = 平壤 (2) 同 = (3) = 慶州... 釜山 (4) 同 ~ 下関	福德生命保険会社の教育家派遣事業の第10回目。参加者28名は全員が女性教員。
144	吉岡栄亮 (1937)『鮮満紀行』大総(千葉県): 自家出版 13丁	23 (10:12)	(1937/5/7) 横芝 = 東京 = (8) = 下関 ~ 釜山 = (9) = 仁川 = 京城 (10) 同 = (11) = 外金剛 ? 元山 ? (12) ? 清津 ? 羅津 ? 雄基 (13) 同 = 吉林 (14) 同 = 新京 (15) 同 = (16) = 哈爾賓 (17) 同 = (18) = 奉天 (19) 同 = 撫順 = 本溪湖 = 奉天 (20) 同 = 鞍山 = 湯崗子 (21) 同 = 金州 = 大連 (22) 同... 旅順... 大連 (23) 同 = (24) = 安東 = 平壤 (25) 同 = (26) = 慶州 = 釜山 (27) 同 ~ 下関 = [中略] (29) = 横芝	「鮮満視察旅行団」に参加とあるが主催者・参加人数は不明。
145	岩崎晴子 (1938)『鮮満に旅して』東京: 竹柏会 94頁	27 (3:15)	(1936/9/7) 東京 = (8) = 神戸 ~ (9) ~ 下関 ~ (10) ~ (11) ~ 大連... 旅順... 大連 (12_13) 同 = 奉天 (14_15) 同 = 撫順 = 奉天 (16_20) 同 = (21) = 新京 > 哈爾賓 (22) 同 = (23) = 奉天 (24_25) 同 = (26) = 平壤 = 京城 (27) 同 = 仁川 = (28) = 釜山 ~ 下関 = [中略] (10/3) = 東京	著者は佐佐木信綱を中心とする和歌の会・竹柏会に属す。奉天に赴任した夫を訪問。
146	大橋 克 (1938)『満鮮北支紀行』津: 自家出版 73頁	41 (2:26)	(1938/2/19) 津 = [中略] (23) 新潟 ~ (24) ~ (25) ~ 清津 = 図們 (26) 同 = 牡丹江 (27) 同 = 鶏西 (28) 同 = 黒台 (3/1) 同 = 密山 (2) 同 = 林口 (3) 同 = 千振 (4) 同 = 弥栄 = 佳木斯 (5_6) 同 = 牡丹江 (7) 同 = 哈爾濱 (8_9) 同 = 天理村 ? 哈爾濱 = (10) = 新京 = 吉林 = 江密峰 = 下九台 (11) 同 = 新京 (12_13) 同 = 公主嶺 = 奉天 (14_15) 同... 撫順 = 奉天 = (16) = 大連 (17) 同... 旅順 ? 大連 (18_19) 同 ~ (20) ~ 天津 [中略] (25) 北京... 承德 (26_27) 同 = (28) = (29) = 京城 = 釜山 ~ (30) ~ 下関 = (31) = 津	帝国農会が8府県の農会より視察者を選ばし満洲移民農業を視察(9名)。著者は三重県農会幹事。伊勢新聞に掲載。

147	岸加八郎・松島栄吉 (1938)『北支満鮮 視察報告日記』金 沢:マルサン織物工 業組合 41頁	27 (3:17)	(1938/3/13)?=(14)=東京[中略](17)神戸～(18)～門司～(19) ～(20)～大連(21)同…旅順?大連(22)同?(23)=山海関=天津 [中略](31)北京=(4/1)=奉天(2)同=撫順=奉天(3)同=(4)= 新京(5)同=(6)=京城(7_8)同=	中国の人造絹織物の 輸入関税に関する視 察。2人旅。
148	東京市派遣小学校長 学事視察団 (c1938)『満鮮支視 察旅行報告書』(謄 写版) 148頁	29 (4:21)	(1938/7/27)東京=(28)=下関～(29)～釜山=京城(30)同=(31) =清津…羅津(8/1)同=図們=牡丹江(2)同=弥栄(3)同=佳木斯 (4)同=(5)=哈爾賓(6)同=(7)=新京(8)同=奉天(9)同=撫順 =奉天(10_11)同=山海関=[中略](16)北京=(17)=奉天=湯 崗子(18)同=大連(19)同=旅順=大連(20_21)同～(22)～(23) ～門司～(24)～神戸=東京	東京市の小学校校長 ら16名の視察旅行。 刊行年の記載を欠く。
149	中島真雄 (1938) 『双月旅日記』大船 (神奈川県):自家出 版 101頁	62 (5:46)	(1938/5/13)東京=[中略](17)=下関～釜山=(18)=奉天(19_22) 同=連山関(23)同=奉天(24_26)同=大連(27_30)同=奉天 (31)同=(6/1)=承德(2_3)同=古北口=北京[中略](11)天津= 奉天(12_17)同=新京(18_19)同=吉林=新京(20)同=哈爾賓 (21_23)同>黒河(24)同>哈爾賓(25_26)同～佳木斯(27_29) 同=千振(30)同=牡丹江(7/1_2)同=清津(3)同=(4)=京城= 釜山～(5)～下関=[中略](12)=大船	著者は満洲日報(營 口)の創刊者。雑誌 『盛京時報』の記念に 招待されて奉天を訪 問。
150	新里貫一 (1938) 『事变下の満鮮を歩 む―盲聾者の視察 ―』東京:新報社 397頁	56 (9:44)	(1937/9/7)東京=(8)=大阪(9)同=下関～(10)～釜山(11)同= 大邱(12_?)同=(?)=京城(?_17)同=安東(18_19)同…新 義州=安東(20)同=奉天(21_22)同=(23)=哈爾賓(24)同= (25)=新京(26_29)同=吉林(30_10/4)同=新京(5)同=四平街 (6)同=鄭家屯(7)同=四平街(8)同=奉天(9_14)同=撫順(15_16) 同=遼陽(17_18)同=鞍山*立山*鞍山(19_20)同=營口 (21)=大連(22_29)同…旅順…大連(30)同～(31)～(11/1)～門 司～	著者は盲聾のアメリ カ移民でキリスト者。
151	日本旅行会編 (1938)『鮮満北支 の旅―皇軍慰問・戦 跡巡礼―』東京:日 本旅行会 44頁	23 (4:12)	(1938/5/6)?=(7)=下関～釜山=(8)=京城(9)同=平壤(10)同= 奉天(11)同=(12)=承德(13_14)同=北京[中略](19)天津= (20)=新京(21)同=哈爾賓(22)同=新京=(23)=遼陽=湯崗子 (24)同=大連(25)同…旅順…大連(26)同～(27)～(28)～門司	日本旅行会の団体旅 行(52名)。旅程は所 収の近藤新「鮮満北 支見聞記」による。
152	平野亮平 (1938) 『満支旅行日記』東 京:自家出版	41 (0:17)	(1938/4/21)神戸～(22)～(23)～(24)～大連(25_26)同=新京 (27_29)同>哈爾賓=新京(30)同=奉天(5/1_2)同=鞍山=奉 天…撫順=奉天(3)同=天津[中略](9)天津=(10)=奉天=大連 (11_13)同…旅順…大連(14)同=青島[中略](25)上海～(26)～ 長崎=下関[中略](31)=東京	会社の満支産業視察 の旅。
153	松本佐太郎 (1938) 『鮮満北支たび日記 附・鮮・満・北支の陶 業調査報告』金沢: 自家出版 332頁	35 (3:20)	(1937/5/24)金沢=[中略](28)=下関～釜山=(29)=京城=(30) =平壤=安東(6/1)同=奉天=大連(2_4)同…旅順…大連=(5) =鞍山…湯崗子(6)同=奉天…撫順…奉天(7_8)同=新京(9)同= 哈爾賓(10_11)同=新京=奉天(12)同=承德(13_14)同…古 北口…北平[中略](19)天津=塘沽～(20)～大連(21_23)同～ (24)～(25)～門司～[中略](27)～神戸=金沢	著者は加賀久谷陶磁 器同業組合長。満洲 開催の全国図書館大 会に参加する知人に 同行。金沢市から鮮 満北支陶業視察を委 託される。同じ図書館 大会に参加した旅行 記に#154がある。
154	村松益造 (1938) 『黄塵紀行』甲府: 汲古閣南塘文庫 214頁	25 (2:21)	(1937/5/27)東京=(28)=下関～(29)～釜山=京城(30)同=(31) =奉天(6/1)同>大連(2_4)同…旅順…大連=(5)=鞍山…湯 崗子(6)同=奉天…撫順…奉天(7)同=新京(8_9)同=哈爾賓(10_11) 同=新京=奉天(12)同=承德(13_14)同…古北口(15)[中 略](6/18)天津>大連(19_20)同～	著者は私設図書館を 主宰。日本図書館協 会の全国図書館大会 (大連・奉天・新京・哈 爾賓)に参加。会期後 は北支班と朝鮮班の ツアーがあり、著者は 前者に参加(人数35 名)。同じ図書館大会 に参加した旅行記に #153がある。
155	森田福市 (1938) 『満鮮視察記』広 島:自家出版 306頁	16 (6:9)	(1937/6/12)広島=門司～(13)～(14)～大連…旅順…大連(15) 同=(16)=撫順=奉天(17)同=新京(18_19)同=哈爾賓(20_21) 同=牡丹江(22)同=清津(23)同=(24)=元山=外金剛=(25) =京城(26)同=釜山(27)同～下関=広島	著者は衆議院議員。 広島県商工団体聯合 会長として11名の視 察団を組む。
156	山形県教育会視察団 編 (1938)『満鮮の 旅』山形県教育会 視察団 149頁	24 (6:14)	(1938/8/8)山形=新潟(9)同～(10)～(11)～清津=東京城(12)同= 牡丹江(13)同=弥栄(14)同=(15)=哈爾賓(16)同=新京(17) 同=奉天=(18)=承德(19_20)同=(21)=大連(22)同…旅順? 大連=(23)=鞍山=奉天(24)同=撫順=奉天=(25)=平壤(26) 同=京城(27)同=内金剛(28)同=京城=(29)=慶州=釜山～ (30)～下関=(31)=東京=山形	尋常小学校・高等小 学校の校長・教頭ら10 名の視察団。

157	大阪府立中等学校教 育視察団編 (1939) 『朝鮮・満洲・北支視 察旅行記』教育時 報(大阪府教育会) 14巻8号付録 57頁	20 (3:8)	(1939/3/21) 大阪＝下関～(22)～釜山＝京城(23)同＝平壤(24)同 ＝(25)＝哈爾賓(26)同＝新京(27)同＝(28)＝奉天(29)同＝天津 [中略](4/3) 北京＝(4)＝大連(5)同…旅順…大連(6)同～(7)～ (8)～門司～(9)～大阪	大阪府の中等学校・ 工学校らの教員ら10 名による視察旅行。
158	岡山県鮮満北支視察 団編 (1939)『鮮満 北支視察概要』岡 山県教育会 56頁	24 (5:12)	(1939/10/1) 岡山＝敦賀～(2)～(3)～清津＝朱乙(4)同＝南陽＊ 図們＝牡丹江(5)同＝(6)＝佳木斯＝閭家(7)同＝林口(8)同＝龍爪 ＝(9)＝哈爾賓(10)同＝新京(11)同＝(12)＝撫順＝奉天(13)同＝ (14)＝天津[中略](18) 北京＝塘沽～(19)～大連(20)同…旅順？ 大連＝(21)＝平壤(22)同＝京城(23)同＝釜山～(24)～下関＝岡 山	岡山県学務課・岡山 県教育会主催の14名 の視察団。
159	外島里有 (1939) 『満鮮一萬軒』東 京:梶浦隆定 172頁	35 (6:19)	(1939/5/6) 敦賀～(7)～(8)～清津(9)同＝(10)＝千振＝佳木斯 (11)同＝鶴立崗＝佳木斯＝(12)＝虎林(13)同＝密山(14)同＝黒 台＝林口(15)同＝龍爪＝牡丹江(16)同＝青雲＝哈爾賓(17_19)同 ＝山河屯(20)同＝四家房＝吉林(21)同＝新京(22_24)同＝奉天 (25)同＝(26)＝大連(27)同…旅順…大連(28)同＝平壤(29)同＝ 京城(30)同＝(31)＝大邱＝釜山～下関(6/1)同＝(2)＝敦賀	著者は敦賀氣比神社 の神主。拓務省囑託と して満洲移民の神社 を視察。
160	木村富士 (c1939) 『鮮満地方出張視察 報告書』大阪:晒粉 販売株式会社 79頁	20 (9:10)	(1939/4/10) 大阪＝(11)＝下関～(12)～釜山＝京城(13)同＝(14) ＝興南(15)同＝(16)＝吉州＝清津(17)同＝上三峰＝開山屯(18) 同＝上三峰＝南陽＝石岬(19)同＝樺林(20)同＝図們(21)同＝敦化 ＝新京(22)同＝(23)＝奉天(24)同＝(25)＝安東(26)同＝(27)＝ 京城＝釜山～(28)～下関＝(29)＝大阪	晒粉販売株式会社に よる製紙業界に関する 調査旅行の報告書。 参加人数は不明。
161	第十三回全国中等学 校地理歴史教員協議 会編 (1940)『全国 中等学校地理歴史教 員第十三回協議会及 満洲旅行報告書』 同協議会 370頁	28 (2:25)	※A班 (1939/7/23) 門司～(24)～(25)～大連(26)同＝旅順＝ (27)＝奉天＝撫順＝奉天(28_29)同＝新京 ※B班 (1939/7/23) 新潟～(24)～(25)～清津…羅津＝雄基(26) 同＝延吉(27)同＝敦化＝吉林(28_29)同＝新京 ※共通 新京(30_8/3)同＝哈爾賓(4)同＝ ※Ⅰ班 (5)＝佳木斯(6)同＝弥栄＝佳木斯(7)同＝牡丹江(8)同＝ 哈爾賓(9)同＝齊齊哈爾(10)同＝(11)＝満洲里(12)同＝(13)＝齊 齊哈爾＝(14)＝洮南(15)同＝鄭家屯＝通遼(16)同＝(17)＝承德 (18)同＝錦州(19)同＝葫蘆島＝錦州＝奉天[解散] ※Ⅱ班 (5)＝奉天(6)同＝錦州(7)同＝承德(8_9)同[解散]	編纂した協議会は東 京高等師範学校に事 務局を置く組織。新京 で開催した大会に229 名が参加(ほかに在満 教員33名)。往路・復 路をそれぞれA班B 班、Ⅰ班Ⅱ班に分け て編成。日数はB班・ Ⅰ班のもの。
162	大陸視察旅行団編 (1940)『大陸視察 旅行団所感集』東 京:大陸視察旅行団 274頁	21 (7:12)	(1939/7/31) 下関～(8/1)～釜山＝慶州(2)同＝大邱＝京城(3_4) 同＝平康＝(5)＝清津(6)同…羅津＝雄基(7)同＝図們＝牡丹江 (8)同＝(9)＝哈爾賓(10_11)同＝四家房＝吉林(12)同＝新京(13 _14)同＝奉天(15)同＝撫順＝奉天(16)同＝大連(17)同…旅 順…大連(18)同～(19)～(20)～下関	東京女子高等師範学 校の学生ら43名の視 察旅行。引率代表は 飯本信之。本文注13 参照。
163	春山行夫 (1940) 『満洲風物誌』東 京:生活社 450頁	29 (?:?)	(1939/10/26) 東京＝(27)＝下関～釜山＝(28)＝(29)＝奉天＝新 京(30_11/2)同＝公主嶺＝新京＝(3)＝哈爾賓(4_5)同＝(6)＝ 大連…旅順…大連(7)同…旅順？大連＝(8)＝奉天(9)同＝[あと がきによれば承德, 北京, 天津, 奉天, 北京を経由して11/23帰国]	著者は詩人。日満中 央協会が主催した雑 誌記者団満洲国調査 隊(30数名)に哈爾賓 まで参加。雑誌『セル パン』に掲載。
164	石橋湛山 (1941) 『満鮮産業の印象』 東京:東洋経済新報 社 311頁	47 (13:31)	(1940/4/29) 東京＝[中略](5/1) 下関～(2)～釜山＝？(3) 京城(4) 同＝(5)＝興南…長津湖？(6)？城津(7_8)同＝新京(9_10)同＝ 吉林＝新京(11)同[この間、哈爾賓、牡丹江を訪問]＝弥栄(15)同＝ 千振(16)同＝？(17)？＝龍爪＝東安(18)同＝虎頭＝東安(19)同 ＝(20)＝牡丹江＝哈爾賓(21_22)同？天理村？哈爾賓(23)同＝新 京(24)同＝安東(25)同…水豊～安東(26)同＝本溪湖(27)同＝奉 天(28)同？撫順(29)同＝湯崗子(30)同？鞍山？湯崗子(31)同＝ 大連(6/1※4)同＝新京(5_7)同＝清津(8_9)同＝朱乙(10)同？ 茂山(11)同？清津(12)同～(13)～(14)～新潟 ※この間旅順を訪問	ダイヤモンド社の石 山賢吉ら5名で視察旅 行。石山は遅れて『紀 行 満洲・台湾・海南 島』[#172]を刊行。
165	磯西忠吉 (1941) 『鮮満北支ひとり旅』 青梅(東京府):大正 堂印刷部 170頁	34 (5:15)	(1939/7/10) 青梅＝(11)＝敦賀～(12)～(13)～清津＝南陽？図們 ＝(14)＝吉林＝新京(15)同＝哈爾賓(16_18)同＝齊齊哈爾(19) 同＝(20)＝奉天＝(21)＝山海関(22)同＝北京[中略](28) 天津＝ 塘沽～(29)～大連…旅順…大連(30)同＝金州＝大連(31_8/1) 同＝(2)＝奉天＝撫順＝奉天＝(3)＝平壤＝京城(4_5)同＝(6)＝ 慶州＝釜山～(7)～下関[中略](12)＝青梅	著者は国語の教員 か、国語学や文化論 の著作あり。教育視 察の許可を得て出張。 本書を職場の学校生 徒に配布。

166	市村與市 (1941) 『鮮・満・北支の旅― 教育と宗教―』名古屋: 一粒社 122頁	36 (4:9)	(1941/5/25)名古屋＝[中略](28)下関＝萩＝下関～(29)～釜山＝ 京城(30_31)同＝平壤(6/1)同＝奉天(2_3)同＝新京(4_5)同＝ 哈爾賓(6)同＝大連(7)同…金州…大連(8_9)同～(10)～塘沽 [中略](26)青島～(27)～(28)～門司＝(29)＝名古屋	著者は金城女子専門 学校(金城学院大学 の前身)校長。
167	今村太平 (1941) 『満洲印象記 附慶 州紀行』京都:第 一芸文社 194頁	19 (1:16)	(1939/10/12)＝神戸～(13)～(14)～(15)～大連…旅順(16)同… 大連(17)同＝奉天?撫順＝奉天(18_19)同＝新京(20_21)同＝ 白城子(22)同＝葛根廟＝(23)＝齊齊哈爾＝哈爾賓(24_25)同＝奉 天(26_27)同＝大連(28)同…旅順＝大連(29)同＝奉天(30)同＝ 安東＝	著者は映画批評家。 『キネマ旬報』の20周 年記念企画として満 洲を訪問。参加人数 は不明。
168	熊谷太郎 (1941) 『朝鮮の旅』福井: 坪川信一 122頁	10 (10:0)	(1941/3/15)～釜山＝京城＝咸興(16)同…長津(17_19)同…咸 興(20)同＝京城(21_22)同＝(23)＝定州＝水豊＝(24)＝京城＝ 釜山～	著者は熊谷組副社 長。長津付近の発電 工事の見積りに赴く 父に同行。
169	松井正明 (1941) 『鮮満一巡 附転業 対策卑見』千葉:千 葉東亜経済研究会 91頁	15 (4:9)	(1941/4/30)東京＝神戸(5/1)同＝下関～(2)～釜山＝京城(3)同 ＝大連(4_5)同…旅順?大連＝(6)＝奉天(7)?(8)奉天＝新京 (9)同＝哈爾賓(10_11)同＝羅津(12)同～(13)～(14)～新潟	著者は楽器店社長。 全国商工会議所理事 会(大連)に参加する 地元の理事に同行。
170	鷺尾よし子 (1941) 『満支紀行 和平 来々』東京:牧書 房 424頁	35 (3:26)	(1938/9/1)東京＝(2)＝神戸～(3)～下関～(4)～(5)～大連(6_8) 同＝(9)＝奉天＝(10)＝新京(11_12)同＝(13)＝哈爾賓＝(14) ＝佳木斯(15)同＝弥栄(16)同＝牡丹江(17)同＝綏芬河(18)同＝ 牡丹江＝(19)＝哈爾賓(20_22)同＝(23)＝新京(24)同＝(25)＝ 奉天＝(26)＝大連(27)同…旅順…大連(28)同＝金州＝奉天(29) 同＝(30)＝京城(10/1_2)同＝釜山～(3)～下関＝神戸＝京都(4) 同＝(5)＝東京	著者は県人雑誌『秋 田』の刊行に関わる。 1938年の単独行「満 洲旅行」と1939年の秋 田県人5名の旅「北満 の郷土部隊を訪ねて」 を含む。後者では従 軍中の息子に面会。
		32 (0:24)	(1939/10/7)東京＝(8)＝神戸～(9)～(10)～大連(11_12)同＝ (13)＝牡丹江＝※1(14_16)同＝綏芬河(17)同＝(18)＝※2＝ (19)＝勃利＝虎山＝(20)＝哈爾賓(21_24)同＝新京(25)同＝吉 林(26)同＝奉天(27)同＝(28)＝大連(29_11/2)同～(3)～(4)～ 門司～(5)～神戸[中略](7)＝東京 ※は伏せ字だが※1は綏芬河の近く、※2は林口の近くとみられる。	
171	馨親会編 (c1941) 『滿鮮遍路』(発行 者不明)(通し頁番 号なし)	19 (3:13)	(1941/3/18)東京＝(19)＝下関～釜山＝(20)＝新京(21_22)同＝ 吉林＝新京(23)同＝哈爾賓(24_25)同＝湯崗子(26)同＝鞍山＝大 連(27)同…旅順…大連(28)同＝(29)＝奉天＝撫順＝奉天(30_4/1) 同＝(2)＝京城(3)同＝釜山～(4)～下関＝山口	馨親会による満鮮見 学団13名の文集。井 上馨ゆかりの団体とみ られる。
172	石山賢吉 (1942) 『紀行 満洲・台湾・ 海南島』東京:ダイ ヤモンド社 600頁	29 (7:20)	(1940/4/29)東京＝[中略](5/1)下関～(2)～釜山＝京城(3_4) 同…仁川…京城＝興南(5)同…長津湖(6)同…咸興＝城津(7)同 ＝(8)＝新京(9_10)同＝吉林＝新京(11)同＝哈爾賓(12_13)同 ＝牡丹江(14)同＝弥栄(15)同＝千振(16)同＝龍爪＝林口(17)同 ＝東安(18)同＝虎頭＝東安(19)同＝(20)＝哈爾賓(21_22)同… 天理村…哈爾賓(23)同＝新京(24)同＝安東(25)同…水豊＝安東 (26)同＝本溪湖(27)同＝撫順[以後、鞍山、大連、旅順、奉天、新京 を訪問しているが、日程は不明確]	著者は経済誌『ダイヤ モンド』の創刊者。『東 洋経済』の石橋湛山ら と5名で視察旅行した 記録を本書前半に収 録。石橋は#164を刊 行。
173	井上友一郎・豊田三 郎・新田潤 (1942) 『満洲旅日記―文学 紀行―』東京:明 石書房 260頁	34 (3:32)	※井上 (1941/10/19)東京＝(20)＝下関～釜山＝(21)＝奉天(22) 同＝(23)＝哈爾賓(24_26)同＝(27)＝北安＝孫吳(28_30)同＝ 黑河(31_11/3)同＝(4)＝哈爾賓(5)同＝新京(6_11)同＝奉天 (12_13)同＝(14)＝承德(15)同＝(16)＝奉天(17)同＝大連(18_21) 同>京城>博多 ※豊田 (1941/10/15)東京＝(16)＝下関～釜山＝(17)＝京城(18_19) 同＝平壤＝(20)＝奉天(21_22)同＝(23)＝哈爾賓(24_25) 同＝(26)＝鉄山包(27_28)同＝佳木斯(29_30)同＝晨明＝佳木 斯(31)同?弥栄?佳木斯＝(11/1)＝牡丹江＝柳樹＝横道河子＝ (2)＝哈爾賓(3_4)同＝新京＝(5)＝奉天(6)同＝(7)＝釜山～下 関 ※新田 (1941/10/15)東京＝(16)＝下関～釜山＝(17)＝京城(18_19) 同＝平壤＝(20)＝奉天(21_22)同＝(23)＝哈爾賓(24_26) 同＝(27)＝牡丹江＝山市(28)同…牡丹江(29)同＝龍爪(30)同＝ 林口(31)同＝黒台(11/1)同＝林口＝佳木斯(2)同＝弥栄＝佳木斯 (3)同＝(4)＝牡丹江(5)同＝柳樹＝横道河子＝(6)＝哈爾賓[11/9 に新京で新田に合流、11/13より大連に]	大陸開拓文芸懇話会 会員として拓務省委 嘱の視察旅行。3名の 紀行文を併載する。3 名はいったん奉天に 集合し、その後哈爾賓 から別行動となった。 左に示した日数は井 上のもの。

174	山形県教育会視察団 (1942)『満鮮2600 里』昭和十七年山 形県教育会視察団 148頁	27 (4:16)	(1942/7/11)山形＝酒田＝(12)＝敦賀～(13)～(14)～清津＝(15)＝牡丹江(16)同＝千振(17)同＝佳木斯(18_19)同＝鉄山包＝綏化(20)同＝北安(21)同＝齊齊哈爾(22)同＝新京(23_24)同＝奉天(25)同＝撫順？奉天(26)同＝大連(27_28)同＝旅順＝大連＝(29)＝奉天＝宮原＝四台子(30)同＝(31)＝京城＝内金剛(8/1)同＝京城(2)同＝釜山～(3)～下関[中略](6)＝山形	山形県教育会より国 民学校の校長ら9名を 派遣。
175	藤本実也 (1943) 『滿支印象記』東 京:七丈書院 318頁	36 (2:11)	(1941/10/15)長崎～(16)～上海[中略](11/4)青島～(5)～大連(6_7)同＝熊岳城(8)同＝湯崗子(9)同＝新京(10_11)同＝哈爾濱(12)同＝(13)＝奉天＝撫順？(14)？＝五龍背(15)同＝安東＝(16)＝京城(17)同＝釜山～(18)～下関＝(19)＝横浜	著者は養蚕研究者。 東亜研究所の依頼に より中国の蚕糸業を視 察。

-
- ・配列は刊行年・著者名の順に依る。ただし刊行年が推測によるものは年次に c を付し、その年の末尾に置いた。著者名の読みは推測に依るものがある。
 - ・日数は旅行記に記された旅程の全日数を示すものであり、帰途の最後が省略された場合にはその分を含まない。日数の下に付した(:) は、朝鮮半島:中国東北部(関東州・満洲)での滞在日数を示す。
 - ・旅程の(/ /) は年月日を示し、年・月が前日と同じ場合には日のみを示す。同一地に2日以上滞在する場合は、「_」で滞在日の始まりと終わりを示した。地名は滞在した場所を示すものであり、都市内や都市近郊への移動、ならびに列車の乗り換えや車窓からの言及については含まない。地名の表記は基本的には当該の旅行記の記載に従ったが、分析の都合上、下関(下ノ関、馬関)や哈爾濱(ハルビン、ハルビン)のように統一したものもある。交通手段が明記されるか、確実に推測できる場合には、船舶(～)、鉄道(＝)、自動車・バス(…)、航空機(>)、馬車・人力車・轎・徒歩(*)の記号で示した。なお日本内地や中国の他地域の旅程については中略した。
 - ・備考欄では、旅行人数が1人旅以外場合、その人数ないし参加者に触れた。